蔵人遺跡発掘調査報告書Ⅱ

－蔵人遺跡第 17 次発掘調査－

平成 21（2009）年 3 月

吹田市教育委員会

序

蔵人遺跡は、中世の荘園集落として広く知られている遺跡です。その存在は、昭和36(1961)年に名神高速道路の建設現場から、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器や土師器などが採集されたことにより、その存在が知られることとなりました。その後の発掘調査の進展により、弥生時代から中世にわたる複合遺跡であることがわかっています。

今回、報告いたします蔵人遺跡第 17 次発掘調査では、古墳時代から室町時代にかけての生活の一端を知るための重要な資料を数多く確認することができました。なかでも注目されるのが、平安時代後期から室町時代の条里型地割にかかわる耕作遺構がいくつもの時期にわたって存在していたことが明らかになったことです。

本書は、この発掘調査で得られた成果を報告しておりますが、これにより市民の皆様が地域の歴史を知っていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にさいしましては、地元をはじめとする多くの方々から、御協力と御理解を得ました。深く感謝いたします。

平成21(2009)年3月

吹田市教育委員会

教育長 田 口 省 一

例　言

1．本書は、平成８(1996)年度に吹田市江坂町２丁目588－３において共同住宅建築に伴う事前調査として実施した、蔵人遺跡第17次発掘調査の成果をまとめたものである。

2．発掘調査は、吹田市立博物館文化財保護係田中充徳・堀口健二が担当した。整理作業については、吹田市岸部北４丁目10番１号、吹田市立博物館内資料整理室において実施し、資料の保管も同所において行っている。

3．本報告書の執筆・編集作業は堀口健二が行った。

4．本文中の遺物番号は、観察表・挿図・写真図版とも統一した。遺物の縮尺は、土器・木製品・金属製品・石製品は1/4、銭貨・石器は3/4をそれぞれ基本とした。

5．図中の方位は磁北を示し、標高はT.P.(東京湾標準潮位)を示す。

6．発掘調査においては、事業者である大洋ホーム株式会社をはじめ、多くの方々から多大な協力を得ました。記して感謝いたします。

7．発掘調査および資料の整理には、以下の諸氏の参加を得た。

(発掘調査)

木村達、福住日出雄、赤塚亨、五十嵐進、小田尚幸、河野慶子、田中淳仁、野口佳子

服部裕美子、福海さやか、正岡大実

(整理作業)

花崎晶子、佐藤健太郎、秋山芳恵、小川里美、木舩安紀子、林裕子、宮武聡

目　　次

第Ⅰ章　位置と環境……1
(1)　地理・歴史的環境……1
(2)　蔵人遺跡の既往調査……2
第Ⅱ章　調査の経過……4
第Ⅲ章　調査の成果……5
(1)　基本層序……5
(2)　検出遺構と遺構出土遺物……13
(3)　遺物包含層出土の遺物……43
第Ⅳ章　まとめ……59
(1)　条里型地割と畝・溝・畦畔について……59
(2)　建物について……61
(3)　井戸・大型土坑について……62
(4)　土地利用の変遷……62

写真図版目次

図版1　A区全景(1)
図版2　A区全景(2)
図版3　A区各遺構
図版4　B区全景(1)
図版5　B区全景(2)
図版6　B区全景(3)
図版7　B区全景(4)
図版8　B区全景(5)
図版9　B区第2面溝SD5
図版10　B区各遺構(1)
図版11　B区各遺構(2)
図版12　C区全景
図版13　D区全景(1)
図版14　D区全景(2)
図版15　D区各遺構
図版16　土層断面
図版17　発掘調査風景
図版18　土師器・須恵器
図版19　土師器皿
図版20　瓦器・瓦質土器
図版21　陶磁器類
図版22　木製品
図版23　金属製品・石器・その他

挿 図 目 次

第１図　周辺の遺跡分布図……2
第２図　蔵人遺跡発掘調査地周辺図……3
第３図　調査区配置図……4
第４図　Ａ区南壁・Ｃ区東壁土層断面図…6
第５図　Ｂ区南壁土層断面図……8
第６図　Ｄ区南壁土層断面図……10
第７図　第１面遺構平面図……14
第８図　第１面遺構出土遺物……15
第９図　第２面遺構平面図……16
第10図　Ｂ区ＳＤ５遺物出土状況図……18
第11図　Ｂ区ＳＤ５出土遺物(１)……19
第12図　Ｂ区ＳＤ５出土遺物(２)……20
第13図　Ｂ区ＳＫ１平面・断面図……21
第14図　Ｄ区ＳＥ１平面・断面図……21
第15図　Ｂ区Ｐ１平面・断面図……22
第16図　第２面遺構出土遺物……22
第17図　第３面遺構平面図……23
第18図　Ｂ区ＳＢ１平面・断面図……24
第19図　Ｂ区第３面柱穴平面・断面図…24
第20図　Ａ区ＳＥ２平面・断面図……25
第21図　Ｄ区ＳＫ６平面・断面図……26
第22図　Ｂ区土器群ＳＸ１出土状況図…26
第23図　第３面遺構出土遺物……27
第24図　第４面遺構平面図……28
第25図　Ｂ区ＳＸ２平面・断面図……29
第26図　ＳＸ２柱穴断面図……30
第27図　Ｂ区第４面柱穴平面・断面図…30
第28図　Ｂ区ＳＤ15遺物出土状況図……30
第29図　Ｄ区ＳＫ11平面・断面図……31
第30図　第４面遺構出土遺物……31
第31図　第５面遺構平面図……32
第32図　Ａ区ＳＥ３平面・断面図……33
第33図　Ａ区ＳＫ15平面・断面図……34
第34図　Ｄ区ＳＫ16平面・断面図……35
第35図　Ｄ区ＳＤ25断面図……36
第36図　Ｂ区第５面柱穴平面・断面図…37
第37図　第５面遺構出土遺物……38
第38図　第６面遺構平面図……39
第39図　Ｂ区Ｐ58木製品槌出土状況図…40
第40図　Ｂ区第６面柱穴平面・断面図…40
第41図　第６面遺構出土遺物……41
第42図　第７面遺構平面図……42
第43図　Ｂ区ＳＢ２平面・断面図……43
第44図　Ｂ区第７面柱穴平面・断面図…43
第45図　Ｂ区ＳＫ17平面・断面図……44
第46図　Ｂ区第ＳＫ18平面・断面図……45
第47図　第７面遺構出土遺物……45
第48図　第８面遺構平面図……46
第49図　ＳＸ４出土遺物……47
第50図　第９面遺構平面図……48
第51図　第10面遺構平面図……49
第52図　Ｂ区第11面遺構平面図……50
第53図　第２～４層出土遺物……50
第54図　Ｂ区ＳＸ１出土遺物……51
第55図　第５層出土遺物……51
第56図　第６層出土遺物……52
第57図　第７～16層出土遺物……53
第58図　瓦実測図……54
第59図　木製品実測図(１)……55
第60図　木製品実測図(２)……56
第61図　石製品実測図……56
第62図　銭貨拓本……57
第63図　石器実測図……57
第64図　豊嶋郡条里と蔵人遺跡……59

第Ⅰ章　位置と歴史

(1) 地理・歴史的環境(第１図)

吹田市は大阪府の北部に位置し、南は神崎川を隔て大阪市に隣接し、北は箕面市・茨木市、東は摂津市、西は豊中市とそれぞれ境界を接している。吹田市域を地形的に見ると、北半部は更新世に形成された標高80m以下のなだらかな千里丘陵が占める。南半部には、主に河川の沖積作用で形造られた平野部が広がる。

これをもう少し微視的に見ると、ＪＲ京都線吹田駅付近から南側にかけては、潮流によって運ばれてきた海砂で形成された「吹田砂堆」と呼ばれる舌状の微高地がある。この吹田砂堆を境に、東側は淀川や安威川によって作られた安威川低地、西側は高川・神崎川・糸田川によって作られた神崎川低地とに分けられる。

さて、吹田市では、現在までのところ旧石器時代から近世にかけての遺跡が146箇所確認されている。その特徴としては、古墳時代に千里丘陵上において須恵器生産窯が数多く築かれ、その後も奈良時代に七尾瓦窯跡、平安時代に吉志部瓦窯跡といった瓦の生産窯が展開していたことが挙げられる。一方、平野部には、蔵人遺跡をはじめ、垂水南遺跡、五反島遺跡など、弥生時代から中世にかけての集落遺跡が多く確認されている。

本書で報告する発掘調査では、主に中世の条里型地割に関わる良好な資料を得る事が出来たので、ここでは蔵人遺跡と当遺跡が所在する豊嶋郡条里に関わる歴史と遺跡の動向を中心に紹介する。吹田市域の垂水・榎坂地区は摂津国豊嶋郡に属していたが、当地では平安時代に、東寺領垂水荘や春日社領垂水西牧などの荘園が成立し、寺社の重要な荘園として室町時代まで存続した。

豊島郡条里とは、現在の吹田市西部から豊中市東部にかけての広大な範囲に及ぶ条里地割遺構である。豊島郡条里がいつ出来たのか正確な年代は判っていないが、文治５(1189)年の「春日社領垂水西牧榎坂郷田畠取帳」(今西家文書)に条里地割に関する詳細な記述が見られることから遅くともこの頃に形成されていたことを窺わせる。

この垂水荘には蔵人村が知られているが、この蔵人村は応永10(1403)年の「春日社領榎坂郷名主百姓等申状案」(東寺百合文書)に「近比垂水庄 号蔵人村 成荒井庄」の記述が見え、垂水荘内の村落の一つであったことがわかる。蔵人村は、鎌倉時代に千里丘陵の縁辺に居住していた、榎坂郷の農民が出作地のある垂水荘内に移り住んで形成した村落と考えられている。康永２(1343)年、至徳３(1386)年、寛正４(1463)年の３回にわたって作成された土地台帳の記載より、室町時代には荘域の北端(現在の江坂町・豊津町付近)に屋敷地が集中したようである。

次に豊嶋郡条里に関わる具体的な遺跡の様相を概観したい。豊嶋郡条里は、吹田市西半部から豊中市東半部にかけてまたがる、ほぼ真北に方位をとる広大な条里型地割である。昭和57(1982)年の吹田市文化会館の建設に先立つ発掘調査では、１条２里１坪と12坪の条里東限を検出し、平安末から鎌倉時代前半の両岸に堤防を備え矢板で護岸された溝や樋などが出土した。

第１図　周辺の遺跡分布図（上方が北　S＝1/25,000）

昭和53(1978)年の垂水南遺跡・第５次調査(２条２里５坪)では、平安時代初めの河道内から「垂庄」「中庄」と記された土師器杯の墨書土器が出土した。この墨書土器は平安時代後期から中世の垂水荘域とは離れた位置での出土であり不明な点もあるが、史料上弘仁３(812)年に成立したとされる荘園の存在を示す資料が発掘調査によって出土したことは意義深い。

榎坂遺跡・第６次調査では、条里型地割と方向を同じくする耕作溝、井戸の他、緑釉陶器・灰釉陶器・白磁・製塩土器・牛馬の骨などの遺物が多く出土しており、垂水西牧との関連を示唆させる。また榎坂遺跡・第７次調査では、堤防を備えた大溝の右岸が出土しており、条里型水田に伴う基幹水路の可能性がある。

(2)　蔵人遺跡の既往調査(第２図)

蔵人遺跡は、昭和36(1961)年の吹田市を縦貫する名神高速道路の工事現場から、古墳時代から奈良時代にかけての須恵器・土師器などが発見されたことで、その存在が知られるようになった。昭和48(1973)年には蔵人遺跡として吹田市文化財地図に明記されたが、永らくの間、本格的な発掘調査の機会には恵まれなかった。

昭和52(1977)年に始まった第１次調査(４条１里26・27・34坪)では、古墳時代から中世にわたる遺構・遺物が出土した。とりわけ鎌倉時代中頃から室町時代全般にわたる井戸群・水路・石

組溝や、数多くの土器・陶磁器類、それに瓦などが出土した(吹田市1979)。この発掘調査により、蔵人遺跡は、応永10(1403)年の「春日社領榎坂郷名主百姓等申状案」(東寺百合文書)に登場する「蔵人村」に関連する遺跡として知られるところとなった。

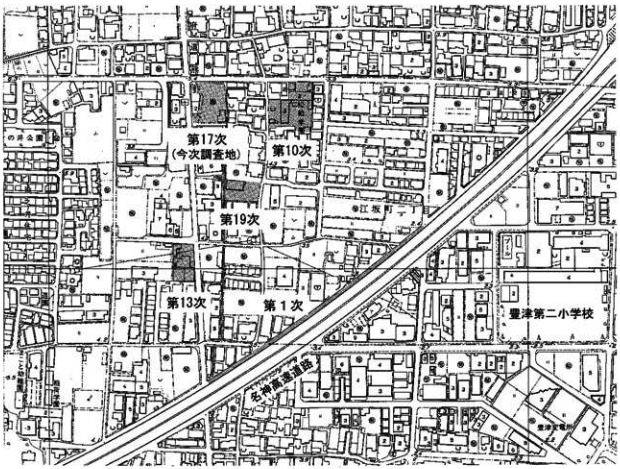
第2・6次調査(4条1里26坪)では、鎌倉時代(13世紀後半)の鍛冶工房跡と見られる建物群と、大量の炭や鉱滓が出土し、村落内で鍛冶生産が行なわれていたことが確認された(吹田市1986)。

また今次調査地に隣接した先行調査をみると、第10次調査では、平安時代末～室町時代初頭(12世紀後半～14世紀代)の条里型地割に方位を同じくする耕作溝と、これに伴う柱穴、大型土坑などが出土している(吹田市2007)。

第13次調査では、室町時代(15世紀前半)の条里型地割に合致する南北方向の溝内から、鎌倉時代末～室町時代初頭の和鏡(菊花散双雀鏡)が、溝の底に鏡背面を上にしてほぼ水平の状態で出土した。水辺の祭祀に伴う、水中投入鏡の可能性も指摘されている(吹田市1997)。

第19次調査では、13世紀後半～15世紀前半にかけて存続した、溝と柵列を巡らした二つの方形区画の屋敷地が、隣接し合った状態で検出され、これに付属する掘立柱建物や、井戸、廃棄土坑なども見つかっている(吹田市1998)。

こうした遺構・遺物などの出土資料の積み重ねにより、中世蔵人村の様子の一端を、より具



第2図　蔵人遺跡発掘調査地周辺図：数字は調査次数（上方が北　S＝1/4,000）

体的に知ることができつつある。

【参考・引用文献】

網干善教(編)　1981「考古編」『吹田市史』第８巻別編　　吹田市史編さん委員会

梅山彦太郎・市原実　1985『続・大阪平野発達史』　古物学研究会

島田次郎(編)　1966『日本中世村落史の研究』　吉川弘文館

吹田市教育委員会・吹田市下水道部　1979『蔵人遺跡』

吹田市教育委員会　1986『昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

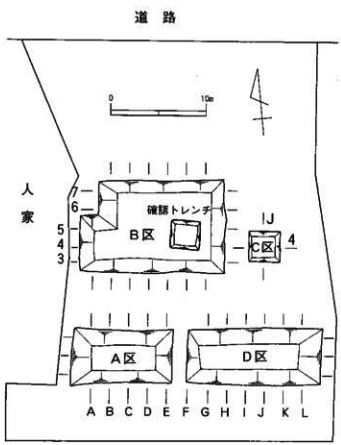
1997『平成８年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

1998『平成９年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

2007『蔵人遺跡発掘調査報告書Ⅰ－蔵人遺跡第10次発掘調査－』

高橋真希　1998『榎坂郷蔵人村の日々－中世村落の考古学－』　吹田市立博物館

福留照尚　1981「吹田地方の条里制」『吹田市史』第１巻　吹田市史編さん委員会



第３図　調査区配置

第Ⅱ章　調査の経過(第３図)

今回の発掘調査は、共同住宅の建築工事に伴う事前調査である。当該工事予定地は蔵人遺跡の範囲内に位置することから、先ず平成８(1996)年９月５～６日に、当該地内に、３×３ｍの試掘坑を３箇所(Ｔ１～３区)設定し、確認調査を行なった。その結果、複数の遺構面上に溝、ピット、柱穴(柱根)などを検出し、古墳時代から室町時代にわたる遺物(古式土師器、須恵器、平安～室町時代の黒色土器椀、瓦器椀、瓦質土器羽釜、木器箸、柱根など)が出土した。そのため、予定される建築工事が着工された場合、遺構・遺物が破壊されると判断されたため、事業者と協議を行なった結果、建築工事に先立って拡大調査を実施したものである。

発掘調査は、平成８(1996)年11月

20日より翌年3月6日の間に実施した。発掘調査開始に際して、調査区の西南隅に設定した任意の基準杭から2mメッシュで地区割りを行い、東西方向に西からA、B、C…、南北方向に南から0、1、2…とし、地区設定を行なった。

調査区は建築予定建物の基礎構造に合わせて設定し、先ず掘削順に4箇所の調査区(A～D区)を設定した。A区は8.45m×3.51m、B区は13.39m×8.45m、C区は3.12m四方、D区は12.22m×3.58mを測る。総面積225.46㎡である。

現代の盛土・撹乱層は重機を使って掘り下げ、それより下層については人力により注意深く掘削した。そして、各遺構面から遺構を検出し、これらの遺構に伴って古墳時代から江戸時代にわたる各種遺物が出土した。検出した遺構および遺物の出土状況などについては、各時期の遺構面毎に詳細に観察し、写真撮影や図面の作成などによる記録作業を行なった。

また調査最終段階で、B区中央に2.2m四方、C区中央に0.9m四方、D区中央に1.2m四方の確認グリッドをそれぞれ1箇所ずつ設定して、下層の遺構・遺物包含層の有無などを確認した。

第Ⅲ章　調査の成果

(1)　基本層序(第4・5・6図)

調査地点地表面の標高はT.P.＋5.1～5.2mである。

地質の注記は一部整理段階において、『新版土色帖』に準じて土色名を整理し直した。粒径区分はアメリカ法によった。現地表以下の基本層序は、前述の通り4箇所の調査区を設けたが、このうち掘削土量と遺構面数の最も多かったB区の土層を基準に記述する。

当調査地は典型的な沖積地特有の堆積構造で、砂・シルト(泥土)・粘土・小礫などが細かく複雑に堆積し合っていた。そのため隣合う調査区でも色調や地質(粒径)に微妙な変化が見られ、大きく異なる部分もあった。そのため各遺構面の対応関係は、遺構の形状やレベル高などから比較的容易に把握出来たのに対して、層位の同定は困難であった。各調査区毎の詳細な地質は別図に掲載したが、主要な層位をまとめて以下に記す。

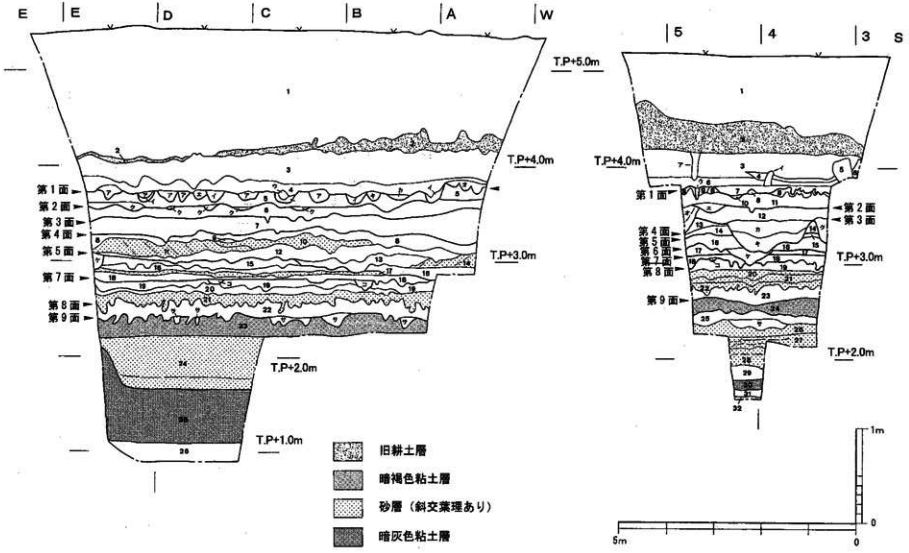
第1層：現代の盛土である。

第2層：黒褐色10YR 3/1 細粒砂質シルト層。2～3mm大の小礫を含む。近世後期以降の旧耕土である。総ての調査区において、ほぼ均質に見られる。

第3層：にぶい黄褐色10YR 6/3 細粒砂質シルト層。上下2層に大別でき、下部は互層あるいは漸移的な級下層理で、洪水に起因する水成層である。

第3－a層：膜状酸化鉄斑が入る。

第3－b層：暗灰黄色2.5Y 4/2 細粒砂質シルト～緑灰色7.5GY 6/1 細粒砂質シルト～灰白色7.5Y 8/2 細粒砂の互層で、北壁断面では波状葉理が観察出来ることから洪水砂層である。A区では緑灰色がかり膜状酸化鉄斑が入る。C区では灰色細粒砂～黄色中粒砂で明青灰色～淡黄色シルトブロックを含む。D区では褐色粘質シルトで



第４図　A区南壁・C区東壁土層断面図（V＝1/40, H＝1/80）

A区

1.現代の盛土
2.黒褐色細粒砂質シルト(旧耕土層)
3.暗灰黄色砂質シルト
4.黄色砂質シルト
5.灰色砂質シルト～黄色中粒砂の互層<第1面ベース層>
6.灰白色砂質シルト<第2面ベース層>
7.粘質シルト<第3面ベース層>
(2cm大以下の礫を含む)
8.暗青灰色粘質シルト<第4面ベース層>
(2cm大以下の礫を含む)
9.灰白色細粒砂
10.青灰色粘質シルト
(細粒砂を含む)
11.灰白色中粒砂
(明青灰色砂質シルト～青灰色粘質シルトを含む)
12.暗青灰色粘質シルト
(灰白色中粒砂)
13.暗灰色粘質シルト<SD23堰土>
14.灰白色シルト～明緑灰色細粒砂<第5面ベース層>
15.＝14に同じ
16.明緑灰色シルト質粘土
(中粒砂を含む)
17.灰白色砂質シルト
(細粒砂を含む)
18.灰白色粘質シルト
19.明緑灰色シルト<第7面ベース層>
(2cm大以下の礫を含む)
20.灰白色粘質シルト
21.淡黄色中粒砂
22.灰白色粘土<第8面ベース層>
23.暗褐色腐食質シルト<第9面ベース層>
《確認トレンチ》
24.灰白色中粒砂～灰白色粗粒砂
(最下層理、湧水層、1～2cm大の礫を含む)
25.暗褐色粘土
(植物遺体を多く含む)
26.黒褐色シルト
(植物遺体を多く含む)

ア.灰白色中粒砂
イ.明青灰色シルト
ウ.淡黄色中粒砂
エ.淡黄色シルト～細粒砂
オ.灰色砂質シルト
カ.明青灰色シルト
キ.淡黄色粗粒砂
(中粒砂を含む)
<畝溝埋土>

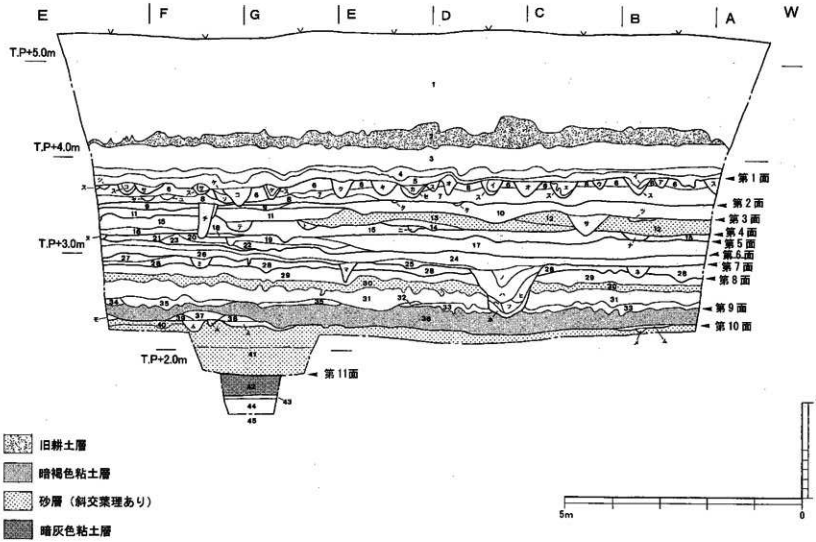
ク.灰色砂質シルト<畝溝埋土>
ケ.灰白色中粒砂<ピット埋土>
コ.灰色粘土<SD27堰土>
サ.褐色粘土<足跡埋土>

C区

1.現代の盛土
2.黒褐色細粒砂質シルト(旧耕土)
3.にぶい黄褐色細粒砂質シルト
4.明褐色砂質シルト
(鏡状酸化鉄が入る)
5.灰黄色砂質シルト
6.黄色中粒砂
(明青灰色～淡黄色シルト・ブロックを含む)
7.＝6に同じ
8.明青灰色シルト
9.灰色砂質シルト
(淡黄色シルト・ブロックを含む)
10.暗褐色砂質シルト
11.灰色粘質細粒砂<第1面ベース層>
12.灰色砂質シルト<第2面ベース層>
(灰白色～灰色粘土、灰白色中粒、3cm大の細礫を含む)
13.暗灰色砂質シルト<第3面ベース層>
14.灰白色砂礫<第4面ベース層>
(4cm大以下の中礫を含む)
15.明青灰色シルト
16.灰色粘質細粒砂<第5面ベース層>
(1cm大の小礫を含む)
17.暗青灰色粘質中粒砂
18.緑灰色粘土<第7面ベース層>
(1cm大の小礫を含む、糸根状斑紋が入る)
19.淡灰色粘土
20.灰白色シルト質中粒砂
(1～2cm大の礫を少し含む)
21.灰色粘質細粒砂
22.明褐灰色中粒砂質シルト
23.褐灰色砂質粘土
24.暗褐色砂質粘土<第9面ベース層>
(植物遺体を含む)
25.暗褐色砂質シルト
26.灰白色細粒砂(湧水あり)
《確認トレンチ》
27.褐灰色粘土
28.灰白色中粒砂～灰色細粒砂
(湧水層、最下層理、葉理あり)
29.褐色粘土
30.暗褐色粘土
31.灰色粘土
32.灰色細粒砂

ア.にぶい黄色砂質シルト<杭堰土>
イ.褐灰色粘土<杭堰土>
ウ.灰色砂質シルト
エ.褐灰色砂質シルト
(1cm大の小礫を含む)
オ.灰色砂質シルト～黄色中粒砂
カ.灰色砂質シルト
(1cm大の小礫を多く含む)
キ.灰白色砂質シルト
(1cm大の小礫を多く含む)
<土杭堰土>

ク.灰色砂質シルト
ケ.黒褐色砂質シルト<溝埋土>
コ.明青灰色シルト
サ.褐灰色砂質シルト



第5図　B区南壁土層断面図（V＝1/40, H＝1/80）

《B区》

1．現代の盛土層
黒褐色細粒砂質シルト（旧耕土層）
（2～3㎜大の細礫を含む）
3．にぶい黄褐色細粒砂質シルト
4．3に鉄状酸化鉄斑が入る
5．暗灰黄色細粒砂質シルト～
緑灰色細粒砂質シルト～灰白色細粒砂の互層
6．灰色中粒砂質シルト＜第1面ベース層＞
（緑灰色シルト・ブロックを含む）
7．暗灰色粘質シルト
8．灰色砂質シルト（粘性あり）
9．暗灰色砂質シルト
（1～2㎝大の礫を多く含む）
10．灰色中粒砂質シルト＜第2面ベース層＞
（黄色粗粒砂を含む）
11．灰白色砂質シルト
（1㎝大以下の礫を含む）
12．灰白色砂礫＜第3面ベース層・西半部＞
（1㎝大の礫を多く含む）
13．灰白色細粒砂＜第3面ベース層・中央部＞
（1～3㎝大の礫を多く含む）
14．灰色シルト＜第4面ベース層・東半部＞
15．灰色中粒砂質シルト＜第4層ベース層＞
（やや粘性、1㎝大以下の礫を少し含む）
16．灰色中粒砂
17．青灰色粘質シルト＜第5面ベース層・西半部＞
（中粒砂を含む）
18．灰色中粒砂
19．灰白色粗粒砂＜第5面ベース層・東半部＞
（1～2㎝大の礫を含む）
20．灰白色シルト＜第5面ベース層・東半部＞
（鉄状酸化鉄斑が入る）
21．暗灰色砂質シルト＜第5面ベース層・東半部＞
22．＝19に同じ
23．不明
24．青灰色中粒砂質シルト＜第6面ベース層＞
25．紫灰色砂質シルト
26．暗紫灰色砂質シルト
27．明緑灰色粘質中粒砂
28．緑灰色中粒砂質シルト＜第7面ベース層＞
（一部、平行葉理）
29．青灰色粘質シルト＜第8面ベース層＞
（細粒砂を多く含む）
30．灰白色粘質細粒砂
31．明褐灰色細粒砂質シルト
32．灰白色粘土
33．褐灰色粘質シルト
34．褐色粘土
35．褐灰色粘質シルト
36．暗褐色細粒砂質粘土＜第9面ベース層＞
37．黒褐色砂質粘土
38．黒褐色砂質シルト
39．褐灰色砂質粘土
40．暗灰色粘質シルト
41．灰色細粒砂～極細粒砂＜第10面ベース層＞
（湧水層、斜交葉理あり、級下層理）
《確認トレンチ》
42．暗灰色粘土＜第11面ベース層＞
（植物遺体を多く含む）
43．灰色粘土
44．黒褐色粘土
45．暗褐色粘土

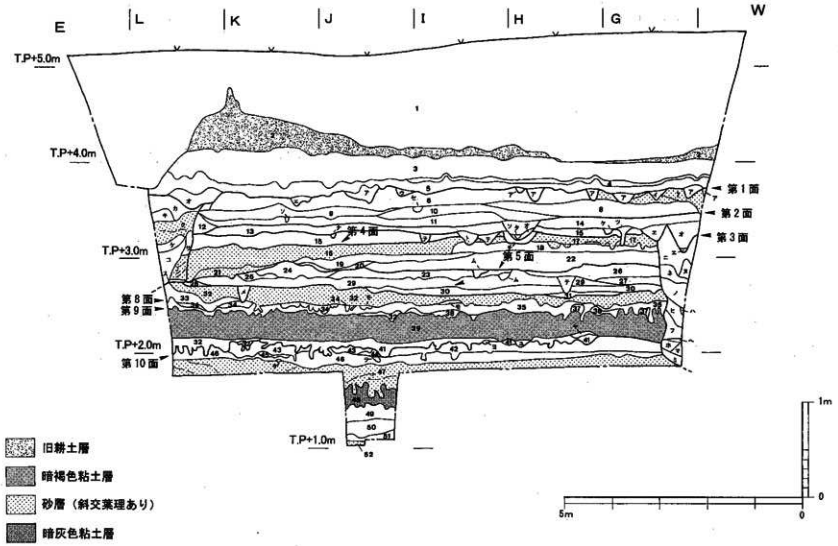
ア．褐黄色中粒砂
（青灰色粘土ブロックを含む）
イ．褐黄色～灰白色中粒砂
（青灰色粘土ブロックを含む）
ウ．褐黄色中粒砂
（青灰色粘土～シルトを多く含む）
エ．明青灰色シルト質中粒砂
オ．明青灰色シルト質中粒砂
カ．褐黄色中粒砂
（青灰色粘土～シルトを含む）
キ．明青灰色シルト～褐黄色中粒砂
ク．灰白色中粒砂～明青灰色シルトの互層
ケ．灰白色中粒砂
（明青灰色シルトを含む）
コ．灰白色中粒砂
（明青灰色シルトを少し含む）
サ．白色中粒砂
（明青灰色シルトを少し含む）

＜畝溝埋土＞

シ．明青灰色シルト～灰色中粒砂 ＜畝溝埋土＞
ス．明青灰色シルト
セ．明青灰色シルト
ソ．灰色砂質粘土
タ．灰色砂質粘土
チ．暗灰色砂質シルト＜ピット埋土＞
（炭粒を多く含む）
ツ．暗灰色砂質シルト
テ．灰白色中粒砂＜SD17埋土＞
（1㎝大の小礫を含む）
ト．暗灰色砂質シルト
ナ．灰白色粘質シルト＜SD15埋土＞
（1㎝大の小礫を含む）
ニ．灰白色シルト
ヌ．暗青灰色シルト質中粒砂
ネ．暗紫灰色粘質中粒砂＜SD28埋土＞
（1㎝大の小礫を含む）
ノ．暗紫灰色粘質細粒砂
（1㎝大の小礫を含む）
ハ．暗紫灰色砂質シルト
（炭粒を多く含む、1～2㎝大の礫を含む）
ヒ．暗紫灰色粘質シルト
フ．灰白色砂質シルト～粘土
ヘ．灰白色細粒砂
ホ．灰色砂質シルト
（灰色粘状粘土ブロックを含む）

＜SK17埋土＞

マ．暗紫灰色粘質中粒砂＜SD30埋土＞
ミ．暗灰色粘質シルト
（砂粒を含む）
ム．暗灰色粘質細粒砂
メ．灰白色粘土
モ．暗灰色シルト質粘土
ヤ．灰色砂質粘土
ユ．灰色粘質シルト



第6図　D区南壁土層断面図（V＝1/40, H＝1/80）

D区

1．現代の盛土層
2．黒褐色細粒砂質シルト(旧耕土層)
3．灰白～灰～灰黄色砂質シルト
（鉄状酸化鉄斑が入る）
4．灰黄色中粒砂
5．灰黄褐色砂質シルト
（鉄状酸化鉄斑が入る）
6．灰色砂質シルト＜第１面ベース層＞
7．灰黄色砂質シルト
8．灰色砂質シルト
9．暗灰色砂質シルト
10．灰白色砂質シルト
11．灰色砂質シルト
（鉄状酸化鉄斑が入る）
12．灰白色砂質シルト
13．暗灰色砂質シルト＜第２面ベース層＞
14．灰白色砂質シルト＜第２面ベース層＞
15．灰白色砂質シルト＜第３面ベース層＞
16．灰白色粘質細粒砂＜第４面ベース層＞
17．灰白色砂質シルト＜第４面ベース層＞
18．灰白色シルト
（１cm大の小礫を含む）
19．＝16に同じ
20．灰白色細粒砂
21．灰白色細粒砂
（１～３cm大の礫を含む）
22．灰白色シルト質中粒砂
23．灰色粘質シルト＜第５面ベース層＞
24．灰色中粒砂質シルト
25．明青灰色細粒砂
26．灰白色粘質シルト＜第５面ベース層＞
27．灰白色粘質シルト
（中粒砂を含む）
28．灰白色砂質シルト
29．明青灰色中粒砂質粘土
30．紫灰色粘質シルト
31．灰白色粘質シルト
32．灰白色粘質シルト
33．褐灰色粘土
34．灰白色中粒砂
35．灰白色シルト＜第８面ベース層＞
36．灰白色中粒砂質粘土
37．褐灰色粘土
38．黒褐色粘土
39．暗褐色粘土＜第９面ベース層＞
40．明褐灰色中粒砂
41．灰白色細粒砂～粗粒砂(最下層理)
42．明褐灰色砂質シルト
43．黒褐色砂質粘土
44．黒褐色粘土
45．灰色中粒砂＜第10面ベース層＞
46．褐色砂質粘土
47．灰白色中粒砂（最下層理，湧水層）
（１～２cm大の礫を含む）
《確認トレンチ》
48．暗褐色粘土
49．黒褐色粘土
（灰白色～灰色粘土ブロックを多く含む）
50．暗褐色腐食質粘土
51．暗灰色砂質シルト
（植物遺体を多く含む）
52．灰白色細粒砂

ア．灰白色砂質シルト
（鉄状酸化鉄斑が入る）
イ．淡黄色シルト
ウ．淡黄色中粒砂～橙色中粒砂～淡黄色シルト
エ．灰色粘質シルト
オ．灰色砂質シルト
＜航溝埋土＞

カ．暗灰色砂質シルト～粘土
（灰白色粘土ブロックを含む）
キ．淡灰色細粒砂
ク．灰色細粒砂（礫を含む）
＜ＳＤ12埋土＞

ケ．暗灰色砂質シルト
コ．暗紫灰色砂質シルト
（１～２cm大の礫を含む）
サ．灰白色粘質細粒～粗粒砂
（１～２cm大の礫を多く含む）
シ．灰色細粒砂(礫を含む)
＜ＳＤ12埋土＞

ス．暗灰色粘質シルト
セ．灰白色中粒砂
＜土坑埋土＞

ツ．暗灰色粘質シルト
テ．灰色粘質細粒砂
ト．灰白色中粒砂
（１～２cm大の礫を含む）
ナ．灰白色細粒砂
＜ピット埋土＞

ニ．灰白色シルト
ヌ．青灰色粘土
（暗青灰色粘土ブロックを含む）
ネ．灰白色砂質シルト
（明青灰色～暗灰色粘土ブロックを含む）
ノ．灰色砂質粘土
（暗褐色粘土ブロックを多く含む）
ハ．灰色粘土
ヒ．暗灰色粘土
（暗褐色粘土ブロックを含む）
フ．灰白色粘質シルト
（暗褐色粘土ブロックを多く含む）
ヘ．暗灰色シルト
ホ．褐色粘質シルト
（灰白色シルト・ブロックを含む）
マ．明青灰色粘土
ミ．暗褐色粘土
ム．灰白色細粒砂(灰色粘土ブロックを含む)
メ．暗紫灰色砂質粘土
モ．淡黄色中粒砂
ヤ．にぶい橙色中粒砂
ユ．明褐色シルト質粘土
ヨ．明青灰色中粒砂
ラ．灰色中粒砂
＜ＳＫ８埋土＞

膜状酸化鉄斑が入る。

第４層：灰色10ＹＲ６/１中粒砂質シルト(緑灰色7.5Ｇ Ｙ６/１シルトブロック)層。Ａ区は暗灰色粘土(黄色中粒砂の互層で平行葉理)がかる。Ｃ区では層が厚く上下３層に区分できる。

４－ａ層：灰色砂質シルト(明緑灰色～淡黄色 シルトブロックを含む)。

４－ｂ層：灰色～明青灰色粘質シルト。

４－ｃ層：灰色シルト質粘土(細粒砂と３mm大以下の小礫を含む)。Ｄ区では、西半部は黄橙色中粒砂(淡黄色～灰白色粘土ブロックを含む、膜状酸化鉄斑が入る)で東半部が灰色中粒砂質シルトへと水平方向に対して漸移的に変化する。洪水に起因する河川砂礫層である。第１面ベース層である。

第５層：灰色10ＹＲ６/１中粒砂質シルト層。黄色５Ｙ８/６細粒砂を含む。南側ほど砂礫質に変化し、Ａ区では１～２cm大の小礫を含み、Ｄ区では粘性が弱く砂質傾向で、共に膜状酸化鉄斑が入る。第２面ベース層である。

第６層：灰色10Ｙ５/１中粒砂質シルト層。Ａ区では青灰色がかる。９mm大以下の小礫を少量含む。第３面ベース層である。

第７層：灰色Ｎ５/０中粒砂質シルト層。Ａ区では明緑灰色がかる。やや粘性で、１～２cm大の小礫を少量含む。第４面ベース層である。

第８層：青灰色５Ｇ５/１粘質シルト層。中粒砂を含む。Ａ・Ｄ区は灰白色がかる。第５面ベース層である。

第９層：青灰色５ＰＢ４/１中粒砂質シルト層。Ｂ・Ｃ区のみで見られる。第６面ベース層である。

第10層：青灰色10ＢＧ６/１中粒砂質シルト層。やや粘性。Ａ・Ｂ・Ｃ区で見られる。Ａ区は灰白色がかる。第７面ベース層である。

第11層：青灰色10ＢＧ５/１粘質シルト層。細粒砂を多く含む。Ａ区は灰白色粘土で、Ｄ区は紫灰色シルト質粘土(粘性強い)である。第８面ベース層である。

第12層：灰白色粗粒砂。Ｃ区のみに見られる土層である。

第13層：灰色Ｎ６/０細粒砂質粘土層。Ｃ区は灰白色粘質シルトで、Ｄ区は灰白色粘土である。

第14－Ａ層：灰色10Ｇ Ｙ５/１シルト質粘土層。粘性が強い。第９面ベース層である。Ａ区は暗褐色シルト。Ｃ区は灰白色粘土。Ｄ区は紫灰色シルト質粘土。

第14－Ｂ層：暗褐色10ＹＲ３/４細粒砂質粘土層。

第15層：灰色10ＹＲ６/１～５/１細粒砂～粗粒砂層。１～２cm大の小礫を含む。漸移的な級下層理で、一部に斜交葉理が観察できる。洪水に起因する河川砂礫層であり、現在もなお豊富な湧水が見られた。井戸遺構の水脈層でもある。総ての調査区で見られた特徴的な層で、第10面ベース層であり、土層の同定の際の鍵層でもある。

第16層：暗褐色粘土層。軟質で植物遺体を多く含む淡水成粘土である。第11面ベース層である。

これらの土層を調査区壁面で地質を巨視的に観察すると、調査地全体が、現代の地表面から第９層まで、やや南側が低い傾向にあるものの、ほぼ水平堆積を繰り返し、第10層から調査最終層の第16層までは東南方向に対して緩く落込むという状況が見られた。

第３・４層と第15層は砂層中に流水痕が認められることから、洪水に起因する水成層である。特に第15層は、４箇所の調査区に共通する鍵層でもあり、層位の同定作業の目安にもなる。現在もなお豊富な湧水が見られた。調査地の西方には、現在では天井川となって南流する高川が位置しており、「康永二年垂水荘預所代助陳情案」(東寺百合文書)に建武３(1336)年と暦応元(1338)年に氾濫した記述が見られるなど、氾濫を繰り返していることから、この高川が堆積物の主な供給源であった可能性が考えられる。

第５層(第２面ベース層)から第10層(第７面ベース層)までは、概して比較的乾いた土層で、砂・シルト・粘土がほぼ均一に混ざり合った砂質土である。次々と沖積作用を繰り返して、地盤高を上昇させる。前述の洪水砂層と同様に、主に高川からの氾濫堆積物であろう。土層中に中世の遺物を多く包含する。

第11層から第16層(第11面ベース層)までは、粘土を主体に、遺構埋土内に砂粒を充填する。氾濫原の後背湿地のような、湿潤な環境と推測される。土層中に弥生時代後期～平安時代中期の遺物を少量包含する。

第16層以下の土層は、植物遺体を含む腐植質粘土と還元化の進んだ粘土の互層を形成し、水成植物が繁茂する湿地のような環境であったと推測される。調査範囲の限りでは、遺物は出土しなかった。

【参考文献】

小山正忠・竹原秀雄　1987『新版標準土色帖』　農林水産省農林水産技術会議事務局・(財)日本彩色研究所

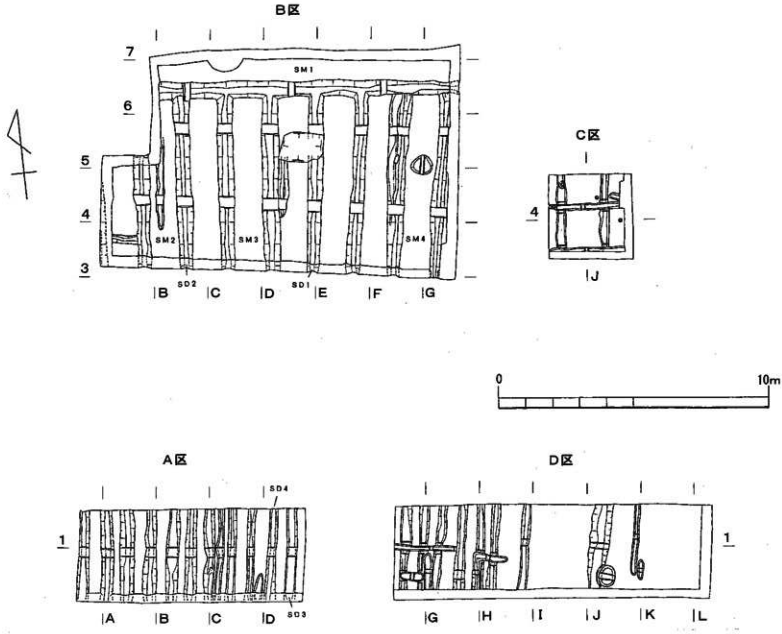
坂　幸恭　1993『地質調査と地質図』朝倉書店

町田洋・新井房夫・森脇広　1986『地層の知識－第四期をさぐる－』　東京美術

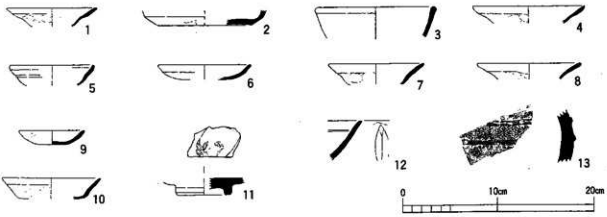
(2)　検出遺構と遺構出土遺物

今次の発掘調査では、各調査区においてそれぞれ８面から10面の遺構面を検出した。各遺構面は、比較的調査区間における対応関係の特定が容易であったため、今次調査範囲全体を通して上層から順に「第何面」と呼称する。その結果、古墳時代後期から室町時代末～安土桃山時代にわたる合計11面の遺構面を検出した。

遺構には一連の番号を付け、その前にＳＢ：建物、ＳＤ：溝、ＳＥ：井戸、　ＳＫ：土坑、　ＳＭ：畠、ＳＮ：水田、Ｐ：ピット、ＮＲ：自然流路、ＳＸ：不明・その他などの分類記号を付記する。以下、順を追って各遺構と主な遺構出土遺物を記す。



第7図　第1面遺構平面図



第８図　第１面遺構出土遺物　1．2：A区SD3，3：A区SD4，4：B区SM3，5～8：B区SM2
9：B区SD2，10．11：B区SM1，12．13：B区SM4

a．第１面(第７図)

A～D区において、主に南北方向と一部東西方向の畠の畝溝、ピット、木杭(292)、C区で東西方向と南北方向に交差する攪乱と思われる小溝列と、足跡などを検出した。当遺構面は、黄色砂層に覆われる状態で検出された。この砂層は断面観察により、斜交葉理が観察されたことから、洪水により埋没したものと考えられる。写真撮影のみで未図化であるが、この砂層に覆われてC区の床面には、ヒトのものと思われる足跡群が認められた。

なお遺物の出土は少量で、しかも実測可能な遺物は、A区とB区に出土が集中した。遺構面の標高は概ねA区でT.P.＋3.7m、B区でT.P.＋3.8m、C区でT.P.＋3.7m、D区でT.P.＋3.6～3.7mとなる。

［畝溝］

畝溝はほぼ真北方向に走向するが、SM１のみ他の畝溝と方位が異なり、東西方向に走向することから、畦畔の基底部を検出した可能性もある。

A区の畝溝は断面形が逆台形を呈し、幅30～40cm、深さ15cm前後を測る。B区の畝溝は、断面形が逆台形を呈し、幅45～60cm、深さ20cm前後を測る。

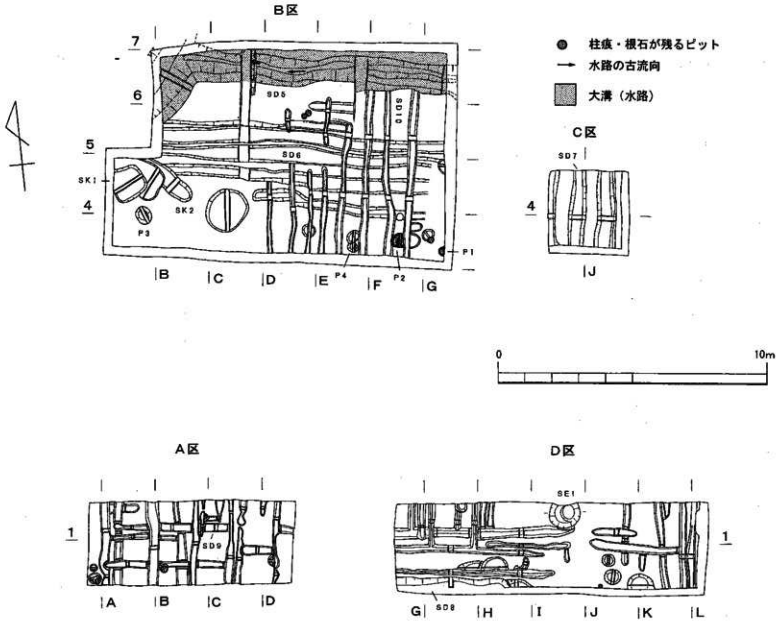
畝溝はA・D区とB区とで間隔が異なっており、A区では40cm前後の間隔であるのに対して、B区では105cm前後の間隔で、後者の方が倍以上広い。

畝溝埋土は、粘土・シルトのブロック土を含むものも見られたが、多くは黄色砂で充填されていた。

SD３から土師器皿(１)、瀬戸美濃焼皿(２)、SD４から青磁椀(３)、SD２から土師器皿(９)などが出土した。

畝盛土内の遺物は、SM１から青磁椀(11)、SM３から土師器皿(４)、SM２から土師器皿(５～８)、SM４から瓦質土器火鉢(13)、青磁椀(12)、SM５から砥石(304)が出土した。

砥石(304)は、幅約１寸の短冊形を呈し、頁岩製である。



第９図　第２面遺構平面図

［小溝列］

鋤溝と思われる小溝は、東西方向と南北方向に一部交差して走向する。これらの小溝は畝溝と重複関係が見られ、畝溝が埋没した後に小溝が開削されている。断面形は浅いU字形を呈し、幅30～40cm、深さ３～５cmを測る。埋土内から土師器などの細片が少量出土した。

［ピット］

C区でピットが４基ほど検出されたが、いずれも径が小さく浅いもので、柱痕などは認められなかった。

各遺構出土遺物の下限年代は、室町時代末～安土桃山時代(16世紀後半)である。

b．第２面(第９図)

A～D区において、東西方向に走向する大溝１条と、東西方向と南北方向に交差する鋤溝と思われる小溝列、井戸と思われる土坑１基、土坑、ピット(柱穴)などを検出した。

遺構面の標高は概ねA・B・C区でT.P.＋3.6m、D区でT.P.＋3.5mとなる。

［大溝］(第10・11・12図)

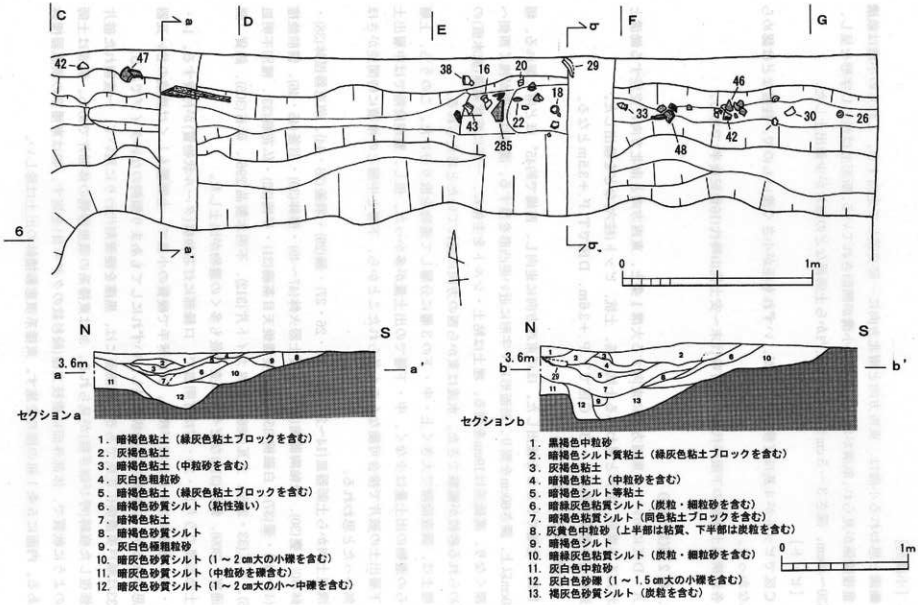
B区の北端でＳＤ５を検出した。ほぼ東西方向に走向し、西端で約45°ほど南に振れる。幅230cm以上、深さ60cmを測り、断面形はV字形に近い逆凸形を呈する。溝底は東側が浅く西側へと深くなり、高低差は19cmを測る。埋土は粘土・シルトを主体に、一部に波状葉理(流水痕)の認められる砂粒が観察できた。水流は東から西の方向に流れていたと考えられる。

埋土は、調査段階で大きく上・中・下の３層に分層して遺物を取り分けた。このうち、上層からの遺物の出土量は少なく、中・下層での出土量が多かった。但し、整理段階では中層出土と下層出土の破片で接合可能なものも見られたことから、下層と中層との堆積に時間差がさほど無かったと思われる。

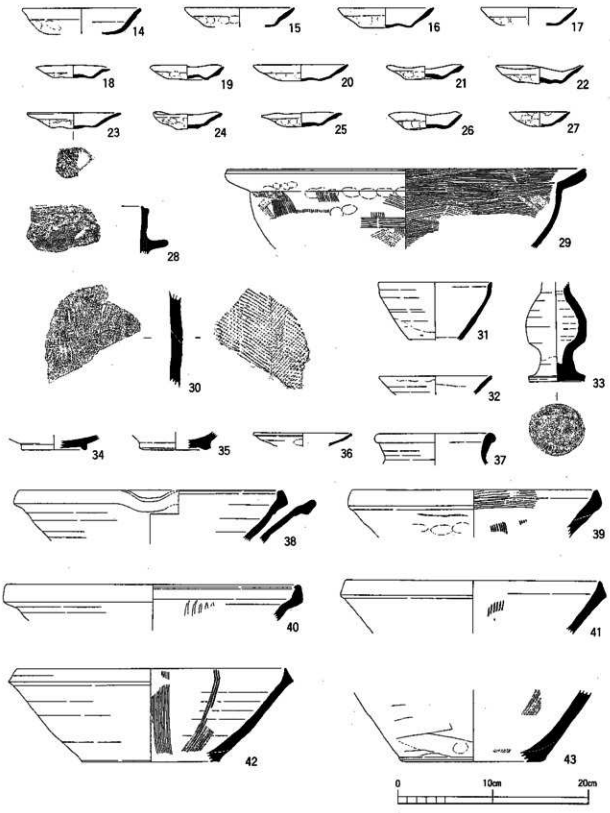
溝埋土内から土師器皿(14～20・23・24・26・27)・鍋(29)・羽釜(28・44)、須恵器捏鉢(38)・擂鉢(40)・甕(30)、緑釉陶器椀(34)、瓦質土器火鉢(47～49)・擂鉢(39)・羽釜(45・46)、備前焼擂鉢(41～43)・壺(37)、白磁椀(35)、瀬戸美濃焼天目茶碗(31)・平椀(32)・仏花瓶(33)、種別不明皿(36)、平瓦(33・285)、丸瓦(286)、サヌカイト片(312)、不明木製品(296)、砥石(305)、銭貨「開元通寶」(309)、鉱滓(318)など今次調査で最も多くの遺物が出土した。

土師器皿のうち16・20・27は灯明皿で、口縁部に灯芯油痕(タール状物質)が付着する。14・19・23の底部には木目状痕が残る。36は薄手で硬質の小皿で、土師器もしくは焼成の甘い瓦器と思われるが、口縁部は玉縁状を呈し、いずれにしてもあまり類例のないタイプである。

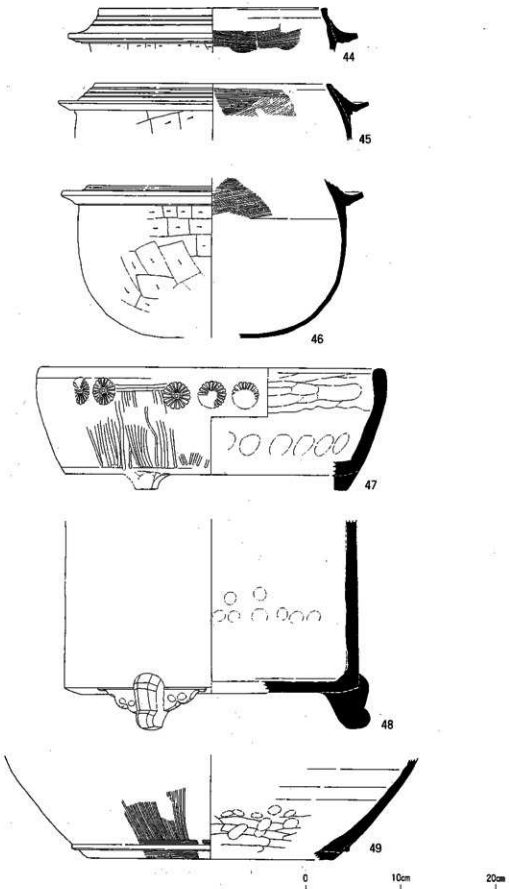
33は瀬戸美濃焼仏花瓶である。破断面には、黒漆を接着剤代わりに用いて、一度割れた破片を修復した痕跡(呼び継ぎ痕)が見られる。30は東播系の須恵器甕の体部片である。焼成は土師器のように軟質で、体部外面に樹枝文様(綾杉紋のタタキ目)を施す。40は東播系の須恵器擂鉢である。内面に５条１組の擂目を施す。東播系須恵器擂鉢の出土は珍しい。



第10図　B区 SD5 遺物出土状況図



第11図　B区SD5出土遺物（1）



第12図　B区 SD5 出土遺物(2)

296は不明木製品である。一見匙状を呈するが、用途は不明である。305は砥石である。材質は砂岩製である。

なお仏花瓶・火鉢・瓦などは、中世寺院の存在の可能性を考えさせる遺物である。

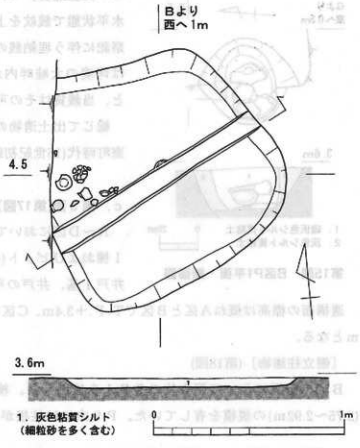
［土坑］(第13図)

B区の西端部でＳＫ１を検出した。平面形は隅丸方形を呈する、東西126cm×南北127cm、深さ５cmを測る浅い土坑である。

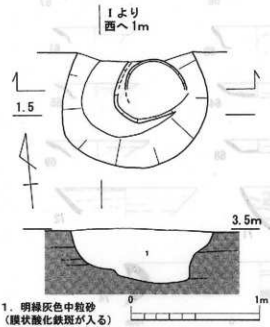
埋土内から土師器小皿(50～61)がまとまって出土し、図化できたものだけでも12個体が見られた。

［井戸］(第14図)

D区の北端部でＳＥ１を検出した。平面形は円形で、東西115cm×南北92cm以上、深さ46cm を測る。井戸枠は残存していなかったが、土坑底部に井戸枠を思わせる円形の荷重痕



第13図　B区SK1 平面・断面図



第14図　D区SE1 平面・断面図

が残存しており、底部は下層遺構の流路ＮＲ１に達していて、湧水も若干見られたことから、井戸であると思われる。

埋土内から備前焼擂鉢(73)、瓦器椀(71)などが出土した。

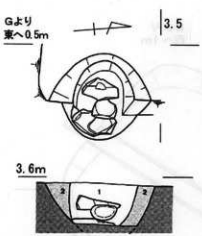
［その他の遺構］

ピットのうちＰ１に根石(第15図)、Ｐ２に柱痕が認められた。

その他の遺構埋土内からは、土師器皿(63～69)、瓦質土器甕(８)、瀬戸美濃焼平椀(70)、ＳＤ７から銭貨「元豊通寶」(310)などが出土した。

［銭貨］(第62図)

遺構埋土中から合計２枚の銭貨が出土した。309は621年始鋳の「開元通寶」で、B区ＳＤ５の遺構精査時に埋土上面から出土した。310は1078年始鋳



第15図　B区P1平面・断面図

の「元豊通寶」で、C区SD7埋土中から出土した。共に水平状態で銭紋を上向きにした状態で出土しており、農耕祭祀に伴う埋納銭の可能性も検討したが、その場合の多くは坪境の大畦畔内からの出土例がであることを考慮すると、当銭貨はその可能性が低いかもしれない。

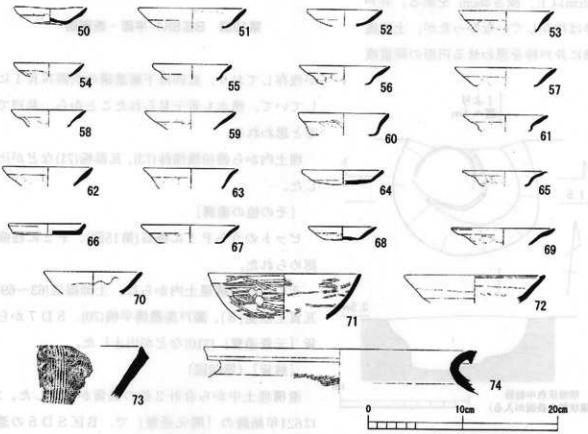
総じて出土遺物の年代幅が大きいが、遺構の下限年代は室町時代(16世紀初頭)である。

c．第3面(第17図)

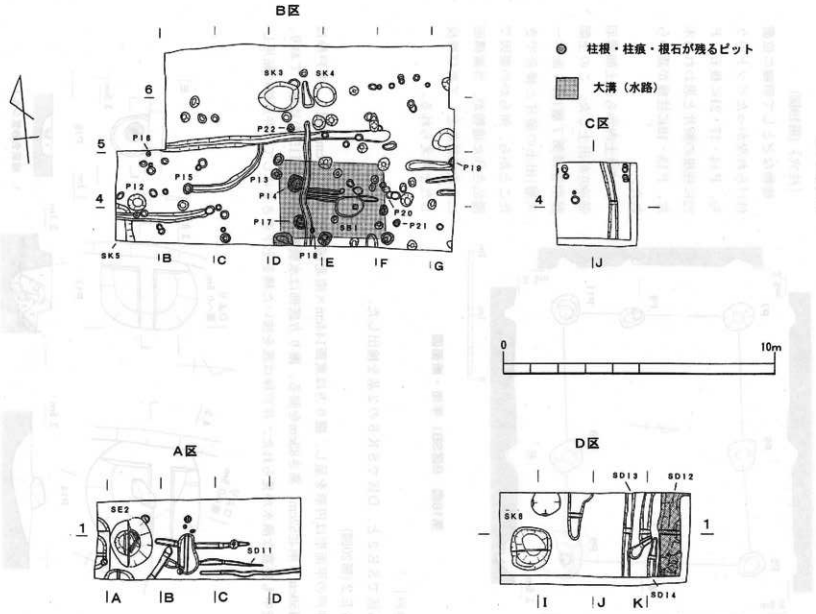
A～D区において、畝溝と思われる小溝列、掘立柱建物1棟およびピット(柱穴)、南北方向に走向する大溝1条、井戸1基、井戸の可能性のある土坑1基などを検出した。遺構面の標高は概ねA区とB区でT.P.+3.4m、C区でT.P.+3.5m、D区でT.P.+3.3～3.4mとなる。

［掘立柱建物］(第18図)

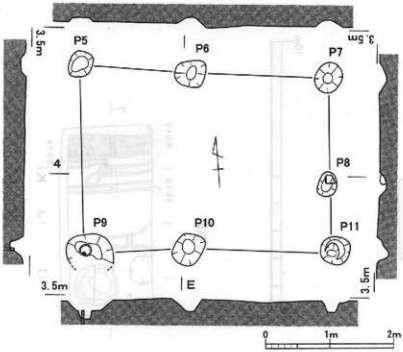
B区の南端において掘立柱のSB1を検出した。検出部分で桁行2間(3.85m)×梁行1間(2.75～2.92m)の規模を有していた。P9内には柱根が残存しており、P8から土師器皿(335)



第16図　第2面遺構出土遺物　50～61：B区SK1，62,63：B区P3，64：B区P1，65：A区SD9，66：B区P2，67：B区SD10，68：B区SK2，69：B区P4，70：B区SD6，71～73：D区SE1，74：D区SD8



第17図　第3面遺構平面図



第18図　B区SB1 平面・断面図

が出土した。

［柱穴］(第19図)

建物などとして明確に位置付けられなかったピットのうち、P14・17・21に根石、P22に柱根の断片と思われる木片、P13・19に柱痕が認められた。

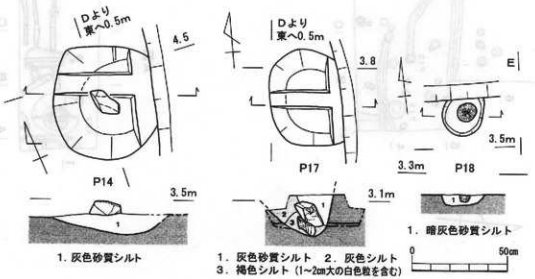
P17埋土内から、土師器羽釜(99)が出土した。この土師器羽釜は第7層(第4面ベース層)出土の破片と接合できたことから、何らかの要因で撹乱された遺物が、当遺構面に二次堆積物として再び埋没したと考えられる。

［井戸］

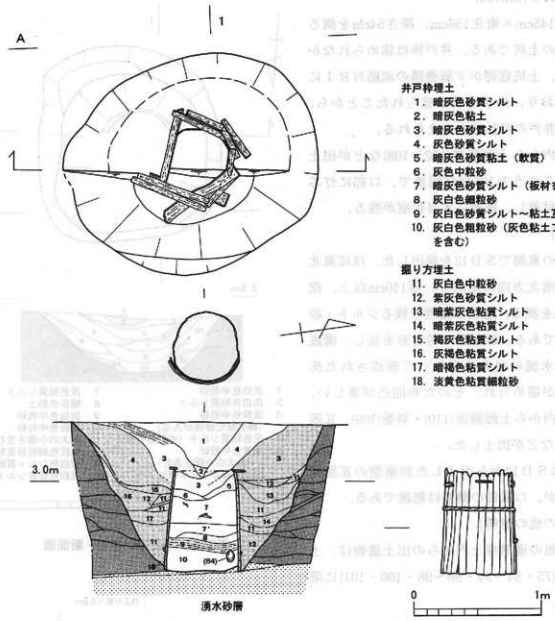
A区でSE2と、D区でSK6の2基を検出した。

・SE2(第20図)

井戸の平面形は円形を呈し、掘り方は東西144cm×南北167cm、深さ119cmを測り、井戸枠は東西59cm×南北52cm、高さ83cmを測る。掘り方底部は水脈層の砂礫層(第15層)に達しており、調査中も豊富な湧水が見られた。井戸枠は底を抜いた桶を上下逆さまにして、井戸枠に転用し



第19図　B区第3面柱穴平面・断面図



第20図　A区SE2平面・断面図

ていた。桶には側板を止める２条のタガが見られた。桶の上端には板材を「井」字状に渡していた。さらに２箇所のコーナー部では、板材を斜めに渡しており、本来の平面形は八角形を指向していたのではないかと思われる。この板材は井戸枠の沈下を防止する「板組」と思われる。したがって、もともとはこの上に井戸枠がもう一段載っていた可能性が考えられる(註１)。裏込め土は、砂と粘土を交互に充填していた。

出土遺物は、井戸枠埋土最下層から瓦器皿(84)が出土したほか、裏込め土から土師器皿(77・76)２点、須恵器甕(83)などが出土した。84は瓦器皿のうちでも、いわゆる“皿化した椀”と呼ばれる種類である。大阪府南部(河内長野市周辺)の生産品と思われる。83は播磨産の須恵器甕である。焼成は土師質を思わせるほど不良で、体部外面に樹枝文様を施す。

・ＳＫ６(第21図)

東西145cm×南北156cm、深さ54cmを測る素掘りの土坑である。井戸枠は認められなかったが、土坑底部が下層遺構の流路ＮＲ１に達しており、湧水も若干見られたことから、素掘り井戸の可能性も考えられる。

埋土内から土師器皿(102～108)などが出土した。このうち105は灯明皿で、口部に灯芯油痕が付着し、底部に木目状痕が残る。

［溝］

Ｄ区の東端でＳＤ12を検出した。ほぼ真北に近い南北方向に走向し、幅110cm以上、深さ20cmを測る。埋土は葉理の残るシルト・砂が主流である、断面形は逆台形を呈し、溝底部には水流の浸食作用にって形成された洗掘構造が認められ、そのため凹凸が著しい。

埋土内から土師器皿(110)・羽釜(109)、瓦器椀(111)などが出土した。

111はＳＤ12から出土した和泉型の瓦器椀であるが、口縁部の調整は粗雑である。

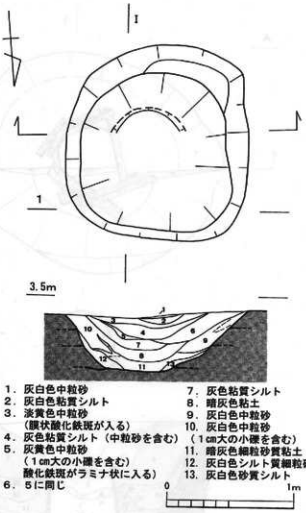
［その他の遺構］

その他の遺構埋土内からの出土遺物は、土師器皿(75・84～94・96～98・100・101)に限られた。

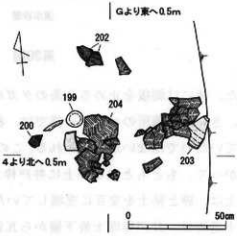
94はＳＫ３から出土した土師器皿で、焼成後体部に孔を一ヶ所穿つ。

［土器群］(第22・54図)

Ｂ区東端部で土器群ＳＸ１を検出した。第３面直上よりも若干浮いた地点から、土師器皿(199)、瓦器椀(200～202)、須恵器捏鉢(203)・甕(204)などの土器類が集中的に出土する状況が見られた。

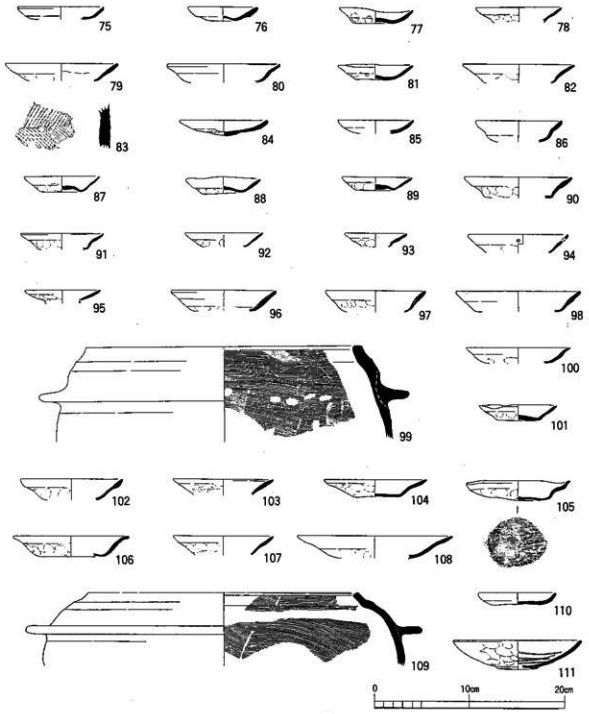


第21図　D区SK6平面・断面図



第22図　B区土器群SX1出土状況図

204は須恵器甕の体部片である。体部外面に、平行タタキ目を角度を変えなが交互に打つことにより綾杉紋状に施し、内面はハケ調整を施す。焼成は瓦質に近い。東播系でも魚住窯な



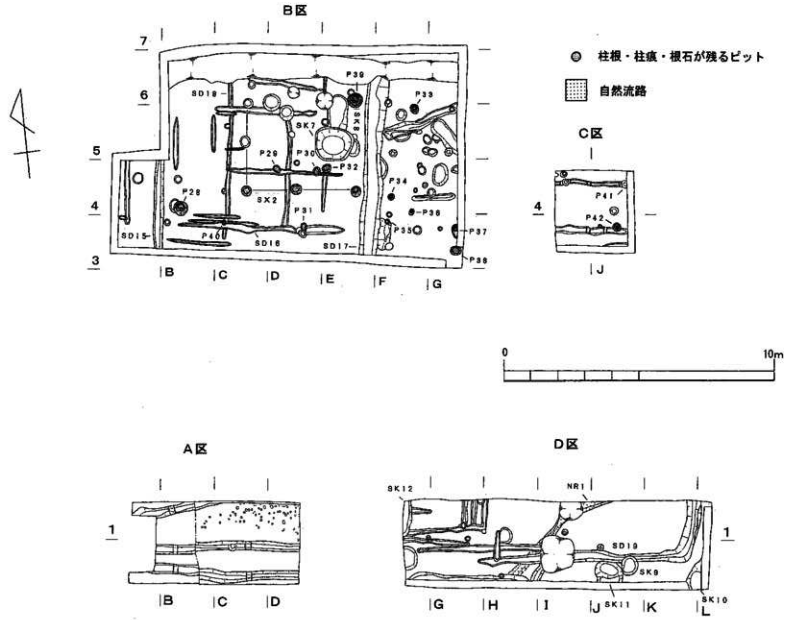
第23図　第3面遺構出土遺物

75～84:A区SE2, 85.86:B区P12, 87～93:B区SK4, 94:B区SK3, 95:A区SD11
96:B区P20, 97.98:B区SK5, 99:B区P17他, 100:D区SD12, 101:D区SD14
102～108:D区SK6

どで見られるタイプである。第３面における出土遺物の下限年代は、15世紀前半である。

d．第４面(第24図)

A～D区において、東西方向と南北方向に交差する鋤溝と思われる小溝列、柱列、ピット(柱穴)、井戸と思われる土坑などを検出した。



第 24 図　第 4 面遺構平面図

遺構面の標高は概ねA区でT.P.+3.3m、B区でT.P.+3.1～3.4m、C区でT.P.+3.4m、D区でT.P.+3.2mとなる。

［柱列］(第25・26図)

B区の中央でSX2を検出した。柵列もしくは桁行2間(3.9m)×梁行2間(3.2m)程度の、掘立柱建物の一部と見られる。北端部は第2面の遺構の掘り込みにより撹乱されているため、さらに北側へと展開していた可能性もある。P25～27に柱痕・根石が残存していた。

［自然流路］

NR1は、D区を斜めに横断する状態で検出した。幅30cm前後、深さ5cmを測るごく浅い流路である。埋土は黄色粗粒砂の単層で、現在でも若干の湧水が見られ、前述の井戸遺構SE1、SK6の水源としても機能していたようである。

［小溝列］

鋤溝と思われる小溝列を、東西と南北方向に交差する形で検出した。

B区の西端でSD15(第28図)を検出した。ほぼ真北の南北方向に走向し、幅35cm弱、深さ8cmを測る。

埋土上面から、完形の土師器杯(112)が見込みを上向きにした状態で出土した。当初は農耕祭祀に伴う土器埋納遺構の可能性も考えたが、出土位置がピットではなく溝である点を考慮すると、その可能性は低いと思われる。

D区においては、小溝列がほぼ直角に方向転換して走向する状況が見られた。

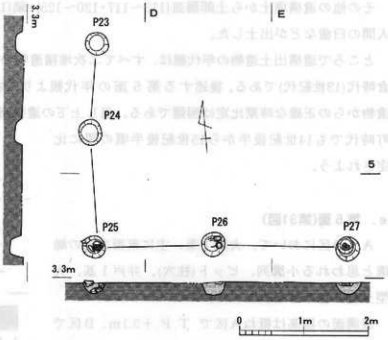
［柱穴］(第27図)

ピットのうちP25に根石・柱痕、P26に根石と柱根(293)、P27に根石・柱根、P29・33・35・37・38・40・42に柱痕が認められた。

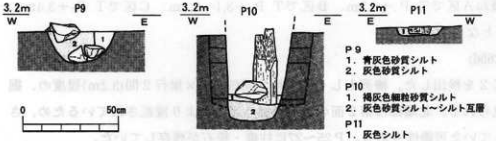
293は柱根である。断面形を八角形に面取りをし、底面はハツリ仕上げされている。

［井戸］(第29図)

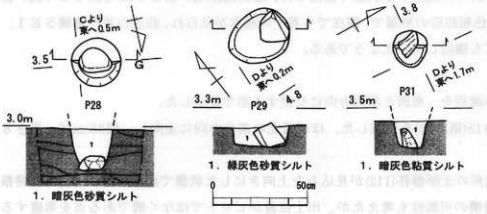
D区の南端でSK11を検出した。平面形はやや歪な楕円形で、東西105cm×南北75cm以上、深さ44cmを測り、断面形は南側の一部が二段掘り状を呈する。井戸を掘削した人が、穴の底から地表に出やすくするための



第25図　B区SX2平面・断面図



第26図　B区SX2柱穴断面図



第27図　B区第4面柱穴平面・断面図

工夫であろうか。掘り方底部には、20cm前後の自然石を4個据えていた。これは井戸枠の沈下を防止する「石組基礎」とも考えられる(註2)。掘り方底部は下層のSD25埋土に僅かに達していた。

なおSK12は断面観察の結果、第3面からの掘り込みの可能性が高い。

［その他の遺構］

A区の北半部では、稲株痕(もしくは足跡) と思われる小ピット群が集中して見られた。

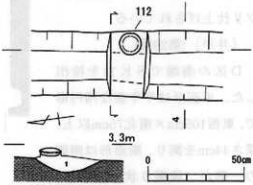
その他の遺構埋土から土師器皿(113～117・120～125)・鍋(118)、瓦質土器甕(126)、白磁椀(119)、人間の臼歯などが出土した。

ところで遺構出土遺物の年代観は、すべて二次堆積遺物のためか、下限年代を示す遺物でも鎌倉時代(13世紀代)である。後述する第5面の年代観よりも古く、層位の年代観が逆転しており、遺物からの正確な時期比定は困難である。但し上下の遺構面の年代観から勘案して、およそ室町時代でも14世紀後半から15世紀後半頃の間に比定されよう。

e．第5面(第31図)

A～D区において、大溝1条、主に東西方向の鋤溝と思われる小溝列、ピット(柱穴)、井戸1基、大型土坑2基などを検出した。

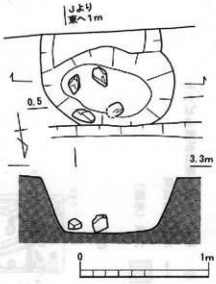
遺構面の標高は概ねA区で T.P.+3.1m、B区で T. P.+3.0～3.2m、C区でT.P.+3.4m、D区で T.P.+2.9mとなる。



第28図　B区SD15遺物出土状況図

［井戸］(第32図)

A区の西壁でＳＥ３を検出した。掘り方の平面形は他の遺構と重複しているため不明であるが、僅かな残存部分から察すると、概ね円形に近いと思われる。掘り方は検出部分で南北110cm、深さ117cmを測り、井戸枠は口径42cm、高さ45cmを測る。底部は水脈層(第15層)に達して おり、調査中も豊富な湧水が見られた。井戸枠は底を抜いた桶を上下逆さまにして井戸枠に転用し、側板を止めるタガは認められなかった。底部には口径36.4cm、器高22.4cmを測る曲物(300)を水溜めに転用していた。なお井戸枠は東半部が大きく倒壊した状態で出土したが、これは前述の第３面ＳＥ２の構築時に影響を受けたためと思われる。掘り方と水溜めとの間に隙間は一切認められず、曲物と同じ大きさに掘った掘り方に曲物を挿入したような状況であった。



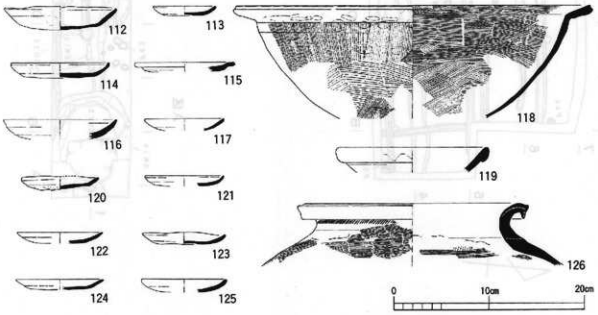
第29図　D区SK11平面・断面図

出土遺物は、井戸枠埋土内から土師器皿(136)、須恵器捏鉢(137・138)、裏込め土から須恵器捏鉢の小片などが出土したが、ごく少量であった。

136は土師器皿である。ほぼ完形の灯明皿で、口縁部に灯芯油痕が付着する。300は曲物である。ほぼ完形でかまし板を設け、綴じ皮を３箇所に設ける。

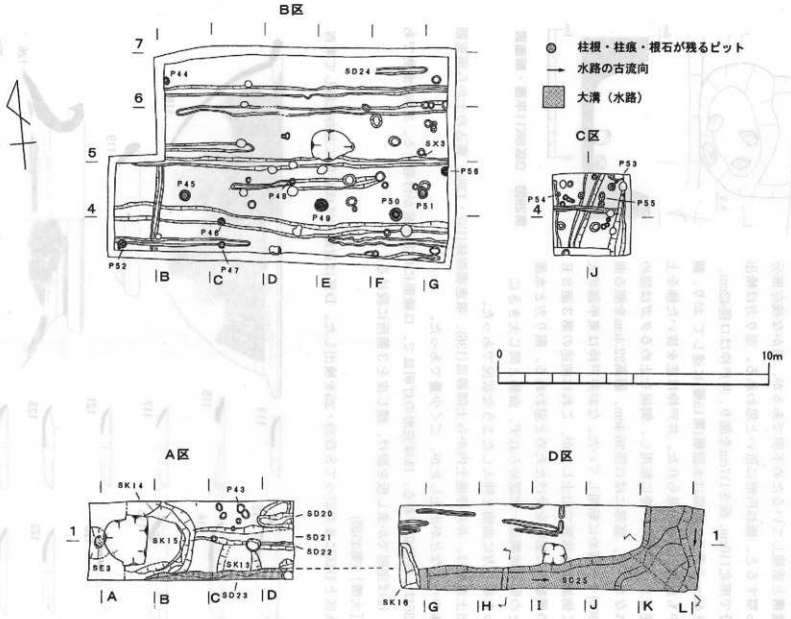
［大溝］(第35図)

A区とD区にまたがってＳＤ23・25を検出した。D区は東端でほぼ直角に方向転換して東西



第30図　第4面遺構出土遺物

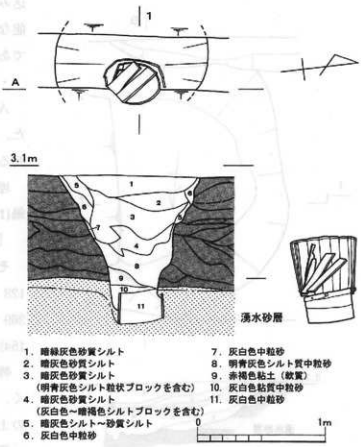
112:B区SD15, 113:B区SD16, 114:B区SK6, 115:C区P41, 116:B区SD17
117.118:B区SK7, 119:B区18, 120～124:D区SD19, 125.126:D区SK10



第31図　第5面遺構平面図

と南北方向に走向し、幅220cm以上、深さ33cmを測る。底面は南北方向に対しては北が高くて南に低く、高低差は19cmを測る。一方、東西方向に対しては西が高くて東に低く、高低差は11cmを測る。断面形はコーナー部分で逆凸形を呈し、埋土は粘土・シルト・砂からなり、波状葉理も観察できたことから流水のある大溝であったと考えられる。南辺では、断面逆台形の溝が一度埋まった後に、掘り直したような状況が断面観察により認められた。但し直角に折れる平面形態は、自然の河道と見るには不自然であり、人工的な水路のような機能をもっていたと考えられる。

埋土内から土師器皿(156～159・162)・羽釜(164)、須恵器椀(163)・捏鉢(161)、瓦器椀(160) 、平瓦(291)などが出土した。



第32図　A区SE3平面・断面図

［大型土坑］

大型土坑には、ＳＫ14・15・16がある。このうちＳＫ15・16は、いずれも土坑底部が水脈層(第15層)に達していることから、井戸枠を抜き取った井戸の掘り方の可能性も考えられる。

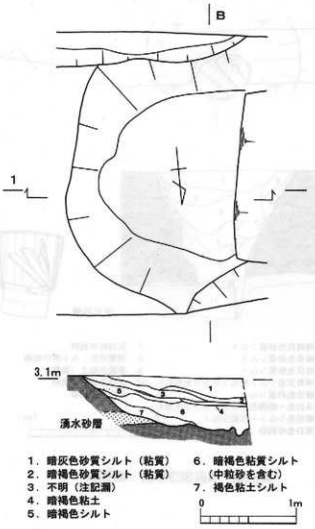
・ＳＫ15(第33図)

Ａ区の西寄りでＳＫ15を検出した。東西308cm以上×南北260cm以上、深さ63cmを測る大型土坑である。埋土内から土師器皿(129～131)・鍋(133)、須恵器捏鉢(375)・甕(132)、砥石(306)、木製品曲物(298)・箸(299)などが出土した。

土師器皿のうち、129の底面には木目状痕が残る。130は灯明皿で、口縁部に灯芯油痕が付着する。132は東播系の須恵器甕である。焼成は土師器のように軟質となり、体部外面に樹枝文様を施す。297は漆器皿である。内・外面ともに黒漆塗りで、見込みに植物の漆絵を描き、底部には高台の痕跡が残る。306は砥石である。材質は砂岩製である。

・ＳＫ16(第34図)

Ｄ区の西南隅でＳＫ16を検出した。東西90cm以上×南北120cm、深さ115cm以上(未完掘)を測り、法面は約85°の急傾斜で掘り込まれていた。埋土には細かいシルト～粘土のブロック土が含まれる。なおこの大型土坑は断面観察の結果、検出面よりも１層ないし２層上層からの掘り



第33図　A区SK15平面・断面図

込みである可能性が高い。埋土内から実測可能な遺物は出土せず、遺物量自体もごく少量であった。

・SK12

A区の北端部でSK12の一部分を検出した。東西224cm×南北55cm以上、深さ98cmを測る。

埋土内から土師器皿(140～144)、瓦質土器鍋(139)などが出土した。

［その他の遺構］

その他の遺構埋土内からは土師器皿(127・128・135・145・151)・杯(153)、瓦器椀(366・369・396・1092)、瓦質土器羽釜(149・150・154)、滑石製石鍋(321)などが出土した。

特に当遺構面では、A区からの出土量が多く、B区からの実測可能な遺物はSD24出土の土師器杯(154)1点のみであった。

第5面出土遺物の下限年代は、室町時代(14世紀後半)である。

f．第6面(第38図)

B・C区において、主に東西方向の耡溝と思われる小溝列、ピット(柱穴)などを検出した。全体的に出土遺物は少なく、実測可能な土器類はC区から出土のものにほぼ限られた。遺構面の標高は概ねB区でT.P.+3.0m、C区でT.P.+3.3mとなる。

［小溝列］

小溝はいずれも、真北に近い東西方向に走向する。断面形はU字形を呈し、幅20cm前後、深さ10cm未満のものが多いが、中には幅45cm、深さ10cm強を測るものも見られた。

いずれも溝埋土内からは、土師器の細片などが出土したが、実測可能な遺物は出土しなかった。

［柱穴・ピット］(第40図)

ピットのうち、P59に根石が認められた。C区ではP60～62に柱痕が認められた。なおP57にも柱根が認められたが、これは第5面の掘り残しの可能性が高くなった。

P61から土師器杯(168)、P77から瓦器椀(169)、P63から土師器羽釜(165)、瓦器皿(166)が、それぞれ出土した。

［落込み］

ＳＤ26は概ね南北方向に走向し、断面形は逆台形で、深さ14cmを測る。但し調査面積の関係から、厳密には落込みか溝かは不明である。埋土から土師器甕(167)が出土した。

［Ｐ58］(第39図)

Ｂ区の中央部でＰ58を検出した。東西47cm×南北30cm以上、深さ８cmを測る、平面楕円形の浅いピットである。埋土内から木製品槌(295)が出土した。なおこのピットは、第５面から掘り込まれたピットの下部である可能性が高い。

295は木製品槌である。槌部は完形で、柄を挿入するホゾ穴を斜めに穿つ。

［その他］

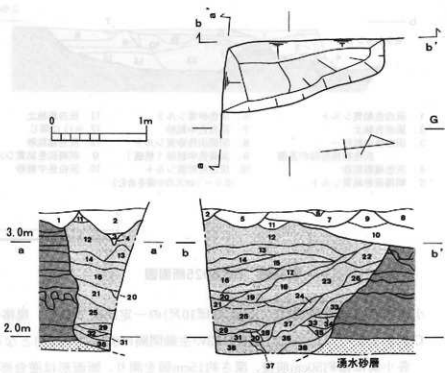
遺構面直上から、木製品用途不明の角材(301)・下駄(302)などが出土した。

301は用途不明の木製品である。直方体で、６面すべてに加工痕が残る。302は木製品下駄である。ほぼ完形の連歯下駄で、右足用である。台板に親指・人差し指と踵の荷重痕が残る。

各遺構の出土遺物の下限年代は、鎌倉時代前半(13世紀初頭)である。

ｇ．第７面(第42図)

Ａ～Ｃ区において、主に南北方向の小溝列、掘立柱建物１棟およびピット(柱穴)、井戸と思われる土坑２基などを検出した。なお図化しきれていないが、主にＢ区において、東西方向のごく浅くて輪郭の不明瞭な

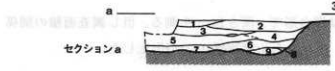


1．灰色粘質シルト
2．灰色砂質シルト
3．灰色粘質シルト
4．灰白色中粒砂
5．暗灰色砂質シルト
6．灰白色中粒砂
（鉄状酸化鉄斑が入る）
7．暗灰色粘質シルト
8．＝７に同じ
9．暗灰色シルト質中粒砂
10．灰白色シルト
（明緑灰色シルト粒状ブロックを含む）
11．灰色粘質シルト
12．青灰色粘土
（暗青灰色粘土ブロックを含む）
13．灰白色砂質シルト
（明青灰色～暗灰色粘土ブロックを含む）
14．灰色砂質粘土
（暗褐色粘土ブロックを多く含む）
15．明青灰色シルト
（灰褐色粘土粒状ブロックを含む）
16．灰色粘土
17．灰白色粘質シルト
（暗褐色粘土粒状ブロックを含む）
18．明青灰色粘土
（灰色粘土ブロックを多く含む）

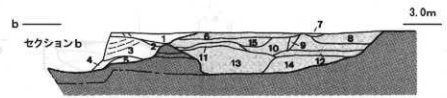
上層遺構埋土

19．灰白色粘土
（暗褐色粘土粒状ブロックを含む）
20．暗灰色粘土
（暗褐色粘土ブロックを含む）
21．灰色粘質シルト
（暗褐色粘土ブロックを多く含む）
22．灰白色粘質中粒砂
23．灰白色中粒砂
（灰色粘土ブロックを含む）
24．明青灰色中粒砂
25．灰白色粘質シルト
（暗褐色粘土ブロックを含む）
26．灰色粘質シルト
27．灰白色粘質中粒砂
（灰白色～暗灰色粘土ブロックを多く含む）
28．灰色粘土～明青灰色中粒砂
29．暗灰色シルト
30．明青灰色シルト
31．明青灰色粘土
32．明青灰色粘土
33．明青灰色粘土
34．灰白色砂質シルト
35．灰白色砂質粘土
36．暗褐色粘土
37．灰白色粘土
38．灰白色礫粗砂
（青灰色シルト・ブロック～灰色粘土ブロックを含む）

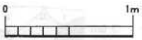
第34図　D区SK16平面・断面図



1．灰色砂質シルト
2．明緑灰色砂質シルト
3．灰色シルト（1～2cm大の礫を含む）
4．緑灰色砂質粘土
5．灰色細粒砂質粘土
6．灰白色粘質中粒砂（1～3cm大の礫を含む）
7．灰白色砂質シルト
8．明緑灰色シルト
9．灰白色砂質シルト



1．灰白色粘質シルト
2．灰白色粘土
3．灰白色中粒砂～灰色極細粒砂の互層
4．灰色極細粒砂
5．明褐灰色粘質シルト
6．灰色砂質シルト
7．灰白色中粒砂
8．明緑灰色砂質シルト
9．淡黄色中粒砂（軟質）
10．灰白色砂質シルト（0.5～1cm大の小礫を含む）
11．灰白色粘土
12．＝11に同じ
13．灰色粗粒砂
9．明褐灰色粘質シルト
10．灰白色中粒砂



第35図　D区SD25断面図

鋤溝の痕跡が、幾条も観察できた。

遺構面の標高は概ねA区でT.P.＋2.9m、B区でT.P.＋2.8～3.0m、C区でT.P.＋3.1mとなる。

［小溝列］

小溝列はいずれも真北方位に近い南北方向で、A区で1条、B区で4条、C区で1条を検出した。このうちA区SD27とB区SD29は、未掘部分をはさんで南北方位に直線状に対応することから、両小溝は一連のものの可能性が高いと思われる。小溝間の主軸の間隔は3.0m強(ほぼ10尺)の一定間隔であり、規格性を看取できる。またB区とC区をまたいで、SD31とSD33の主軸間隔は6.1m弱(20尺)となる。

各小溝は幅約50cm前後、深さ約15cm弱を測り、断面形は逆台形状を呈する。溝底はいずれも北側が高くて、南側へ低くなる状況が見られ、高低差は概ね10cm強を測る。埋土は単層の粘土やシルトであった。

SD29から土師器皿(175)、SD30から土師器皿(173)、SD31から土師器皿(170)・杯(171)、須恵器鉢(172)、SD32から土師器皿(179)・杯(177)、瓦器椀(178)、SD33から土師器皿(176)などが出土した。

［掘立柱建物］(第43図)

B区の東南隅でSB2を検出した。検出部分で桁行1間(1.37m)以上×梁行1間(1.37m)の規模である。ただしC区に対応する柱穴が検出されていないことから、桁行は2間程度の規模であったと思われる。掘り方は平面形が円形である。柱穴内のうちP69に根石、P64・65・68に柱根がそれぞれ残存していた。

このうちP64の柱痕埋土から、土師器皿(174)が出土した。この皿は口縁部に煤が付着し、灯明皿と思われる。

［井戸］

・ＳＫ17(第45図)

Ｂ区の南端で検出した。東西222cm ×南北160cm以上、深さ56cmを測る。土坑の底部が水脈層(第15層)に達していた。埋土の堆積状況から勘案して、堆積過程に不整合面が認められることから、井戸枠を抜き去った痕跡、ないしは一度埋没したものをもう一度水脈層まで掘り直した痕跡のようにも見える。素掘り井戸ないしは井戸枠を抜き去った井戸の掘り方と思われる。

埋土内から土師器杯(180)、須恵器壷(182)、瓦器椀(181)、土壁状土塊(320)などが出土した。

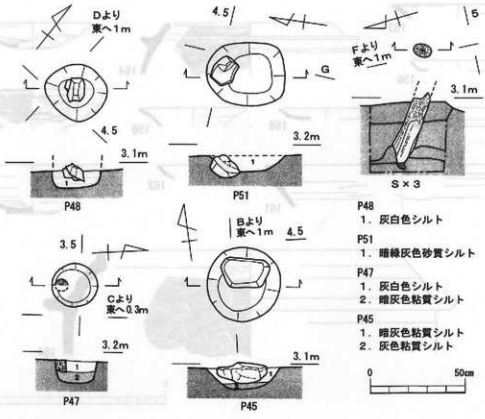
・ＳＫ18(第46図)

Ｂ区の北東隅で検出した。東西100cm以上×南北100cm以上、深さ67cmを測る。この土坑の底部も水脈層(第15層)に達していて、埋土の堆積過程に不整合面が認められ、一度埋没したものを再度水脈層まで掘り直した痕跡のようにも見えることから、素掘り井戸と思われる。埋土内から実測可能な遺物は出土しなかった。

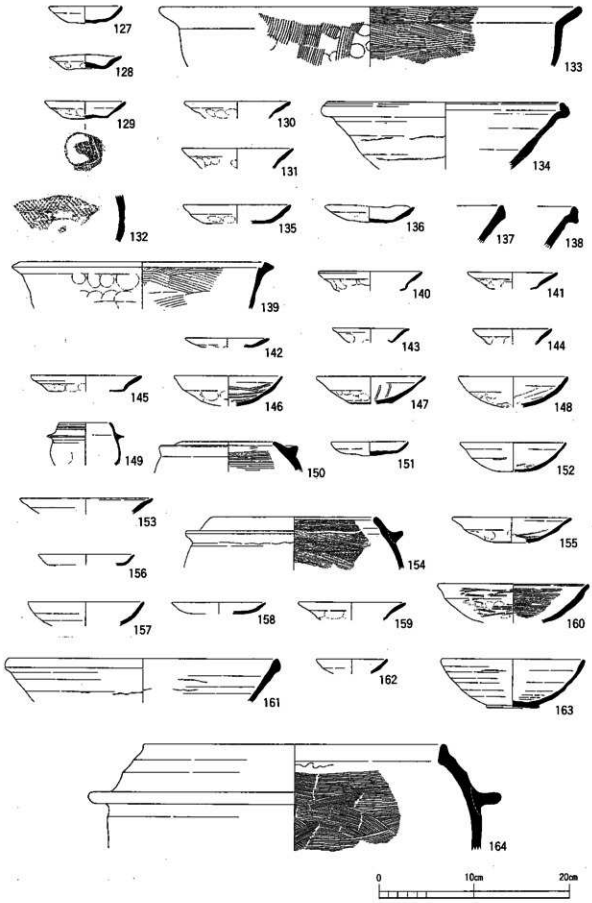
［柱穴］(第44図)

建物遺構以外のピットのうち、Ｐ73・74に根石、Ｐ76に柱根、Ｐ70・71・75に柱根が認められた。これらのピットは、東西方向や南北方向に一列に並ぶ状況が認められた。おそらく前述のＳＢ２以外にも、建物が存在したものと思われる。

各遺構内の出土遺物の下限年代は、平安時代後期(11世紀後半～12世紀初頭)である。

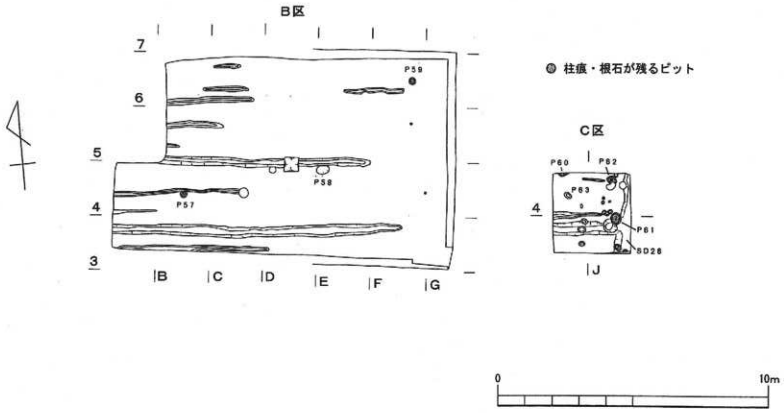


第36図　Ｂ区第5面柱穴平面・断面図

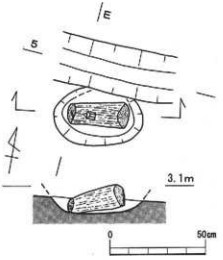


第37図　第5面遺構出土遺物

127～134：A区SG1，135：A区SD20，136～138：A区SE3，139～144：A区SK12
145～150：A区SD21，151：A区SK11，152：A区P43，153：B区SD24，154：C区P55他
155：C区P53，159.161.162.164：A区SD23，156～158.160.163：D区SD25



第38図　第6面遺構平面図



第39図　B区P58木製品様出土状況図

h．第８面(第48図)

A～D区において、南北方向の小溝、ピット、水田畦畔、浅い落込み、足跡群などを検出した。おそらく調査範囲全域が水田面と考えられる。

遺構面の標高は概ねA区とC区でT.P.+2.5m、B区でT.P.+2.8m、D区でT.P.+2.7mとなる。

［水田畦畔］

ＳＮ１はＡ区で検出された。東西方向に走向し、上幅18～42cm×下幅65～85cm、高さ６cmを測る。畦畔盛土内からは遺物は出土しなかった。また畦畔の周囲にはヒトや動物と思われる足跡が多数認められた。

［落込み］

ＳＸ４はＤ区で検出された。東西方向に走行し南方向に緩やかに傾斜する、深さ７cmを測る浅い落込みである。

埋土中から、陶邑窯ＴＫ46型式(７世紀後半)の須恵器甕(183)が１点出土した。但し後述するように、当遺構面より下層からも平安時代(11世紀代)の遺物が出土しているため、この土器片は二次堆積遺物と判断される。

［その他の遺構］

写真撮影のみで未図化であるが、Ｃ区においてヒトやウシと思われる動物の足跡群を検出した。

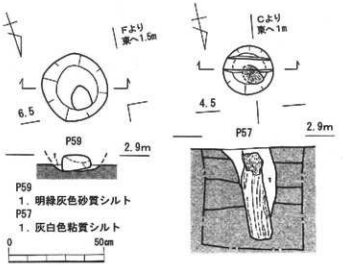
その他の遺構からは、土師器と須恵器の細片が少量出土したのみで、年代や器種を特定出来るものは無かった。但しベース層中から、概ね平安時代後期(11世紀代)を下限とする遺物が少量出土している。

i．第９面(第50図)

A～D区において、南北方向の小溝、浅い落込み、足跡群などを検出した。

遺構面の標高は概ねA区とB区でT.P.+2.5m、C区でT.P.+2.3m、D区でT.P.+2.6mとなる。

B区では、写真撮影のみで未図化であるが、無数のヒトや動物と思われる足跡が調査区全域にわたって多

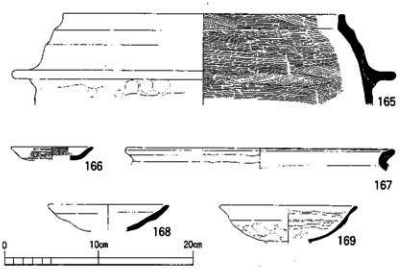


第40図　B区第6面柱穴平面・断面図

数認められた。足跡には並びの方向性は特に看見できず、不定方向に何度も往来した様子がうかがえる。足跡埋土には粗粒砂が堆積しており、洪水によって運搬された砂粒で一気に埋没したと考えられる。

［落込み］

A区とD区にまたがって、落込みＳＸ５を検出した。この落込みは東西方向に走向し、深さはA区で1.0cm、D区で５～７cmを測るごく浅いものである。落込み埋土内からは、実測可能な遺物は出土しなかった。またA区では、この落込みの肩と並走する状態で、ヒトや動物の足跡が多数認められた。落込みの肩は概ね東西方向であることと、足跡群の存在から考え合わすと、この落込みが水田区画である可能性も考えられる。



165.166:C区P63, 167:C区SD26, 168:C区P61, 169:C区P77

第41図　第6面遺構出土遺物

ｊ．第10面(第51図)

Ｂ・Ｄ区において、東西方向と南北方向に走向する小溝、浅い自然流路２条、ピット、足跡群などを検出した。

遺構面の標高は概ねＢ区でＴ.Ｐ.＋2.3m、Ｄ区でＴ.Ｐ.＋2.1mとなる。

［自然流路］

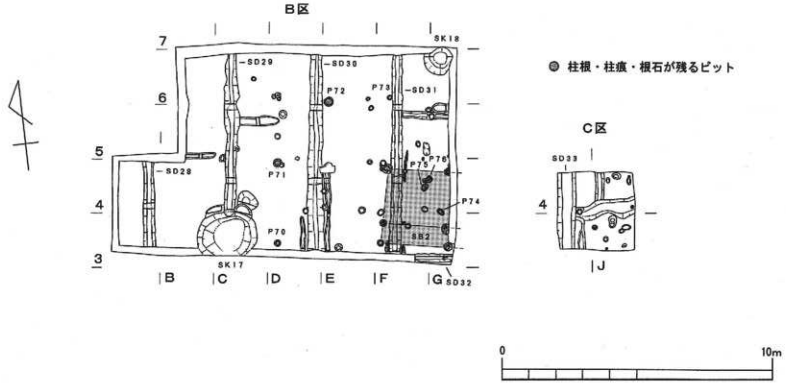
Ｂ区において、ＮＲ２とＮＲ３を検出した。ともに緩く蛇行する流路性のごく浅い溝で、埋土はいずれも黄色砂で充填されていた。各流路の溝底は、ＮＲ２は北側が浅くて、南側へと深くなり、高低差は12cmを測る。一方、ＮＲ３は西側よりも東側が僅かに深く、高低差１cmを測る。各流路における溝底面の高低差から流向を考えると、ＮＲ２は北から南方向へ、ＮＲ３は西から東方向へ、それぞれ流れていたと考えられる。

ＮＲ２の埋土内から、サヌカイト片が出土した。

［足跡群］

Ｄ区では調査区全面に、ヒトや動物と思われる足跡群が多数認められ、東南方向から北西方向の並びが見られた。当遺構面は、灰白色砂層に覆われる状態で検出されたが、この砂層は断面観察の結果葉理が観察されたことから、洪水により一気に埋没したものと思われる。

各遺構埋土内からは土師器の細片が少量出土したのみで、年代や器種を特定できる遺物は無かった。但し、当遺構面ベース層中から、奈良時代もしくは平安時代初頭(８～９世紀代)の遺物が少量出土している。



第42図　第7面遺構平面図

k．第11面(第52図)

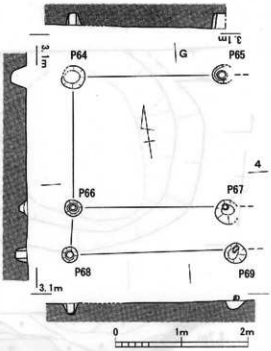
B区内に設定した確認グリッドにおいて、畦畔1条を検出した。調査範囲内は、水田面と考えられる。

遺構面の標高は概ねT.P.+1.8mとなる。

［水田畦畔］

SN2は東西方向に走向し、上幅20cm前後×下幅40cm前後、高さ6cmを測る。畦畔盛土内からは遺物の出土は見られなかった。ただし覆土層中からTK43型式の須恵器杯身(281)、ベース層中から弥生時代後期後半の弥生土器壷(284)などが少量出土している。

当遺構面は、遅くとも古墳時代後期(6世紀後半)頃に埋没したのであろう。



第43図　B区SB2平面・断面図

【註】

(1)奈良県天理市の菅田遺跡の発掘調査で類似例がある(橿考研2000)。

(2)同じく菅田遺跡の発掘調査で類似例がある(橿考研2000)。

(3) 遺物包含層出土遺物

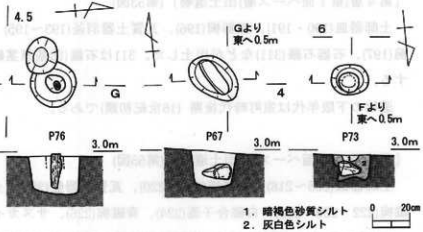
発掘調査では、遺構埋土中および遺物包含層中から、コンテナ箱20箱におよぶ遺物が出土した。その内訳は、弥生時代後期から江戸時代にかけての土器・陶磁器類・石器・木製品など多岐にわたった。

以下では遺物包含層中出土遺物のうち、特徴的な遺物や、下限年代を示す遺物を中心に記述する。

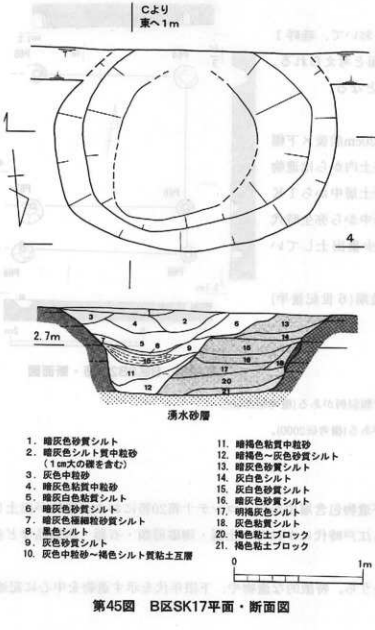
［第2層(旧耕土)出土遺物］(第53図)

陶器鍋(184)、染付皿(185)、土製玩具人形(187)、煙管(186)、銭貨「寛永通寶」(307)などが出土した。

187は土製玩具人形の胴から腕の一部である。成形は型合わせ成形により、胎土は軟質ながら磁器に近い。



第44図　B区第7面柱穴平面・断面図



第45図　B区SK17平面・断面図

186は煙管の吸い口部で、試掘調査時に該当層位から出土したものである。本体は真鍮製で、竹製の雁字の一部が残存していた。

遺物の下限年代は江戸時代中期(18世紀後半)以降である。

［第３層(第１面覆土層)出土遺物］(第53図)

瓦質土器仏花瓶(188)、瀬戸美濃焼筒茶碗(189)、銭貨「政和通寶」(308)などが出土した。

188は瓦質土器仏花瓶の頸部と思われる。まず線刻による縦の基準線を引き、その後に雷紋のスタンプを押捺している。焼成は軟質となり、土師質に近い。

遺物の下限年代は江戸時代前期(17世紀代)である。

［第４層(第１面ベース層)出土遺物］(第53図)

土師器皿(190・191)、瓦器椀(196)、瓦質土器羽釜(193～195)・鍋(192)、瀬戸美濃稜皿(198)・椀(197)、石器石鏃(311)などが出土した。311は石鏃(凹基無茎鏃)で、切先と逆利の一部を欠損する。

遺物の下限年代は室町時代後期 (16世紀初頭)である。

［第５層(第２面ベース層)出土遺物］(第55図)

土師器皿(205～218)、瓦器椀(219・220)、瓦質土器盤(225)・火鉢(227)、備前焼擂鉢(221)、白磁椀(222・223・228)、白磁合子蓋(224)、青磁椀(226)、サヌカイト片(313)などが出土した。

220は和泉型の瓦器椀である。体部外面は板ナデを、内面は板ナデ後にラセン状の暗文を施す。222は白磁椀の高台部分である。高台内面に黒漆で円を描く。227は大和産の瓦質土器火鉢(い

わゆる奈良火鉢)である。口縁部にスタンプによる花菱紋を押捺する。

遺物の下限年代は室町時代中期(15世紀後半)である。

［第６層(第３面ベース層)出土遺物］(第56図)

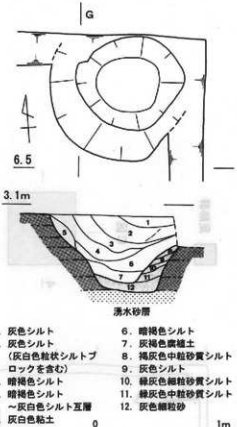
土師器皿(230・231)・鍋(234)、須恵器甕(232)・捏鉢(235)、瓦質土器羽釜(239・240)、備前焼擂鉢(236～238)、白磁椀(233)、サヌカイト片(314)などが出土した。

232は須恵器甕の体部片である。体部外面に格子目タタキ目を施し、体部内面にも平行タタキ目を施す。体部内外両面にタタキ目を施す事例は、韓国三国時代(伽耶)の陶質土器の他、国内では東播系札馬窯の生産品に例がある(註)。後者だとすれば、概ね奈良～平安時代中期の所産であろう。

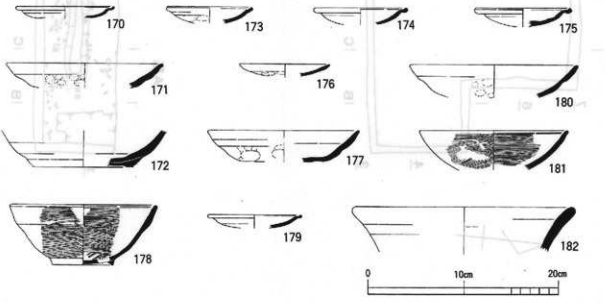
遺物の下限年代は室町時代(15世紀前半)である。

［第７層(第４面ベース層)出土遺物］(第57図)

土師器皿(243・244)、須恵器鉢(241・242)、緑釉陶器椀(247)、瓦器椀(246)、青磁椀(248)、滑石製石鍋転用の温石(303)などが出土した。303は石鍋の破片からの再利用で、破断面の３辺に二次加工痕が見られる。

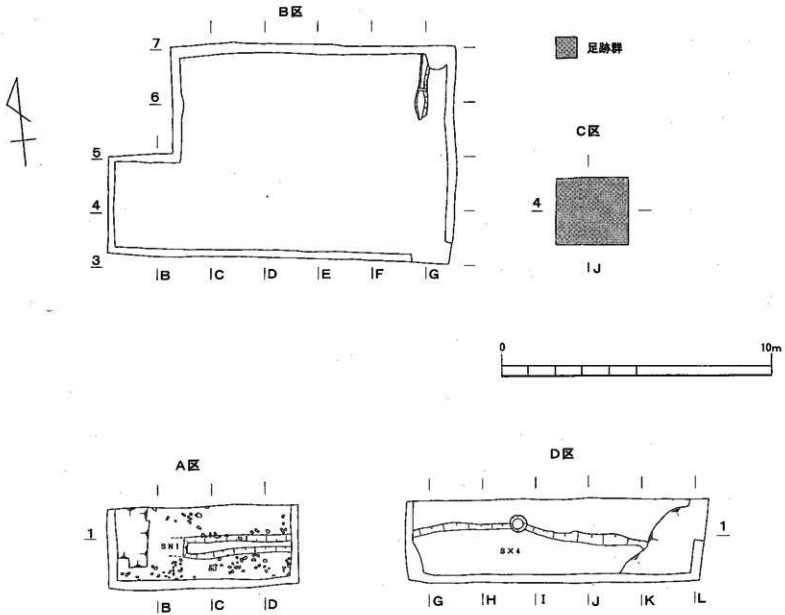


第46図　B区SK18平面・断面図



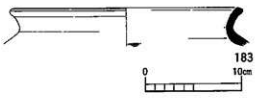
第47図　第７面遺構出土遺物

170～172：B区SD31，173：B区SD30，174：B区P84，175：B区SD29
176：C区SD33，177～179：B区SD32，180～182：B区SE6



第48図　第8面遺構平面図

遺物の下限年代は鎌倉時代(13世紀初頭)である。



第49図　第8面SX４出土遺物

［第８層(第５面ベース層)出土遺物］(第57図)

土師器皿(255)・杯(250)、須恵器平瓶(249)、緑釉陶器椀(257)、瓦器椀(260)・皿(259)、平瓦(287)などが出土した。

遺物の下限年代は平安時代末～鎌倉時代初頭(12世紀後半～13世紀代)である。

［第９－Ａ層出土遺物］(第57図)

土師器皿(254・256)・杯(251)、緑釉陶器椀(258)、竈形土製品(253)などが出土した。253は竈形土製品の掛口と庇の一部と思われる。

遺物の下限年代は平安時代後期時代(11世紀末～12世紀前半)である。

［第９－Ｂ層(第６面ベース層)出土遺物］(第57図)

全体的に出土遺物が少なく、図化出来たものは僅かに土師器皿(261)の１点のみであった。

遺物の年代は平安時代後期(11世紀末～12世紀前半)である。

［第10層出土遺物］(第７面ベース層)(第57図)

土師器皿(262・263)、須恵器瓶子(264)、白磁椀(265)、平瓦(288)などが出土した。

遺物の下限年代は平安時代後期(12世紀後半)である。

［第12層出土遺物］(第57図)

須恵器器台(268)・鉢(266)・ミニチュア瓶子(267)などが出土した。268は小片であるが、高杯型器台の脚部と思われる。櫛描き波状紋を施し、方形の透かしを推定８方向に穿つ。

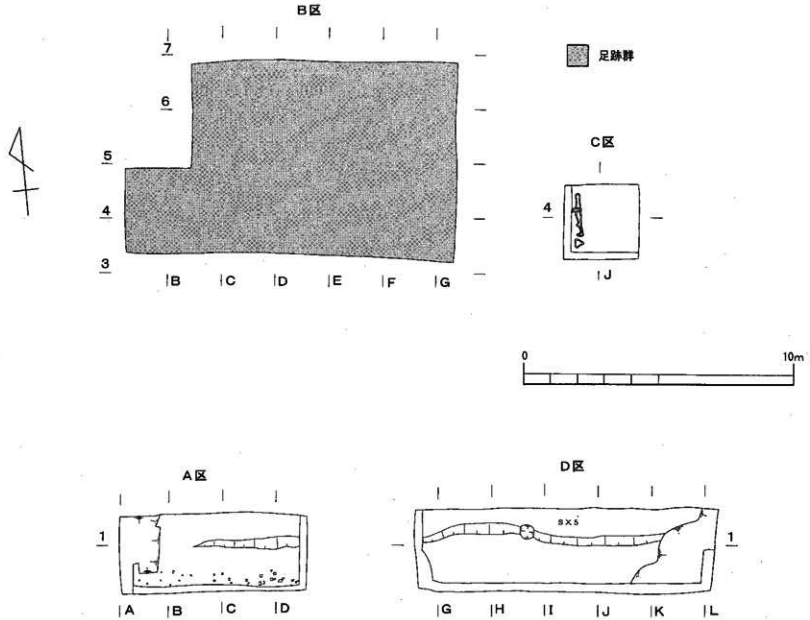
遺物の下限年代は平安時代中期(10世紀初頭)である。

［第13層(第８面ベース層)出土遺物］(第57図)

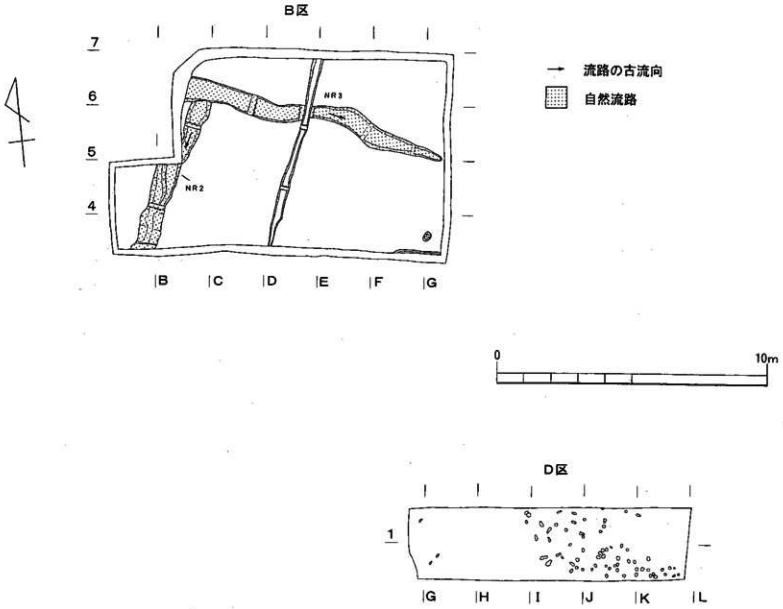
全体的に出土遺物が少なく、図化出来たものは僅かにヘラ記号のある須恵器甕(269)の１点のみであった。甕の頸部に「×」状のヘラ記号を刻む。但し当遺物の時期はＴＫ10型式(６世紀中頃)であり、二次堆積遺物と考えられる。

［第14層出土遺物］(第９面ベース層)(第57図)

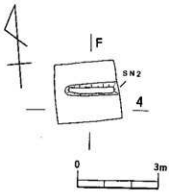
土師器杯(271)、須恵器坏蓋(273・274)・平瓶(276)・甕(282)、竈形土製品(275)、平瓦(289・290)などが出土した。



第50図　第9面遺構平面図



第51図　第10面遺構平面図



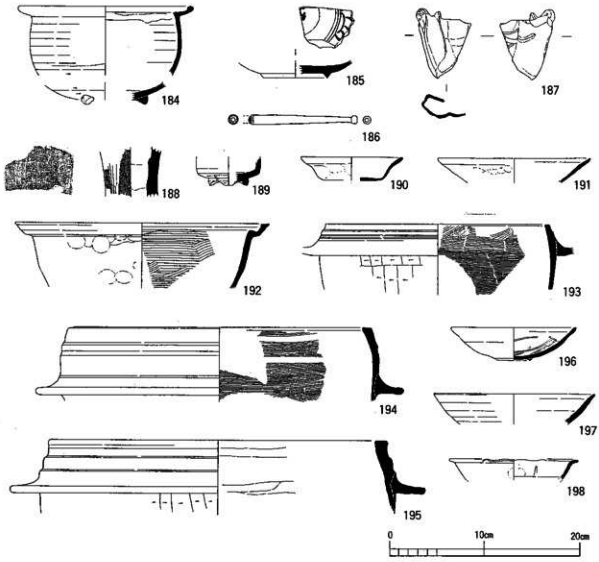
第52図　B区第11面遺構平面図

275 は竈形土製品で、炊口の庇の一部と思われる。282 は須恵器甕で、頸部にヘラ記号を刻む。一部欠損しているために現状では「キ」状を呈するが、本来は「#」状であった可能性もある。

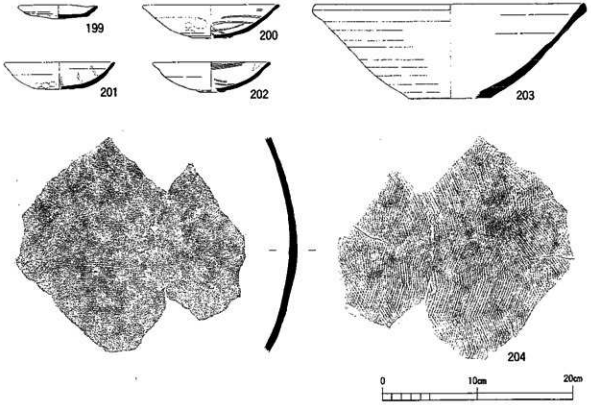
遺物の下限年代は奈良～平安時代初頭(8 世紀後半～9 世紀代)である。

［第 15 層出土遺物］(第 57 図)

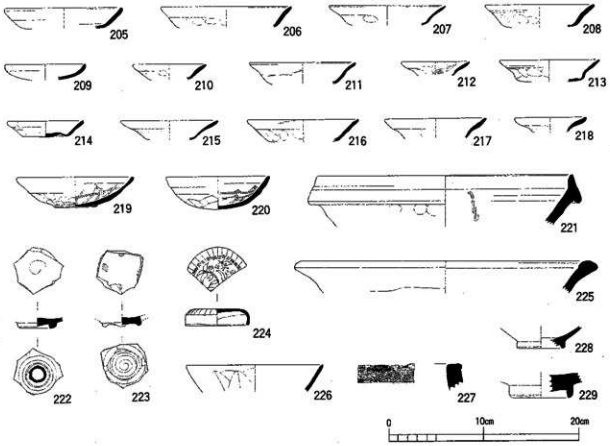
弥生土器壷(277・278)、土師器甕(279)・杯(280)、須恵器杯身(281)・短頸壷(283)などが出土した。



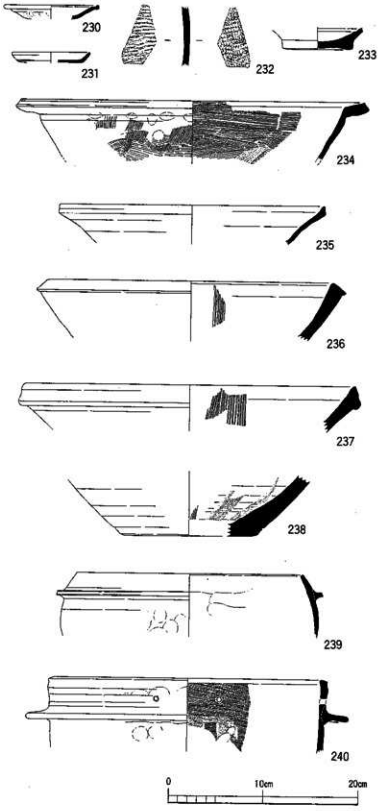
第53図　第2～4層出土遺物　184～187:第2層1, 188.189:第3層, 1900～198:第4層



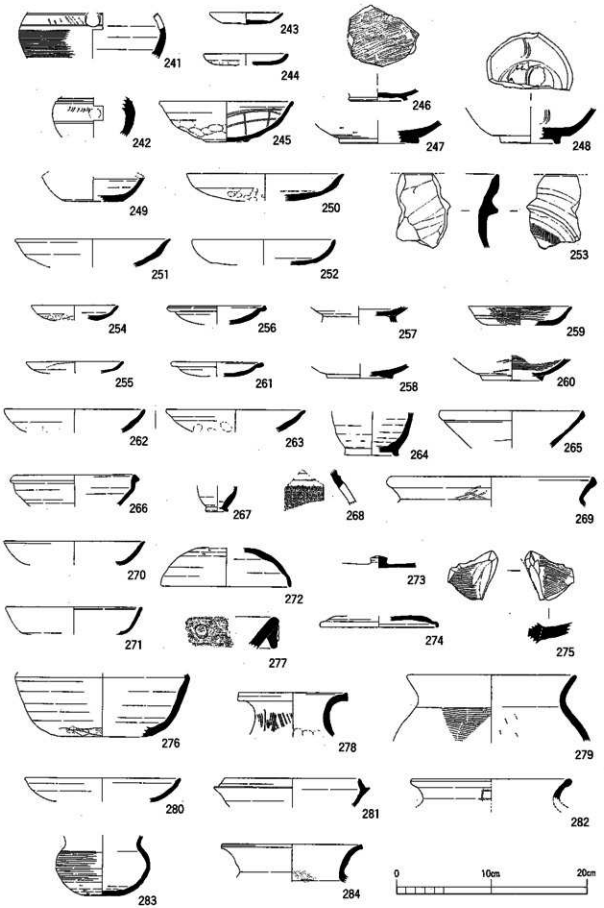
第54図　B区土器群SX1出土遺物（第5層相当）



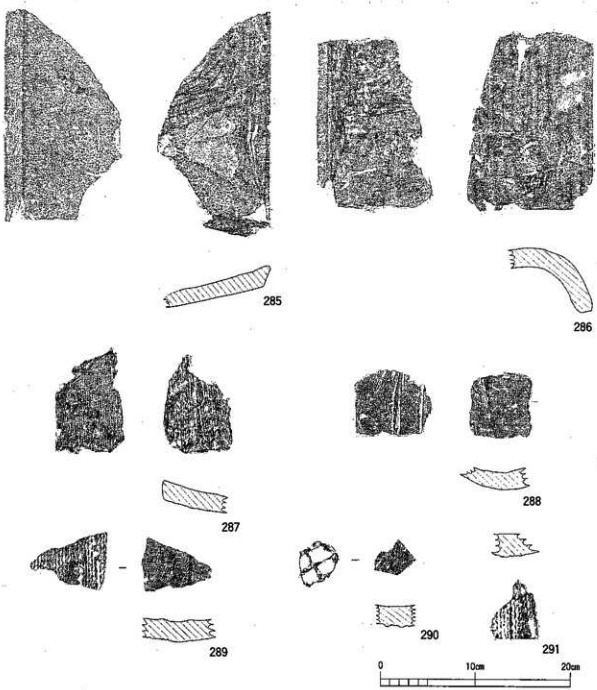
第55図　第５層出土遺物



第56図　第6層出土遺物



第57図　第7～16層出土遺物　241～248：第7層，262～265：第10層，276：第15層，249～260：第8層，266～270：第11層
277～283：第16層，261：第9層，271～275：第14層，284：第16層

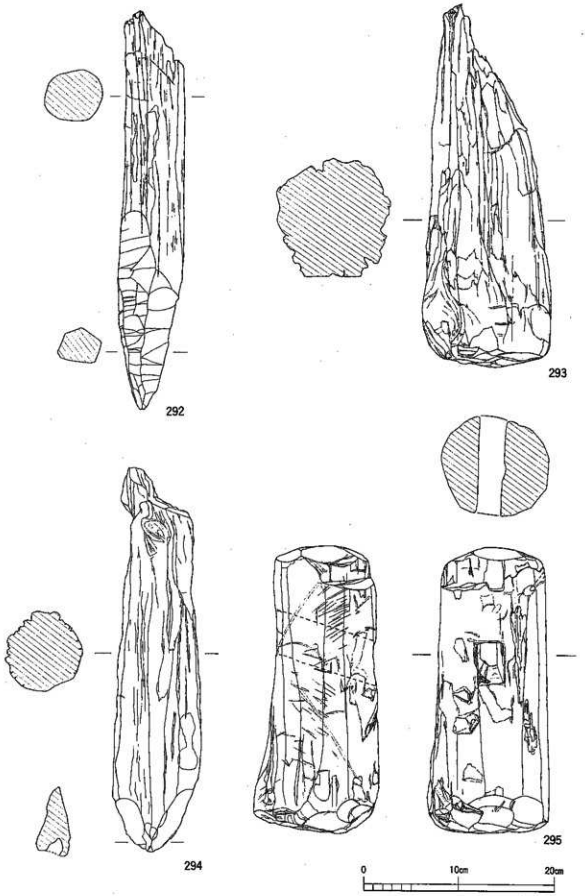


第58図　瓦実測図

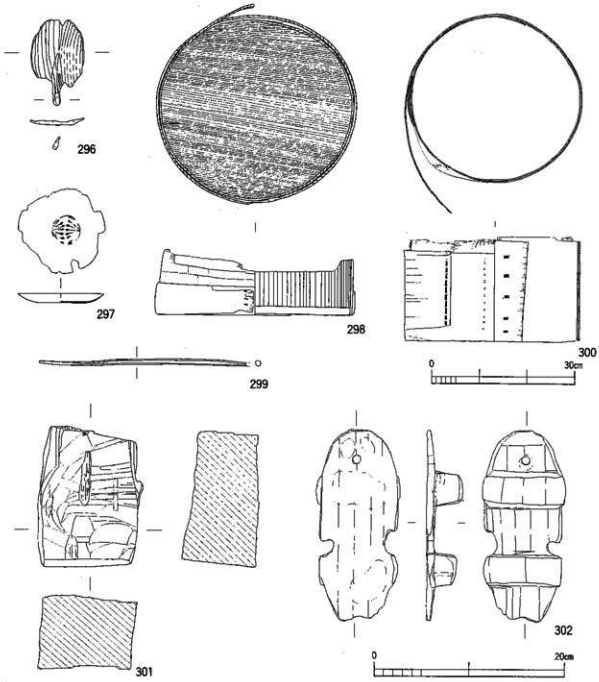
285.286:第2面B区SD5, 287:B区第8層, 288:C区第10層以下
289:D区第14層, 290:B区第14層, 291:第5面D区SD25

277 は弥生土器壺の口縁部である。口縁部端面に櫛描き列点紋を施文した後に、円形浮紋を貼り付ける。280 は土師器杯である。口縁部は僅かに外反気味で、二段ナデを施す。平安時代(11 世紀代)の特徴を備えており、混入品であろうか。

遺物の下限年代は、前述の土師器杯が混入品であるとして除外すれば、古墳時代後期(6 世紀後半)である。

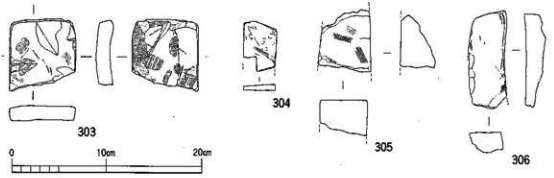


第59図　木製品実測図（1）　292：第1面B区北壁中，293：第4面B区P26，293：第4面B区P26，295：第6面B区P58



第60図　木製品実測図（2）

296：第2面B区SD5，297～299：第5面A区SK15，300：第5面A区SE3
301.302：第6面B区床面直上



第61図　石製品実測図

303：A区第7層，304：第1面B区SM5，305：第2面B区SD5，306：第5面A区SK15

［第16層(第11面ベース層)出土遺物］(第57図)

掘削面積の関係から出土遺物が少なく、図化できたものは僅かに弥生土器壷(284)の１点のみであった。

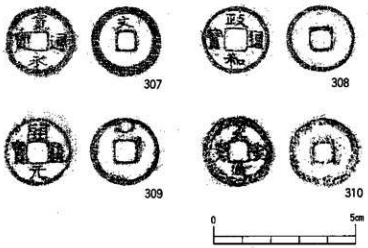
遺物の年代は弥生時代後期後半である。

【註】

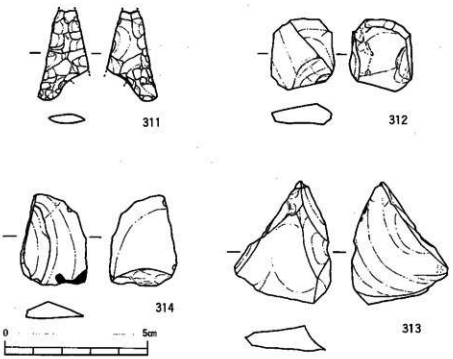
同種の須恵器甕片は、吹田市高城遺跡の発掘調査でも１点出土しているが(吹田市教委2004)、事例は多くない。

【参考文献】

池田征弘　2004『神出窯跡群』　兵庫県教育委員会



第62図　銭貨拓本　307:D区第2層，308:B区第3層
309:B区第2面SD5，310:第2面SD7



第63図　石器実測図　311:D区第4層，312:B区SD5
313:D区第5層，314:B区第6層

石井清司　1983「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第7号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

伊野近富　1990「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

江浦洋　1992「条里型水田をめぐる諸問題」『池島福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ　(財)大阪文化財センター

尾上実　1985「大阪南部の中世土器―和泉型瓦器椀―」『中近世土器の基礎研究』創刊号　日本中世土器研究会

北九州市立考古博物館(編)　1988『北九州の中国陶磁』

小森俊寛　2005『京から出土する土器の編年的研究』　京都編集工房

汐見一夫　2001「石製品の流通―砥石と硯の流通」『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会

吹田市教育委員会　2005「高城遺跡の調査」『平成16(2004)年度・埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

菅原正明　1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集

鋤柄俊夫　1988「畿内における古代末から中世の土器―横傲系土器生産の展開―」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ　日本中世土器研究会

鋤柄俊夫　1995「大阪府南部の瓦質土器生産(1)」『日置荘遺跡』分析・考察編　(財)大阪文化財センター

鋤柄俊夫ほか　1997「中世食器の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集

田辺昭三　1981『須恵器大成』　角川書店

中世土器研究会(編)　1995『概説中世の土器・陶磁器』　真陽社

永井久美男　2002『新版・中世出土銭の分類図版』　高志書院

奈良県立橿原考古学研究所　2000『菅田遺跡』(調査報告第78冊)

乗岡実　2002『岡山城三之丸曲輪跡』　岡山市教育委員会

乗岡実ほか　2004「中世陶器の物流―備前焼を中心にして―」『研究発表資料集』　日本考古学協会2004年度広島大会実行委員会

橋本久和　1992『中世土器研究序論』　真陽社

荻野繁春　2005「須恵器系陶器の編年と生産技術の展開」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』発表要旨集　全国シンポジウム実行委員会

本村充保　2006「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究」『考古学論考』第29冊　奈良県立橿原考古学研究所

森田克行　1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ　木耳社

山口均　2006「長岡京跡第431次(７ＡＮＢＵＫ－４地区)～北辺官衙(北部)～発掘調査」『長岡京跡・修理式遺跡・中海道遺跡』(向日市埋蔵文化財調査報告書第71集)　(財)向日市埋蔵文化財センター

吉岡康暢　1994『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

第Ⅳ章　まとめ

今次発掘調査では、土層および遺構・遺物の検出状況から、古墳時代後期から室町時代末～安土桃山時代にわたる総計11面の遺構面を確認した。特に、条里型地割にのっとった耕作地などを重層的に検出できたことは、大きな成果であった。

以下に、個別遺構の特徴などを項目毎にまとめて概要を記す。

(1)　条里型地割と畝・溝・畦畔について

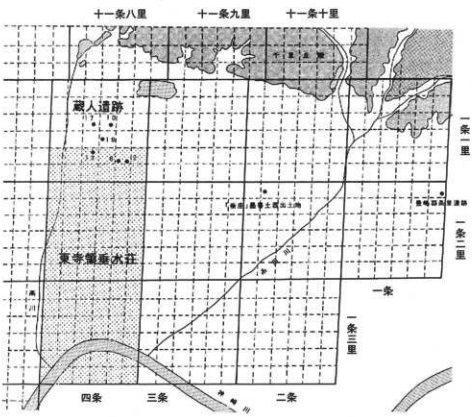
ほぼすべての調査区において、条里型地割に方位を同じくする畝・小溝・大溝や畦畔などを検出した。これらの遺構は、真北に対して１～３°ほど東に振れるものの、ほぼ真北に近い様相を示していた。なお今次調査地点は、島田次郎氏の豊島郡条里復元案に照合するならば、「４条１里16坪」に位置すると考えられる(島田1966)。

［畝溝］

第１面では、主に南北方向の畝溝や耕作溝を多数検出した。Ａ・Ｄ区とＢ区とでは、小溝間の間隔も本数も明らかに異なっており、一連の耕作作業の結果とするには不自然である。またＳＭ１のみが東西方向に走向する。したがって両調査区間の未掘部分に、これらを分け隔てる東西方向のもう１条の畦畔が存在する可能性が高いと考えられる。

［大溝］

第２面ＳＤ５は幅2.3m以上、第３面ＳＤ12は幅1.1m以上、第５面ＳＤ23・25は幅2.2m以上あり、共に埋土は粘土・シルトに混じって砂粒の平行葉理が見られ、緩やかな流水のある溝であったことが窺える。ＳＤ５は概ね直線にのびる。ＳＤ23・25についてもほぼ直線にのび、さらに調査区内東側で直角に折れる。いずれも人工的な溝と考えられ、条里型地割と



第64図　豊嶋郡条里と蔵人遺跡
（島田1996原図を基に作図　Ｓ＝1/25,000 上方が北）数字は発掘調査次数

の関わりが推測される。

流水の古流向は、溝埋土の堆積学的な検討を行ったわけではないが、溝底の計測値で、ＳＤ５は東より西の方が13cmほど低い。一方ＳＤ25は、北よりも南が約20cm、西よりも東が約10cmそれぞれ低くなっている。これは、調査地点より北方の千里丘陵側が高くて、南方の低地側が低いこと、西方に高川が流れていることと関係しているものと思われる。これらの大溝は、条里内の水利用や区画などを考察する上で、重要な視座を提供することになると思われる。

次に大溝等の位置について見ると、第１面ＳＭ１（畦畔）と第２面ＳＤ５はB区北側を東西方向にのび、ほぼ同じ位置にあるが、第3面以下には、同様な遺構が認められず、かえって第５面では、Ａ区・D区においてＳＤ23・25があり、第２面を境に、東西方向の大溝の位置が約19ｍ異なっている。また、南北方向の溝は、第１・２面では見られないのに対し、第3面ＳＤ12と第５面ＳＤ25の南北部分はほぼ同じ位置に見られることから、室町時代前期（15世紀代）に条里型地割に何らかの変化があった可能性が考えられる。

［小溝列］

第２～６面で最も多く検出されたのが、東西方向や南北方向に走向する小溝列であった。この種の小溝は、「中世素掘り小溝」あるいは「鋤溝」などと呼ばれる、「鋤起し」作業に伴って大地に刻まれた耕作活動の痕跡と考えられる。

溝の方位は概ね条里型地割に沿いつつも、断面形は浅いU字形を呈し、小溝同士の間隔は不規則である。また各小溝に複雑な重複関係が見られるのは、数時期にわたって鋤起しが繰返し行なわれた結果と考えられる。

これらの小溝列については、第６面から第３面においては概ね東西方向を示す。一方、第１面の畝溝は、南北方向にのびている。また第２面については、小溝に重複関係があり、東西方向の小溝列の後、南北方向の小溝列が新たに掘削されている。このことから、耕作溝の方向性について、室町時代後期（16世紀代）を境にして、東西方向から南北方向へと方向性が変化した可能性が推測できる。

［第７面の小溝列］

第７面において検出した小溝列は、南北方向に走向し、溝間の間隔は3.0ｍ強(＝10尺間隔)の等間隔で整然と掘られており、断面形は逆台形で深さ15cm前後ほどである。またＢ区ＳＤ31とＣ区ＳＤ33の間隔は6.1ｍ弱(＝20尺)である。また地盤は南側に対して緩く傾斜するが、溝底もこれに対応して、南側が約10cm強の高低差をもって低くなる。したがってこれらの小溝列は、鋤溝のような耕作行為によって刻まれた痕跡などではなく、計画性をもって実施された土木工事のようにも思われる。

なお、近時この種の小溝列の性格について、荘園開発前の「悪水抜き」や、開拓工程の「条里形耕地の割付基準線」であるとする見解が提唱されている(註)(山川2003)。当遺跡における小溝列も、当地の荘園開発を考えるうえで、興味深い遺構と言えよう。

［畦畔］

水田畦畔は、第８面Ａ区で東西方向に１条(ＳＮ１)と、第12面Ｂ区(確認グリッド部)で同じく東西方向に１条(ＳＮ２)をそれぞれ検出した。方位はいずれも、ほぼ真北方位に直交する東西方向である。また第９面のＡ・Ｄ区間にまたがって検出した浅い落込み(ＳＸ５)も、ほぼ東西方向であり、Ｂ区では足跡群を多数検出していることから、これも水田区画である可能性が考えられる。

第12面ＳＮ２は、発掘調査範囲が僅か３ｍ四方での検出であるが、この範囲で見る限りやはり東西方向を意識している。年代を示す良好な出土状態の遺物が少ないが、古墳時代後期(６世紀代)頃には洪水で埋没したとみられるので、その直前ないしはそれ以前の所産と考えられる。

(2) 建物について

掘立柱建物は、いずれも室内での整理作業段階において、図面上で検討し、復元を試みた。したがって編者の復元試案的要素が強くなることは否めない。そのため、今回は可能性の高いものだけを提示した。

第２面から第７面の各遺構面において、掘立柱の根石や柱根・柱痕を有するピットを多数検出した。これらの遺構は、建物を構成する柱穴である可能性が高い。調査面積の関係もあるが、建物跡として可能性のあるものは、第３面ＳＢ１、第４面ＳＸ２、第７面ＳＢ２の僅か３棟であった。但し、これ以外にも条里型地割に沿う方位で、ピットが東西方向や南北方向に対して、約２ｍ前後の間隔で直線的に並ぶ箇所が何箇所か見られることから、本来はもっと多くの建物が建っていた可能性がある。

推定される建物は、いずれも２間×１間程度の規模で概して小型であるが、上記の検出状況から見て実際にはさらに広がる可能性がある。ＳＢ１・２は、ともに梁行が東西方向に対して面している。いずれの建物の並びも、条里型地割にのっとっている。また柱穴の底部に、根石を据える状況が見られた。この土地が砂質土で形成された軟弱地盤のため、建物の重量による柱の沈下を防止するためであろうことは想像に難くない。

ところで、これまで発掘調査で確認された蔵人遺跡内の建物遺構は、第２・６次調査の鍛冶工房跡と見られる13世紀後半の建物群がある。また集落関連の遺構を含めると、第１次調査の鎌倉時代後半の井戸群がある。その点でも今次発掘調査において、平安時代後期から鎌倉時代にまで遡る建物遺構を確認した意義は大きいと言えよう。

また建物・柱穴は、主に第３～７面において検出したことは前述したが、第２面では根石を据えるような柱穴と呼べるピットは、僅かに１基のみであり、また第１面では、柱穴と呼べるピットは皆無であった。発掘調査面積の限界もあるが、居住域が室町時代後半(15世紀前半以降)に移動があった可能性を物語っており、蔵人村の変遷を考慮する上でも示唆的である。

(3) 井戸・大型土坑について

井戸は、桶積上げ井戸を２基、井戸の可能性が高い土坑を５基検出した。井戸と断定した根拠は、程度の差はあれ埋土の完掘段階で、実際に湧水が見られたことによる。

いずれの井戸も、掘り方はやや不定形ながらも概ね円形を呈する。井戸枠が残存する井戸には、第３面ＳＥ２と第５面ＳＥ３とがあり、桶や曲物を井戸枠に転用していた。また第２面ＳＥ１の土坑底部には、かつて井戸枠が存在していたかのような円形の荷重痕が認められた。

第４面ＳＫ11の土坑底面には、井戸枠用の根石「石組基礎」と思われる、人頭大よりもやや小さい自然石を４個据えていた。これらも同様に、井戸枠を有する構造であった可能性がある。

また井戸に類するものに、大型土坑３基を検出した。第５面ＳＫ15・16があり、ＳＫ14は調査範囲の関係で全容を検出していないが、いずれも概ね平面が円形に近い大型土坑である。ＳＫ16は最も鋭く掘り込んだ箇所では、勾配が85°近い急傾斜であった。井戸遺構と同様に、湧水が見られた。これらの大型土坑は、井戸枠を抜き去った後の掘り方の可能性も考えられる。

このうち、ＳＥ２・３とＳＫ15・16の掘り方底部は、第15層の灰白色砂礫層に達しており、この土層を水源としている。この水脈層は、現在でも豊富な湧水が見られた。

一方、第２面ＳＥ１は下層遺構の自然流路ＮＲ１を、第３面ＳＫ６と第４面ＳＫ11は流水痕のある大溝ＳＤ25をそれぞれ水源としていた。

このような埋没流路の湧水を井戸の水源とした事例として、吹田市内の発掘調査例では、藏人遺跡・第10次調査や(吹田市教委2007)、榎坂遺跡・第６次調査、それに(財)大阪府文化財センターが実施した吹田操車場遺跡でも確認されている(大文セ2007)。当時の人々が、地上からいかにして地下水脈の存在を知り得て、しかもピンポイントで正確に掘り当てることができたかなど、技術面で不明な点も多いが、それにしても先人の知恵には驚かざるをえない。

ところでＳＥ２の埋土最下層から、15世紀前半に相当する完形の瓦器小皿が１点出土した。また同井戸の裏込め土内からも、完形の状態で土師器小皿が２点出土した。井戸枠最下層から出土したということは、井戸を埋め戻す最初の段階で入ったと考えられる。ところで日常雑器としての瓦器生産は、14世紀後半をもってほぼ終了する。しかし河内長野市周辺では、16世紀頃まで瓦器生産が続き、地慎具として用いられる事例も見られる。このようなことから察してこの瓦器小皿は、井戸を埋め戻す際の祭祀行為の可能性も考えられる。

(4) 土地利用の変遷

各遺構面より検出した遺構を、土地利用の変遷の視座から概観すると、第７面(平安時代後期)を境としてそれ以前と以降とでは、耕作地景観が変化する状況が認められた。

［古墳時代後期以前］

第11面(６世紀後半)より下層については、各調査区内に部分的に設定した確認トレンチを通して断面観察を行なったが、明確な遺構は認められなかった。遺物もＢ区第11面ベース層で、土器の小片が若干出土したのみであった。また当地の土壌は、未分解の植物遺体を多く含む黒

褐色有機質粘土と、有機質を含まない灰色粘土との互層であった。このことから当調査地点における水田耕作開始以前は、水生植物が頻茂する湿地ような湿潤な環境で、人間の生活には不向きな環境であったと推測される。

［古墳時代後期～平安時代中期］

第11面(６世紀後半)から第８面(10世紀代)にかけては、地盤のベースとなるのは保水性の強い粘土層で、畦畔・稲株痕・ヒトや動物(ウシ等)の足跡が残されていた。このような状況から判断して、湿潤な土地を利用した水田耕作が営まれていた可能性が高い。出土遺物は少なく、当地には水田が広がり、居住域は別の離れた場所に存在した可能性が高いと思われる。

また第11面上面を覆い尽くす分厚い洪水砂層を始めとして、各遺構面の足跡には砂粒が埋土として充填されていた。このような状況は、当地が洪水に見舞われ易い土地で、その都度耕作地の復旧作業を繰り返していた様子が想像される。

また地盤高は、北側のＢ・Ｃ両区がやや高くて、東南側のＤ区が特に低くなっている。当地は元々、北側が微高地で、東南側に浅谷が存在する起伏のある土地であったようである。

［平安時代後期～中世末］

第７面(11世紀後半～12世紀初頭)から第１面(16世紀後半)にかけては、平安時代後期を境に沖積作用による地盤の上昇化と水平堆積が進行する時期である。特に室町時代後期に至って、当調査地点では水田経営から畠作経営に転化していった様子が窺える。地盤のベースとなるのは、やや粘性のある細粒砂質シルト層で、保水性が弱く比較的水捌けが良い乾いた土壌であった。この土壌をベースとして、畠の畝・勘溝などの耕作遺構や、建物・井戸などが認められた。各遺構面を通じて、地盤のやや高いＢ・Ｃ区に建物(柱穴のみを含む)が集中し、一方のやや低いＡ・Ｄ区に井戸が集中する傾向が見られた。

ところで第２面ＳＤ５から出土した遺物の中に、仏花瓶・火鉢・瓦などの中世寺院の存在の可能性を考えさせる遺物が含まれていた。また近接する同遺跡・第19次調査でも、15世紀代の軒平瓦を含む瓦類が出土しており、これらとの関連も注目される。文献史料によると中世段階には、当調査地よりやや南側付近に、「円臨寺」が存在していたことが知られている。これまでの調査では、伽藍遺構など直接寺院に結びつく遺構は検出されておらず、所在地は依然として未確認のままである。しかし上記出土遺物との関連を勘案すると、当調査地近隣に中世寺院の遺構が存在する可能性を示唆させるものである。

【註】

当遺跡第７面小溝列の類似例として、奈良県大和郡山市の中付田遺跡の検出遺構が挙げられる。山川均氏によれば、小溝列は「東西方向に一定の間隔(2.1～2.2ｍ＝７尺等間)」あるいは「(3.3～3.5ｍ＝11 尺等間)」に「整然と掘られたもので、溝の底面には農具痕は見られず、平坦である」とする。そしてこの種の小溝列の性格を、「若干の起伏を有する地形を広域にわたって平坦化し、そこを耕地とする場合、すなわち条里形をその典型例とするような耕地開発の痕跡」であるとする。

【参考・引用文献】

井上智博　1999「池島・福万寺遺跡の形成過程と景観変遷」『研究調査報告』第２集　(財)大阪府文化財調査研究センター

宇野隆夫　2001『荘園の考古学』　青木書店

小野正敏(編)　2001『図解・日本の中世集落』　東京大学出版会

(財)大阪府文化財センター　2008『吹田操車場遺跡』Ⅲ(大阪府文化財センター調査報告書第 180 集)

島田次郎　1966「中世村落研究の意義と方法」『日本中世村落史の研究―摂津国豊嶋郡榎坂郷地域における―』吉川弘文館

吹田市教育委員会　2007『蔵人遺跡発掘調査報告書Ⅰ―蔵人遺跡第 10 次発掘調査―』

吹田市史編さん委員会(編)　1990『吹田市史』第１巻　吹田市役所

山川均　2003「開発・溜池・環濠」『戦国時代の考古学』　高志書院

遺 物 観 察 表

＜遺物観察表凡例＞

・挿図に掲載した遺物は全て観察表で収載しているが、写真のみ図版で掲載したものについては収載していない。

・観察表中の記述内容は遺物番号、器種・形式、調査区、層位・遺構、残存状況、寸法(cm)、色調、時期、備考の順に記した。
時期は時代名の後に( )して世紀を並記した。

・色調は、小山正忠・竹原秀雄　1987『新版・標準土色帖』を使用し、外面・内面・断面の順に記した。

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
1	土師器皿	A区	第1面 SD3	口縁部1/8残存	残高2.0 口径9.3	外)橙橙色5YR8/4 内)橙橙色5YR8/3 断)灰白色5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
2	瀬戸美濃焼皿	A区	第1面 SD3	底部1/8残存	残高1.7 底径9.8	施釉)オリーブ灰色10Y6/2 ～10Y4/2 露胎)灰白色5Y8/1～ にぶい黄色2.5YR6/3 断)灰白色10Y8/1	室町～安土桃山時代 (16世紀後半)	
3	青磁椀	A区	第1面 SD4	口縁部1/11残存	残高3.4 口径12.0	施釉)オリーブ灰色10Y4/2 断)灰白色N7/0	室町時代 (14～15世紀代)	貿易陶磁器(中国明代)
4	土師器皿	B区	第1面 SM1	口縁部1/6残存	残高1.9 口径11.8	外)灰白色7.5YR8/2 内)橙橙色5YR8/4 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
5	土師器皿	B区	第1面 SM2	口縁部1/9残存	残高2.2 口径8.8	外内)灰白色10YR8/1 断)灰白色10YR8/2 ～褐灰色10YR4/1	室町時代 (14世紀代)	京都系 内面成形
6	土師器皿	B区	第1面 SM2	口縁部1/7残存	残高1.6 口径9.6	外内断)灰白色10YR8/2	室町時代 (14世紀代)	京都系 手づくね成形
7	土師器皿	B区	第1面 SM2	口縁部1/7残存	残高2.2 口径9.8	外内)灰白色2.5Y8/2 断)灰白色2.5Y8/2 ～褐灰色10YR4/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
8	土師器皿	B区	第1面 SM2	口縁部1/8残存	残高1.7 口径10.9	外)橙黄色2.5Y8/4 内)灰白色2.5Y8/2 断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
9	土師器皿	B区	第1面 SD2	口縁部1/3残存	残高1.5 口径6.8	外)橙黄橙色7.5YR8/3 内)灰白色7.5YR8/2 ～灰白色5Y8/1 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
10	土師器皿	B区	第1面 SM1	口縁部1/12残存	残高2.2 口径10.2	外断)灰白色7.5YR8/2 内)橙黄橙色7.5YR8/3	室町時代 (14世紀後半)	京都系 手づくね成形
11	青磁椀	B区	第1面 SM1	底部1/3残存	残高1.8 高台径5.6	施釉)オリーブ灰色5GY6/1 露胎)灰色N6/0 断面)灰色N7/0	室町時代	貿易陶磁器(中国明代)
12	青磁椀	B区	第1面 SM4	口縁部小片	残高4.2	施釉)オリーブ灰色10Y5/2 断)灰白色N8/0	鎌倉～室町時代 (13～14世紀代)	貿易陶磁器(中国明代) 体部：蓮弁紋
13	瓦質土器火鉢	B区	第1面 SM4	口縁部小片	残高2.9	外内)暗青灰色5PB4/1 断)明紫灰色5P7/1	室町時代 (15世紀後半)	大和座 口縁部：花菱紋を押捺
14	土師器皿	B区	第2面 SD5	口縁部1/6残存	残高2.8 口径12.4	外)にぶい黄橙色10YR7/2 内)橙黄橙色0YR8/3 断)灰白色10YR8/2	室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ 底部：木目状痕
15	土師器皿	B区	第2面 SD5	口縁部1/5残存	残高2.1 口径11.4	外内断)灰白色7.5YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
16	土師器皿	B区	第2面 SD5 (平面図)	口縁部1/4残存 底部完存	器高2.1 口径9.9	外)灰白色10YR8/2 内)褐灰色10YR6/2 断)灰白色10YR7/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：煤が付着(灯明皿か)
17	土師器皿	B区	第2面 SD5 (下層)	口縁部1/5残存	器高1.9 口径10.0	外内断)灰白色10YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ 底部：木目状痕
18	土師器皿	B区	第2面 SD5 (平面図)	完形	器高1.4 口径7.3～7.8 平均口径7.6	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
19	土師器皿	B区	第2面 SD5 (下層)	ほぼ完形	器高1.6 口径7.6～7.8 平均口径7.7	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ 底部：木目状痕
20	土師器皿	B区	第2面 SD5 (平面図)	口縁部1/4残存 底部完存	器高1.8.0 口径9.8	外)灰白色2.5Y8/2 内断)灰白色10Y8/2	室町時代 (15世紀前半)	京都系 手づくね成形 口縁部～内面：煤が付着(灯明皿か)
21	土師器皿	B区	第2面 SD5 (中層)	完形品	器高1.5 口径8.0～8.2 平均口径8.1	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ
22	土師器皿	B区	第2面 SD5	ほぼ完形	器高2.0 口径8.9～9.4 平均口径9.2	外)灰白色2.5Y8/2 内)浅黄色2.5Y8/3 断)灰白色10YR7/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
23	土師器皿	B区	第2面 SD5 (中層)	口縁部1/4残存	器高1.7 口径9.8	外)灰白色10Y8/1 内)灰白色10Y8/2 断)褐灰色10YR6/1 ～灰白色10Y8/2	室町時代初頭 (15世紀代～16世紀初頭)	京都系 手づくね成形 底部：木目状痕
24	土師器皿	B区	第2面 SD5 (中層)	ほぼ完形	器高1.8 口径7.1～7.4 平均口径7.3	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代初頭 (16世紀初頭)	京都系 手づくね成形 底部はやや平底状
25	土師器皿	B区	第2面 SD5 (下層)	完形	器高1.5 口径8.1～8.4 平均口径8.3	外断)によい黄橙色10YR7/2 内)灰白色10YR7/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
26	土師器皿	B区	第2面 SD5 (平面図)	完形	器高1.8 口径7.4～7.8 平均口径7.9	外断)灰白色2.5Y8/1 内)灰白色2.5Y8/2 ～黄灰色2.5Y5/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ
27	土師器皿	B区	第2面 SD5 (中層)	口縁部1/4残存	器高1.6 口径6.2	外内)灰白色2.5Y7/2 断)灰白色2.5Y7/1	室町時代 (15世紀後半)	京都系 手づくね成形 口縁部：灯芯油痕が付着(灯明皿)
28	土師器羽釜	B区	第2面 SD5 (中層)	口縁部小片	残高5.2	外)褐灰色10YR6/1 内)によい黄橙色10YR7/2 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (15～16世紀代)	京都型
29	土師器鍋	B区	第2面 SD5 (上層)	口縁部1/5残存	器高8.5 口径37.8	外)褐灰色5YR4/1 内)明褐灰色7.5YR7/1 断)赤灰色2.5YR4/1	不明 (13世紀頃か?)	在地産

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
30	須恵器甕	B区	第2面 SD5 (平面図)	体部小片		外)灰白色2.5Y8/2 内断)灰白色2.5Y8/1	鎌倉～室町時代 (13～14世紀代)	東播系 備成は土師質に近い 体部外面：櫛状波線
31	瀬戸美濃焼 天目茶碗	B区	第2面 SD5 (平面図)	底部1/3残存	残高6.2 口径11.8	施釉)にぶい赤褐色5YR4/3 ～黒色5YR1.7/1 露胎)灰白色5Y7/1 断)灰白色N8/0	室町～安土桃山時代 (16世紀代)	
32	瀬戸美濃焼皿	B区	第2面 SD5	口縁部1/7残存	残高2.0 口径11.8	施釉)灰褐色7.5YR4/2 露胎)灰白色5Y7/1	室町時代	
33	瀬戸美濃焼仏花瓶	B区	第2面 SD5 (平面図)	頸部欠損 体部完存	残高10.6 胴径6.4 底径5.8	施釉)浅黄色7.5Y7/3 露胎)灰白色5Y8/2	鎌倉末～室町時代初 (14世紀前半)	呼び継ぎ痕あり (破断面に黒漆が付着)
34	緑釉陶器椀	B区	第2面 SD5 (下層)	高台1/6残存	残高1.6 高台径6.8	施釉)オリーブ灰色5GY6/1 露胎)灰白色5GY8/1	平安時代 (9世紀後半～11世紀初)	
35	白磁椀	B区	第2面 SD5 (下層)	底部1/5残存	残高1.9 高台径6.4	施釉)灰白色2.5GY8/1 露胎)灰白色10Y8/1	平安時代 (11世紀後半～12世紀前半)	貿易陶磁器(中国宋代)
36	土師器？皿	B区	第2面 SD5 (中層)	口縁部1/7残存	残高1.4 口径10.2	外)明褐灰色5YR7/1 ～明褐灰色5YR6/1 内)灰白色10YR7/1 断)灰色10Y6/1	不明	備成は硬質で薄手 口縁部は玉縁状
37	備前焼壺	B区	第2面 SD5 (下層)	口縁部1/4残存	残高3.4 口径10.6	外)暗赤褐色5YR3/3 内)褐灰色5YR4/1 断)黒褐色5YR3/1 ～灰白色10YR7/1	鎌倉末～室町時代初 (14世紀前半)	
38	須恵器擂鉢	B区	第2面 SD5 (下層)	口縁部1/10残存	残高3.7 口径27.4	外内断)灰色10Y6/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀前半)	東播系
39	瓦質土器擂鉢	B区	第2面 SD5 (中層)	口縁部1/8残存	残高5.1 口径25.8	外)暗青灰色5PB3/1 内)暗青灰色5PB4/1 断)暗紫灰色5P7/1	室町時代 (15世紀後半)	内面：8条1組の擂目
40	須恵器擂鉢	B区	第2面 SD5 (下層)	口縁部1/9残存	残高3.9 口径31.6	外内断)灰白色N7/0	室町時代 (15世紀頃か？)	東播系 内面：5条1組のヘラ描き擂目
41	備前焼擂鉢	B区	第2面 SD5 (下層)	口縁部1/9残存	残高5.6 口径26.8	外)赤褐色10R4/3 ～褐灰色10YR5/1 内)灰白色N8/0 断)灰白色N8/0 ～灰褐色5YR4/2	室町時代 (14世紀中頃～15世紀前半)	内面：6条1組の擂目
42	備前焼擂鉢	B区	第2面 SD5 (平面図)	底部1/5残存	器高9.9 口径28.4 底径14.6	外内)灰赤色2.5YR4/2 断)灰赤色2.5YR4/2 ～灰白色N7/0	室町時代 (14世紀中頃～15世紀前半)	内面：11条1組の擂目
43	備前焼擂鉢	B区	第2面 SD5 (平面図)	底部1/5残存	器高7.7 口径15.2	外内断)赤褐色10R4/3	室町時代 (14世紀中頃～15世紀前半)	内面：6条1組の擂目

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
44	土師器羽釜	B区	第2面 SD5 (平面図)	口縁部1/6残存	残高4.7 口径23.3 羽根径30.4 胴径25.9	外)黒褐色5YR3/1 ～にぶい橙色5YR5/3 内)褐灰色7.5YR4/1 ～にぶい橙色5YR6/3 断)褐灰色7.5YR8/1	室町時代 (15世紀前半)	和泉・河内型
45	瓦質土器羽釜	B区	第2面 SD5 (中層)	口縁部1/8残存	残高6.0 口径24.0 羽根径32.7	外内)暗青灰色5PB3/1 断)明黒灰色	室町時代 (14世紀末～15世紀前半)	和泉・河内型
46	瓦質土器羽釜	B区	第2面 SD5 (平面図)	体部1/3残存	残高16.9 口径28.8 羽根径32.0	外)暗青灰色5B3/1 内)黄灰色2.5Y4/1 断)灰白色N7/0～8/0	室町時代 (15世紀中頃～後半)	和泉・河内型
47	瓦質土器火鉢	B区	第2面 SD5 (平面図)	口縁部1/4残存	器高13.0 口径35.6 底径30.8	外)灰白色N8/0 ～暗青灰色5B4/1 内)暗青灰色5B4/1 断)灰白色N8/0	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	大和産 体部：菊花紋を押捺
48	瓦質土器火鉢	B区	第2面 SD5 (中・下層)	底部1/5残存	残高22.1 底径31.2	外内)青灰色5PB4/1 断)明黒灰色5PB7/1	室町時代 (15～16世紀代)	大和産
49	瓦質土器火鉢	B区	第2面 SD5 (平面図)	底部1/11残存	残高11.0 底径25.8	外)青灰色5PB6/1 内)暗青灰色5PB3/1 断)明黒灰色5PB7/1	室町時代 (14～15世紀代)	大和産
50	土師器皿	B区	第2面 SK1	ほぼ完形	器高1.8 口径7.6	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ顕著
51	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/4残存	残高2.1 口径10.3	外内断)灰白色5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
52	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/4残存	残高1.8 口径7.8	外内断)灰白色10Y8/2	室町時代 (16世紀初)	京都系 手づくね成形
53	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/4残存	残高2.3 口径10.2	外内断)灰白色10YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
54	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/4残存	残高1.4 口径7.3	外内断)灰白色10YR8/2	室町時代 (16世紀初)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ
55	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/5残存	残高1.7 口径8.2	外内断)灰白色10YR8/2	室町時代 (15世紀代)	京都系 内型成形
56	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/7残存	残高2.0 口径8.5	外)にぶい黄橙色10YR7/3 内)断)にぶい黄橙色10YR7/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
57	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/7残存	残高2.0 口径10.6	外)灰白色7.5YR8/2 内)浅黄橙色7.5YR8/3 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
58	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/5残存	残高1.8 口径7.9	外内断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
59	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/7残存	残高2.0 口径8.5	外)灰白色7.5YR8/2 内)浅黄橙色7.5YR8/3 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
60	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/6残存	残高2.4 口径9.4	外)橙黄橙色7.5YR8/4 内)灰白色10YR8/1 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形(切り込み円板技法)
61	土師器皿	B区	第2面 SK1	口縁部1/6残存	残高1.8 口径8.9	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
62	土師器皿	B区	第2面 P3	口縁部1/6残存	残高2.1 口径9.4	外内)灰白色2.5Y8/2 断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
63	土師器皿	B区	第2面 P3	口縁部1/6残存	残高2.2 口径9.9	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
64	土師器皿	B区	第2面 P1	口縁部1/3残存	残高1.5 口径8.4	外内断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
65	土師器皿	A区	第2面 SD9	口縁部1/5残存	残高1.7 口径8.9	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/2 ～褐灰色10YR6/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ
66	土師器皿	B区	第2面 P1	口縁部1/4残存	残高1.2 口径9.9	外内)灰白色2.5YR8/2 断)灰白色10YR8/1	鎌倉時代 (13世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
67	土師器皿	B区	第2面 SD10	口縁部1/6残存	残高1.9 口径10.3	外内)灰白色2.5YR8/2 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
68	土師器皿	B区	第2面 SK2	口縁部1/4残存 底部完存	残高1.4 口径7.0	外内)灰白色7.5YR8/2 断)灰白色7.5YR8/2 ～灰白色7.5YR8/1	室町時代 (16世紀前半)	京都系 手づくね成形
69	土師器皿	B区	第2面 P4	口縁部1/6残存	残高1.8 口径11.0	外内)灰白色10YR8/2 断)にぶい橙色5YR7/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
70	瀬戸美濃焼杯	B区	第2面 SD6	口縁部1/3残存	残高2.4 口径10.4	施釉)灰オリーブ色7.5Y6/2 素地)灰白色10Y8/1 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代	
71	瓦器椀	D区	第2面 SE1	口縁部1/7残存	残高4.9 口径16.0	外内)暗青灰色5PB3/1 断)灰白色10Y8/1	平安時代 (11世紀末)	和泉型(大阪南部産)
72	瀬戸美濃焼卸皿	D区	第2面 SD8	口縁部1/5残存	残高3.0 口径14.8	施釉)灰白色7.5Y8/1 内)灰白色7.5Y7/1	室町時代 (14世紀～15世紀前半)	内面：格子目状の擂目
73	備前焼擂鉢	D区	第2面 SE1	小片	残高5.6	外)にぶい橙色5YR6/3 内)灰白色N7/0 断)灰白色N7/0 ～灰色N5/1	鎌倉時代 (13世紀後半～14世紀初)	内面：9条1組の擂目
74	瓦質土器鍋	D区	第2面 SD8	口縁部1/9残存	残高4.7 口径28.8	外内)暗青灰色5PB3/1 断)暗青灰色5PB7/1	鎌倉時代 (13世紀代)	須恵器模倣品
75	土師器皿	B区	第2面 P7	口縁部1/6残存	残高1.3 口径9.3	外内断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系 手づくね成形
76	土師器皿	A区	第3面 SE2 裏込め土	口縁部1/5残存 底部完存	器高1.5 口径7.3	外内)灰白色2.5Y8/2 断)黄灰色2.5Y6/1 ～橙黄色2.5Y8/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
77	土師器皿	A区	第3面 SE2 裏込め土	完形	器高1.7 口径7.5～7.8 平均口径7.7	外内)橙黄色2.5Y8/3 断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
78	土師器皿	A区	第3面 SE2 裏込め土	口縁部1/7残存	残高1.6 口径8.9	外内断)灰白色2.5YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ
79	土師器皿	A区	第3面 SE2 裏込め土	口縁部1/6残存	残高1.9 口径11.8	外内)橙黄色2.5Y8/3 断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
80	土師器皿	A区	第3面 SE2 裏込め土	口縁部1/10残存	残高2.0 口径11.8	外内断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
81	土師器皿	A区	第3面 SE2 裏込め土	ほぼ完形	器高1.7 口径7.7～8.0 平均口径7.9	外)明黄灰色7.5YR7/2 内)にぶい橙色7.5YR7/4 断)にぶい橙色7.5YR6/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ
82	土師器皿	A区	第3面 SE2 裏込め土	口縁部1/7残存	残高2.0 口径11.7	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
83	須恵器甕	A区	第3面 SE2 裏込め土	体部小片		外)灰色7.5Y6/1 内)灰色7.5Y7/1 断)灰色7.5Y8/1	鎌倉～室町時代 (13～14世紀代)	東播系 焼成は土師質に近い 体部：櫛枝波様
84	瓦器皿	A区	第3面 SE2 井戸枠埋土	ほぼ完形	器高1.8 口径9.0	外内)灰白色N8/0 ～灰色N4/0 断)灰白色N8/0	室町時代 (15世紀前半)	和泉型(大阪南部産)
85	土師器皿	B区	第3面 P12	口縁部1/6残存	残高1.4 口径7.9	外内断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
86	土師器皿	B区	第3面 P12	口縁部1/5残存	残高1.3 口径9.0	外内断)灰白色10Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀前半)	京都系 内型成形
87	土師器皿	B区	第3面 SK4	口縁部1/4残存 底部残存	残高1.6 口径7.8	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ
88	土師器皿	B区	第3面 SK4	ほぼ完形	残高1.8 口径7.7	外断)灰白色10YR8/2 内)浅黄橙色10YR8/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：「の」字状ナデ上げ
89	土師器皿	B区	第3面 SK4	口縁部1/2残存	残高14.0 口径7.4	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
90	土師器皿	B区	第3面 SK4	口縁部1/2残存	残高2.2 口径11.2	外)灰白色7.5YR8/1 ～浅黄橙色7.5YR8/4 内)灰白色7.5YR8/2 ～黄橙色7.5YR7/2 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
91	土師器皿	B区	第3面 SK4	口縁部1/4残存	残高1.7 口径6.6	外断)灰白色10YR8/2 内)浅黄橙色10YR8/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
92	土師器皿	B区	第3面 SK4	口縁部1/4残存	残高1.5 口径8.0	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ
93	土師器皿	B区	第3面 SK4	口縁部1/4残存	残高1.5 口径6.5	外内)浅黄橙色7.5YR8/4 断)灰白色7.5YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
94	土師器皿	B区	第3面 SK3	口縁部1/11残存	残高1.9 口径10.5	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 口縁部に焼成前の孔あり
95	土師器皿	B区	第3面 P7	口縁部1/8残存	残高1.3 口径9.3	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
96	土師器皿	B区	第3面 P20	口縁部1/7残存	残高2.2 口径11.0	外)灰白色7.5YR8/2 内断)灰白色7.5YR8/1	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
97	土師器皿	B区	第3面 SK5	口縁部1/7残存	残高2.3 口径10.6	外)灰黄色2.5Y8/3 内)灰白色2.5Y8/2 断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
98	土師器皿	B区	第3面 SK5	口縁部1/9残存	残高2.2 口径13.0	外内断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
99	土師器羽釜	B区	第3面 P17	口縁部1/3残存	残高10.2 口径29.2 羽根径39.1	外内)灰黄色2.5Y7/2 断)黒色2.5Y2/1	不明 (13世紀頃か?)	在地産 第4面ベース層出土の破片と接合
100	土師器皿	D区	第3面 SD13	口縁部1/7残存	残高1.7 口径10.8	外断)灰白色10YR8/1 内)灰白色10YR8/2	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
101	土師器皿	D区	第3面 SD14	完形	器高1.7 口径7.6～7.8 平均口径7.7	外)灰白色10YR8/1 内)灰白色10YR8/2 断)不明	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
102	土師器皿	D区	第3面 SK6	口縁部1/3残存	器高2.3 口径10.6	外断)橙黄橙色7.5YR8/3 内)灰白色7.5YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
103	土師器皿	D区	第3面 SK6	口縁部1/7残存	器高1.7 口径10.6	外内)橙黄橙色7.5YR8/3 断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
104	土師器皿	D区	第3面 SK6	口縁部1/2残存	器高2.0 口径11.0	外内)灰色7.5YR8/2 断)にぶい橙色5YR7/4 ～明黄色7.5YR7/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
105	土師器皿	D区	第3面 SK6	完形	器高2.1 口径10.7～10.9 平均口径10.8	外内)橙黄橙色7.5YR8/3 断)不明	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 灯明皿(口縁部に灯芯油痕が付着) 底部:木目状痕
106	土師器皿	D区	第3面 SK6	口縁部1/3残存	器高2.2 口径12.0	外)褐灰色7.5YR4/1 内)橙黄橙色7.5YR8/3 断)橙黄橙色7.5YR8/4	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
107	土師器皿	D区	第3面 SK6	口縁部1/3残存	器高2.1 口径10.6	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
108	土師器皿	D区	第3面 SK6	口縁部1/7残存	残高2.4 口径16.3	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (15世紀前半)	京都系 内型成形
109	土師器羽釜	D区	第3面 SD12	口縁部1/7残存	残高7.7 口径28.2 羽根径41.8	外内)灰白色10YR8/2 断)黒色10YR1.7/1	不明 (13世紀頃か?)	在地産
110	土師器皿	D区	第3面 SD12	口縁部1/5残存	残高1.3 口径8.0	外)灰白色10YR8/2 ～灰黄褐色10YR8/2 内)灰白色10YR7/1 断)灰白色10YR8/1	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系 手づくね成形

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
111	瓦器椀	D区	第3面 SD12	口縁部1/8残存	残高3.1 口径13.3 高台径3.4	外)青灰色5PB3/1 内)青灰色5PB3/1 ～明緑灰色5P7/1 断)灰白色10Y8/1	鎌倉時代 (13世紀中頃)	和泉型 口縁調整せず 内面：粗い渦巻き状暗文
112	土師器杯	B区	第4面 SD15	完形	器高2.5 口径11.8	外内)灰白色10YR8/1 断)不明	鎌倉時代 (12世紀末～13世紀前半)	京都系 手づくね成形
113	土師器皿	B区	第4面 SD16	底部1/3残存	器高1.5 口径6.5	外内断)灰白色10YR8/2	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系 手づくね成形
114	土師器皿	B区	第4面 SK6	口縁部1/3残存	器高1.6 口径10.0	外内)橙黄橙色10YR8/3 断)灰白色10YR8/1	鎌倉時代 (13世紀中頃)	京都系 手づくね成形
115	土師器皿	C区	第4面 P41	口縁部1/10残存	残高1.0 口径10.4	外内断)灰白色10Y8/1	平安時代 (11世紀末～12世紀前半)	京都系 手づくね成形
116	土師器皿	B区	第4面 SD17	口縁部1/6残存	残高2.1 口径11.6	外内)灰白色2.5Y8/2 断)灰白色2.5Y8/1	平安時代 (11世紀末～12世紀初)	京都系 手づくね成形
117	土師器皿	B区	第4面 SK7	口縁部1/5残存	残高1.3 口径8.2	外内)にぶい橙色7.5YR7/3 断)明褐灰色7.5YR7/2	鎌倉時代 (13世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
118	土師器鍋	B区	第4面 SK7	口縁部1/4残存	残高12.8 口径37.2	外)全面煤が付着 内)灰黄色2.5Y7/2 断)灰白色2.5Y8/1	不明 (13世紀頃か？)	在地産
119	白磁椀	B区	第4面 SD18	口縁部1/4残存	残高1.7 口径15.4	施釉)灰白色7.5Y8/1 断)灰白色10Y8/1	平安時代 (11世紀後半～12世紀前半)	貿易陶磁器(中国宋代)
120	土師器皿	D区	第4面 SD19	完形	器高1.5 口径8.0	外断)灰白色10YR8/1 内)橙黄色2.5Y8/3	鎌倉時代 (13世紀後半)	京都系 手づくね成形
121	土師器皿	D区	第4面 SD19	ほぼ完形	器高1.3 口径8.8	外内断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉時代 (13世紀後半)	京都系 手づくね成形
122	土師器皿	D区	第4面 SD19	口縁部1/4残存	器高1.2 口径9.0	外内断)灰白色2.5Y8/1	鎌倉時代 (13世紀前半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
123	土師器皿	D区	第4面 SD19	口縁部1/3残存	器高1.1 口径8.3	外内断)灰白色10YR8/2	鎌倉時代 (13世紀中頃)	京都系 手づくね成形
124	土師器皿	D区	第4面 SD19	口縁部1/3残存	器高1.1 口径9.2	外内断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉時代 (13世紀後半)	京都系 手づくね成形
125	土師器皿	D区	第4面 SD10	口縁部1/9残存	器高1.4 口径8.8	外内)にぶい黄橙色10YR7/2 断)灰白色10YR8/2	鎌倉時代 (13世紀前半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
126	瓦質土器鍋	D区	第4面 SK9	口縁部1/4残存	器高8.7 口径22.2	外内)暗青灰色5PB3/1 断)明紫灰色5P7/1	鎌倉時代 (13世紀後半～)	魚住窯模倣製品
127	土師器皿	A区	第5面 SD23	口縁部2/3残存	器高1.8 口径7.5	外内)灰白色7.5YR8/2 断)灰白色10YR8/2～灰赤色2.5YR6/2	室町時代 (15世紀代)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
128	土師器皿	A区	第5面 SD23	完形	器高1.6 口径7.2～7.5 平均口径7.4	外断)橙黄橙色10YR8/4 内)灰白色10YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
129	土師器皿	A区	第5面 SK15	口縁部1/3残存	器高1.9 口径8.4	外)浅黄橙色10YR8/3 内)灰白色10YR8/2 断)浅黄橙色10YR8/4	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 底部：木目状痕
130	土師器皿	A区	第5面 SK15	口縁部1/6残存	器高1.9 口径10.8	外)灰白色2.5Y8/1 内)暗黄色2.5Y8/3 断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 灯明皿(口縁部に灯芯痕が付着)
131	土師器皿	A区	第5面 SK15	口縁部1/6残存	器高2.2 口径11.6	外)灰黄褐色10YR4/2 内)にぶい黄橙色10YR5/4 断)にぶい黄橙色10YR8/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
132	須恵器壺	A区	第5面 SK15	体部小片		外)明褐灰色7.5Y7/2 内)にぶい黄橙色10YR6/3 断)浅黄橙色7.5YR8/3	鎌倉～室町時代 (13～14世紀代)	擂鉢底 外底は土師質に近い 体部外面：櫛状紋様のタタキ目
133	土師器鍋	A区	第5面 SK15	口縁部1/10残存	残高6.3 口径43.8	外)灰黄褐色10YR6/2 内)にぶい黄橙色10YR7/3 断)褐灰色10Y4/1	不明 (13世紀頃か？)	在地産
134	須恵器擂鉢	A区	第5面 SK15	口縁部1/5残存	残高7.1 口径24.8	外内断)灰色N4/0	室町時代 (15世紀前半)	東播系
135	土師器皿	A区	第5面 SD20	口縁部1/8残存	器高2.0 口径11.3	外内断)灰白色10YR8/2	鎌倉時代 (13世紀後半)	京都系 手づくね成形
136	土師器皿	A区	第5面 SE3 井戸枠埋土	ほぼ完形	器高1.9 口径6.7～9.2 平均口径9.0	外内)にぶい黄橙色10YR7/2 断)橙色7.5YR7/6	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形 灯明皿(口縁部に灯芯痕が付着)
137	須恵器擂鉢	A区	第5面 SE3 井戸枠埋土	口縁部小片	残高4.0	外内断)灰色7.5YR6/1	鎌倉～室町時代 (13世紀後半～14世紀前半)	東播系
138	須恵器擂鉢	A区	第5面 SE3 裏込め土	口縁部小片	残高4.5	外内)暗青灰色10GB4/1 断)青灰色10GB5/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀前半)	東播系
139	瓦質土器鍋	A区	第5面 SK14	口縁部1/8残存	残高5.0 口径26.0	外内)灰白色N8/0 ～灰色N5/0 断)灰白色N8/0～N7/0	室町時代 (14世紀後半)	京都型
140	土師器皿	A区	第5面 SK14	口縁部1/2残存	残高2.1 口径10.8	外内)浅黄色2.5Y8/3 断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ
141	土師器皿	A区	第5面 SK14	口縁部1/4残存	残高1.8 口径9.4	外内)灰白色10YR8/2 断)浅黄橙色10YR8/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
142	土師器皿	A区	第5面 SK14	口縁部1/5残存	残高1.0 口径8.9	外内断)浅黄色2.5Y8/3	鎌倉時代 (13世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
143	土師器皿	A区	第5面 SK14	口縁部1/5残存	残高1.5 口径8.0	外内)灰白色10YR8/1 断)灰白色10YR8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
144	土師器皿	A区	第5面 SK14	口縁部1/4残存	残高1.7 口径8.3	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
145	土師器皿	A区	第5面 SD21	口縁部1/6残存	残高1.7 口径11.6	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/2 ～褐灰色10YR4/2	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
146	瓦器椀	A区	第5面 SD21	口縁部1/6残存	残高3.2 口径11.4	外内)暗青灰色5B3/1 断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (13世紀中頃)	和泉型 内面：3～5㎜幅の粗い暗文 和泉型 内面：3～5㎜幅の粗い暗文
147	瓦器椀	A区	第5面 SD21	口縁部1/3残存	器高3.0 口径11.4 高台径2.0	外内)灰白色N8/0 断)灰色N4/0	鎌倉時代 (13世紀中頃)	和泉型 内面：平行状暗文 底部が高台から僅かに出る
148	瓦器椀	A区	第5面 SD21	口縁部1/2残存	残高3.3 口径11.4	外)灰色N4/0 内断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (14世紀初)	和泉型 外面：手持ちヘラ削り 内面：板ナデ
149	瓦質土器 ミニチュア羽釜	A区	第5面 SD21	羽根部1/4残存	残高4.5 口径5.1 羽根径8.2	外)灰白色N8/0～暗青灰色5PB3/1 内)灰白色N8/0～灰色N6/0 断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (14世紀前半)	京都型 体部：脚付椀の一部が残る
150	瓦質土器羽釜	A区	第5面 SD21	口縁部1/7残存	残高43.2 口径9.8 羽根径14.6	外内)暗青灰色5B3/1 断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (12世紀末)	京都型
151	土師器皿	A区	第5面 SK11	口縁部1/4残存	器高1.5 口径8.6	外内断)にぶい黄橙色10YR7/2	鎌倉時代 (13世紀後半)	京都系か？ 手づくね成形
152	瓦器椀	A区	第5面 P43	口縁部1/5残存	器高3.2 口径11.0	外)灰色N4/0 内)灰色N4/0 ～明紫灰色5P7/1 断)明紫灰色5P7/1	鎌倉時代 (13世紀末～14世紀初)	和泉型 内面：細く不明瞭な暗文
153	土師器杯	B区	第5面 SD24	口縁部1/11残存	器高1.7 口径14.6	外内断)灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半)	内型成形
154	瓦質土器羽釜	C区	第5面 P55	口縁部1/5残存	残高5.6 口径12.2 羽根径23.2	外内)暗青灰色5PB4/1 断)明紫灰色5PB7/1	鎌倉時代 (12世紀末)	京都型 第5面ベース層出土の破片と接合
155	瓦器椀	C区	第5面 P53	口縁部1/7残存	器高12.3 口径12.7 高台径3.6	外内)灰色N4/0 ～灰白色N8/0 断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (13世紀中頃)	和泉型 内面：不定方向の粗い暗文
156	土師器皿	D区	第5面 SD25	口縁部1/5残存	器高1.2 口径11.0	外内断)浅黄橙色10YR8/3	鎌倉時代 (14世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
157	土師器皿	D区	第5面 SD25	口縁部1/6残存	器高2.6 口径12.3	外)灰白色7.5YR8/1 内)にぶい橙色5YR7/3 断)浅橙色5YR8/3	平安時代 (12世紀前半)	京都系 手づくね成形
158	土師器皿	D区	第5面 SD25	口縁部1/4残存	器高1.2 口径9.8	外断)灰白色10YR8/2 内)にぶい黄橙色10YR7/2	鎌倉時代 (13世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
159	土師器皿	A区	第5面 SD23	口縁部1/9残存	器高1.9 口径11.2	外断)浅黄色2.5Y8/3 内)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (14世紀後半)	京都系 手づくね成形
160	瓦器椀	D区	第5面 SD25	口縁部1/8残存	器高4.2 口径15.6	外断)灰白色2.5Y8/2 内)灰白色2.5Y8/2 ～黄灰色2.5Y5/1	平安時代 (12世紀中頃～後半)	楠葉型か？ 焼成は土師質に近い

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
161	須恵器捏鉢	A区	第5面 SD23	口縁部1/2残存	器高4.7 口径28.4	外内)灰色N6/0 口縁外)灰色N4/0 断)灰白色N7/0	鎌倉～室町時代 (13世紀後半～14世紀前半)	東播系
162	土師器皿	A区	第5面 SD23	口縁部1/4残存	器高1.6 口径7.5	外内断)灰白色10YR8/2	室町時代 (14～15世紀代)	京都系 内面成形
163	須恵器椀	D区	第5面 SD25	全体70%残存 高台完存	器高5.2 口径14.6 高台径5.2	外内)灰色N4/0 ～灰色N6/0 断)灰色N4/0～灰色N7/0	平安時代 (11世紀後半)	底部：回転糸切り痕
164	土師器羽釜	A区	第5面 SD23	胴部1/8残存	器高 11.3 口径38.4	外内)にぶい黄橙色10YR7/3 断)灰色5Y5/1	不明 (13世紀頃か？)	在地産
165	土師器羽釜	C区	第6面 P63	口縁部1/6残存	残高9.6 口径29.4 羽根径40.9	外)灰白色10YR8/2 内)にぶい橙色5YR6/3 断)褐灰色10YR4/1	不明 (13世紀頃か？)	在地産
166	瓦器皿	C区	第6面 P63	口縁部1/11残存	残高1.4 口径8.8	外内)暗青灰色5B3/1 断)明青灰色5PB7/1	平安時代 (11世紀後半)	
167	土師器甕	C区	第6面 SD26	口縁部1/14残存	残高2.4 口径28.2	外)赤灰色2.5YR5/1 内)明褐灰色5YR7/1 断)にぶい赤褐色2.5Y5/4	平安時代 (10世紀後半～11世紀初)	
168	土師器杯	C区	第6面 P61	口縁部1/10残存	残高2.8 口径12.6	外)浅黄橙色10YR8/3 内断)灰白色10YR8/2	平安時代 (11世紀後半)	南河内産 手づくね成形
169	瓦器椀	C区	第6面 P77	口縁部1/5残存	残高4.0 口径14.2 高台径4.5	外内)灰白色N8/0 断)灰色N4/0	鎌倉時代 (13世紀初)	和泉型 内面：粗い平行＋ラセン状磨き
170	土師器皿	B区	第7面 SD31	口縁部1/7残存	残高1.3 口径10.2	外内断)浅黄色2.5YR8/3	平安時代 (11世紀後半)	京都系 手づくね成形
171	土師器杯	B区	第7面 SD31	口縁部1/6残存	残高2.7 口径16.0	外内断)灰白色10YR8/2	平安時代 (11世紀後半)	南河内産 手づくね成形
172	須恵器鉢	B区	第7面 SD31	口縁部1/6残存	残高3.9 口径10.6	外)明紫灰色5P7/1 内)暗青灰色5PB4/1 断)明紫灰色5RP7/1	平安時代 (11世紀後半)	東播系 貼り出し高台 整付け：糸切り後にナデ
173	土師器皿	B区	第7面 SD30	口縁部1/7残存	残高1.8 口径9.0	外)灰黄色2.5Y7/2 ～2.5Y6/2 内)灰白色2.5Y7/1 ～黄灰色2.5Y6/1 断)灰白色2.5Y8/2	平安時代 (11世紀末～12世紀初)	京都系 手づくね成形 口縁端面：浅い凹線状
174	土師器皿	B区	第7面 SB2 (P64)	口縁部1/4残存	残高1.8 口径9.7	外)灰白色10YR8/2 ～浅黄橙色10YR8/3 内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/1	平安時代 (11世紀末～12世紀初)	京都系 手づくね成形 口縁部内面：煤が付着(灯明皿か？)
175	土師器皿	B区	第7面 SD29	口縁部1/10残存	残高2.0 口径10.0	外断)浅黄橙色10YR8/3 内)黄橙色10YR8/6	平安時代 (11世紀末～12世紀初)	京都系 手づくね成形 口縁端部：浅い凹線状
176	土師器皿	C区	第7面 SD33	口縁部1/4残存	残高1.3 口径9.6	外)灰白色10YR8/2 内)灰白色10YR8/2 ～褐灰色10YR5/1 断)灰白色10YR8/1	平安時代 (11世紀前半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
177	土師器杯	B区	第7面 SD32	底部1/9残存	残高3.3 口径15.9	外)明褐灰色5YR7/2 内)明褐灰色5YR7/2 ～褐灰色5YR8/1	平安時代 (11世紀後半)	南河内産 手づくね成形
178	瓦器椀	B区	第7面 SD32	高台1/6残存	器高6.5 口径15.2	外内断)灰白色7.5Y8/1	平安時代 (12世紀初)	楠葉型 燻しがかからず土師質に近い
179	土師器皿	B区	第7面 SD32	底部1/9残存	残高1.4 口径9.8	外内)灰白色7.5YR8/2 断)淡橙色5YR8/3	平安時代 (11世紀末)	京都系 手づくね成形
180	土師器杯	B区	第7面 SK17	口縁部1/8残存	残高3.5 口径17.2	外内)灰白色5Y8/1 断)灰白色5Y8/1 ～灰色5Y4/1	平安時代 (11世紀後半)	南河内産 手づくね成形
181	瓦器椀	B区	第7面 SK17	口縁部1/7残存	残高4.2 口径15.6	外内断)灰白色10Y8/1	平安時代 (12世紀初)	楠葉型 燻しがかからず土師質に近い
182	須恵器甕	B区	第7面 SK17	口縁部1/7残存	残高4.8 口径22.7	外)緑灰色10GY5/1 内)明緑灰色7.5GY7/1 断)明紫灰色5RP7/1	平安時代か？	
183	須恵器甕	D区	第8面 SX4	口縁部1/11残存	残高4.1 口径23.4	外内)灰白色N7/0 断)灰白色N8/0	飛鳥時代 (7世紀後半)	
184	陶器鍋	B区	第2層	口縁部1/10残存	残高7.4 口径18.0 胴径16.0	施釉)浅黄色5Y7/4 露胎断)灰白色5Y8/1	江戸時代 (18世紀後半～19世紀前半)	京焼か？ 上下接合できないが同一個体と思われる
185	磁器染付皿	B区	第2層	高台1/5残存	残高1.8 高台径6.6	呉須)暗緑灰色10GY4/1 ～明青灰色10G7/1 施釉)明青灰色5B7/1 断)灰白色N8/0	江戸時代 (18世紀頃か？)	
186	煙管	試掘	第2層相当	吸口部完形	残長11.5 吸口長11.1 径1.1		江戸時代 (18～19世紀代)	真鍮製 竹製の羅宇が一部残存
187	土製玩具人形	B区	第2層	胴部片	残高7.4 全幅18.0 奥行2.6	外内断)灰白色7.5Y8/1	幕末～近代初 (19世紀代)	型合わせ成形 胎土は磁器
188	瓦質土器仏花瓶	B区	第3層	頸部1/3残存	残高5.3	外内)灰白色5Y8/2 断)灰色7.5Y4/1	室町時代 (15～16世紀代)	線刻で縦の基準線を引き、雷紋のスタンプ紋を押捺 焼成は土師質に近い
189	瀬戸美濃焼筒茶碗	B区	第3層	高台1/4残存	残高3.1 胴径6.8 高台径4.0	施釉)灰オリーブ色7.5Y6/2 露胎)灰色7.5Y6/1 断)灰白色5Y7/1	江戸時代 (17世紀後半)	桜高台
190	土師器皿	A区	第4層	口縁部1/6残存	残高2.5 口径10.6	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/2 ～灰色10YR6/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
191	土師器皿	A区	第4層	口縁部1/8残存	残高2.6 口径15.9	外)灰白色2.5Y8/2 内断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (15世紀後半)	京都系 内型成形
192	瓦質土器鍋	B区	第4層	口縁部1/3残存	残高7.0 口径26.6	外)灰色5Y4/1 内断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀後半)	京都型
193	瓦質土器羽釜	A区	第4層	口縁部1/9残存	残高7.6 口径22.7 胴径25.1	外)灰色5Y5/1 内)黄灰色2.5Y5/1 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (15世紀末～16世紀初)	和泉・河内型 焼成は土師質に近い

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
194	瓦質土器羽釜	A区	第4層	口縁部1/6残存	残高7.9 口径30.4 胴径39.0	外)灰白色10Y7/1 内)灰白色10Y6/1 断)灰白色10Y8/1	室町時代 (15世紀末～16世紀初)	和泉・河内型
195	瓦質土器羽釜	A区	第4層	口縁部1/12残存	残高8.0 口径34.7 胴径43.6	外)内)暗青灰色5PB3/1 断)灰白色N8/0	室町時代 (15世紀後半)	和泉・河内型
196	瓦器椀	B区	第4層	高台1/2残存	器高3.5 口径13.0 高台径3.4	外内)灰白色N8/0 ～灰色N5/0 断)灰色N5/0	鎌倉時代 (13世紀中頃)	和泉型 内面：粗い不定方向の暗文
197	瀬戸美濃焼椀	D区	第4層	口縁部1/15残存	残高3.3 口径16.8	施釉)灰白色7.5Y7/2 断)灰白色7.5Y8/1	室町時代 (15世紀末)	
198	瀬戸美濃焼皿	D区	第4層	口縁部1/10残存	残高2.4 口径13.5	施釉)灰オリーブ色7.5Y5/2 断)灰白色10Y8/1	室町～安土桃山時代 (16世紀後半)	鉄皿
199	土師器皿	B区	第5層 SX1	ほぼ完形	器高1.5 口径8.2～8.4 平均口径8.3	外内断)灰白色10YR8/2	鎌倉時代 (13世紀後半)	京都系 手づくね成形
200	瓦器椀	B区	第5層 SX1	高台1/4残存	器高3.6 口径14.2 高台4.1	外内断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (13世紀初)	和泉型 内面：格子状＋ラセン状暗文
201	瓦器椀	B区	第5層 SX1	高台1/2残存	器高2.9 口径11.4 高台3.0	外内)灰白色N8/0 ～灰色N4/0 断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (13世紀後半)	和泉型 内面：粗い平行状暗文
202	瓦器椀	B区	第5層 SX1	口縁部1/3残存	器高3.2 口径12.3 高台2.4	外内)灰白色N8/0 ～灰色N4/0 断)灰白色N8/0	鎌倉時代 (13世紀後半)	和泉型 内面：板ナデ後に一部磨き
203	須恵器擂鉢	B区	第5層 SX1	底部1/5残存	器高10.0 口径28.3 底径8.6	外内断)灰白色N7/0 口縁部)灰色N5/0	鎌倉時代 (13世紀後半～14世紀前半)	東播系
204	須恵器甕	B区	第5層 SX1	体部片		外)暗青灰色5B3/1 内断)明青灰色5PB7/1	鎌倉～室町時代 (12世紀後半～13世紀前半)	東播系(魚住窯) 外面：縦杉板状タタキ目 内面：ハケ目 焼成は瓦質に近い
205	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/7残存	残高2.2 口径12.2	外)灰白色10YR7/1 内)灰白色10YR8/1 断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系 手づくね成形
206	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/7残存	残高2.2 口径13.6	外)灰白色10YR8/2 内断)灰白色10YR8/1	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
207	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/7残存	残高2.1 口径12.3	外内断)灰白色2.5Y8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
208	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/4残存	残高2.4 口径11.4	外内)灰白色5Y8/1 断)灰色5Y6/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
209	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/4残存	残高1.7 口径8.6	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (15世紀代)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
210	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/4残存	残高1.7 口径7.6	外)灰白色7.5YR8/2 内)灰白色2.5YR8/2 断)灰白色2.5YR8/1	室町時代 (16世紀前半)	京都系 手づくね成形

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
211	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/7残存	残高2.3 口径11.1	外)にぶい橙色5YR6/4 内)橙色7.5YR7/6 断)灰白色5YR8/1	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	京都系 手づくね成形
212	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/4残存	残高1.5 口径7.0	外内断)灰白色2.5Y8/2	室町時代 (15世紀前半)	京都系 内面：「2」字状ナデ上げ
213	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/4残存	残高2.4 口径10.4	外)浅黄橙色7.5YR8/4 内断)浅黄橙色7.5YR8/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
214	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/3残存	器高1.8 口径8.6	外)浅黄色2.5Y8/3 内)にぶい黄橙色10YR8/1 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
215	土師器皿	D区	第5層	口縁部1/7残存	器高2.1 口径10.3	外内)橙色5YR7/6 断)にぶい橙色5YR7/4	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形 内面：ナデ上げ
216	土師器皿	B区	第5層	口縁部1/5残存	残高2.4 口径11.6	外)灰白色10YR8/2 内)浅黄橙色10YR8/3 断)灰白色10YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
217	土師器皿	D区	第5層	口縁部1/6残存	残高2.2 口径10.6	外)灰白色10YR8/1 内)灰白色10YR7/1 断)浅黄橙色10YR8/4 ～5YR7/3	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 手づくね成形
218	土師器皿	D区	第5層	口縁部1/4残存	残高1.6 口径7.4	外)灰白色10YR8/1 内)灰白色10YR8/2 断)浅黄橙色7.5YR8/4 ～灰白色7.5YR8/1	室町時代 (14世紀後半～15世紀代)	京都系 内面：「の」字状ナデ上げ
219	瓦器椀	B区	第5層	口縁部1/6残存 高台1/3残存	残高3.2 口径12.2 高台径4.2	外)灰白色7.5YR7/1 ～灰色N5/0 内)灰白色7.5YR7/1 ～青灰色5PB5/1 断)灰白色7.5YR7/1	鎌倉時代 (13世紀中頃)	和泉型 内面：平行線状暗文 高台は一周せず
220	瓦器椀	B区	第5層	口縁部1/6残存	残高5.5 口径10.8	外)内)灰白色N7/0 ～灰色N4/0 断)灰色N4/0	鎌倉～室町時代 (14世紀前半)	和泉型 内面：板ナデ後にラセン状暗文 外面：板ナデ
221	備前焼擂鉢	D区	第5層	口縁部1/12残存	残高5.4 口径27.0	外)黄灰色2.5Y5/1 縁帯)赤灰色2.5YR6/1 内)赤灰色2.5YR4/1 断)灰色N6/0	室町時代 (15世紀後半)	内面：4条(以上)1組の擂目
222	白磁椀	B区	第5層	高台部完存	残高1.1 高台径3.4	施釉)灰白色7.6Y8/1 露胎断)灰白色10Y8/1		貿易陶磁器 高台内に黒痕？による「○」描き
223	白磁椀	B区	第5層	高台部完存	残高1.3 高台径3.7	施釉露胎断)灰白色7.5Y8/1	室町時代 (15世紀中頃)	貿易陶磁器 見込みに4重の目廻(胎土目) 椀高台：内面はロクロ削り
224	白磁合子蓋	B区	第5層	口縁部1/5残存	器高1.8 口径6.6	施釉)明緑灰色10GY8/1 露胎)明緑灰色7.5GY8/1 断)灰白色N8/0	平安時代 (11世紀後半～12世紀前半)	貿易陶磁器(中国宋代)
225	瓦質土器鉢	B区	第5層	口縁部1/11残存	残高3.6 口径30.4	外内)黒褐色2.5Y3/1 断)褐灰色7.5YR6/1	鎌倉時代 (14世紀初)	胎土は土師質に近い

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
226	青磁椀	B区	第5層	口縁部1/9残存	残高2.9 口径14.4	施釉)灰オリーブ色7.5Y5/3 断)灰白色7.5Y7/1	鎌倉～室町時代 (13～14世紀代)	貿易陶磁器(中国南宋代) 龍泉窯系
227	瓦質土器火鉢	B区	第5層	口縁部小片	残高2.9	外内)暗青灰色5PB4/1 断)明紫灰色5P7/1	室町時代 (15世紀後半)	口縁部：花菱紋を押捺
228	白磁椀	B区	第5層	高台1/4残存	残高2.4 高台径4.8	施釉)灰白色5GY8/1 露胎)灰白色10GY8/1 断)灰白色N8/0	平安～鎌倉時代 (12世紀中頃～13世紀前半)	貿易陶磁器(中国南宋代) 見込みに圏線
229	青磁椀	B区	第5層	高台1/3残存	残高2.6 高台径6.0	施釉)オリーブ灰色 2.5GY5/1 高台内)にぶい赤褐色 5YR4/4 断)灰白色N8/0	室町時代 (15～16世紀代)	貿易陶磁器 龍泉窯系 見込みに重ね焼き痕
230	土師器皿	B区	第6層	口縁部1/7残存	残高1.5 口径9.8	外)灰白色2.5Y8/1 内)灰白色7.5Y8/1 断)灰白色2.5Y8/2	平安時代 (11世紀後半)	京都系 手づくね成形
231	土師器皿	B区	第6層	口縁部1/4残存	器高1.2 口径8.2	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/2 ～褐灰色10YR6/1	鎌倉時代 (13世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形 内面：ナデ上げ
232	須恵器甕	B区	第6層	体部小片		外)赤灰色2.5YR4/1 内)褐灰色10YR5/1 断)にぶい橙色2.5Y6/4	奈良～平安時代 (8～11世紀代)	東播系(札馬窯)か？ 外面：格子タタキ目 内面：平行タタキ目
233	白磁椀	A区	南側溝 第6層	高台1/2残存	残高2.4 高台径6.8	施釉)明緑灰色7.5GY8/1 露胎)灰白色2.5GY8/1 断)灰白色N8/0	平安時代 (11世紀後半～12世紀前半)	貿易陶磁(中国宋代) 見込みに圏線状の凹線
234	土師器鍋	B区	第6層	口縁部1/6残存	残高6.1 口径35.4	外)全面煤付着のため不明 内)灰黄褐色10YR6/2 断)灰白色10YR7/1	不明 (13世紀頃か？)	在地産
235	須恵器擂鉢	B区	第6層	口縁部1/12残存	残高4.1 口径28.0	外内断)灰白色N4/0	鎌倉～室町時代 (13世紀後半～14世紀前半)	東播系
236	備前焼擂鉢	A区	第6層	口縁部1/16残存	残高6.4 口径30.0	外)暗赤褐色7.5YR3/3 内)灰白色N7/0 断)暗赤褐色7.5YR3/3 ～灰白色N7/0	鎌倉～室町時代 (13世紀中頃～14世紀前半)	内面：5条1組の擂目 焼成は須恵質に近い
237	備前焼擂鉢	D区	第5層+ 第6層	口縁部1/11残存	残高4.9 口径35.0	外内断)明赤灰色7.5R7/1	室町時代 (14世紀後半)	内面：2組の擂目が重複か？
238	備前焼擂鉢	D区	第6層	底部1/5残存	残高6.9 底径14.2	外)灰白色10YR8/2 内)灰白色N6/0 断)にぶい橙色5YR7/4 ～灰白色N6/0	室町時代 (14世紀中頃～15世紀前半)	内面：7条1組の擂目 焼成は土師質に近い
239	瓦質土器羽釜	B区	第6層	口縁部1/14残存	残高6.7 口径24.0 羽根径28.4	外内)灰色N4/0 断)灰白色7.5Y8/1	鎌倉時代 (13世紀後半～13世紀中頃)	京都型
240	瓦質土器羽釜	B区	第6層	口縁部1/11残存	残高7.8 口径28.4 羽根径34.2 胴径29.6	外)黒褐色2.5Y3/1 内)黒褐色2.5Y3/1 ～灰黄褐色10YR5/2 断)灰褐色5YR6/2 ～黒色5YR1.7/1	室町時代 (15世紀前半)	京都型 口縁部に焼成後の孔あり

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
241	須恵器はそう	B区	第7層	胴部1/8残存	残高4.8 胴径15.6	外内断)灰色N6/0	古墳時代中期 (5世紀後半)	
242	須恵器はそう	B区	第7層	胴部1/5残存	残高4.3 胴径8.8	外)灰色N5/0 内断)灰色N6/0	古墳時代後期 (6世紀中頃)	
243	土師器皿	A区	第7層	口縁部1/4残存 底部1/2残存	器高1.3 口径7.6	外)にぶい黄橙色10YR7/2 内断)にぶい黄橙色10YR7/3	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系 手づくね成形
244	土師器皿	C区	第7層	口縁部1/4残存	器高1.2 口径8.8	外内断)灰白色10YR8/1	鎌倉時代 (13世紀代)	京都系 手づくね成形
245	瓦器椀	B区	第7層	高台3/4残存	器高4.3 口径14.0 高台径4.4	外断)灰白色10YR8/1 内)灰白色10YR8/1 ～暗灰色N3/0	鎌倉時代 (13世紀初)	和泉型 内面：平行状＋ラセン状暗文
246	瓦器椀	B区	第7層	高台9/10残存	残高1.3 高台径6.0	外内断)灰白色5Y8/1	平安時代 (11世紀後半)	和泉型
247	緑釉陶器椀	A区	第7層	高台1/6残存	残高2.7 高台径8.2	施釉)灰白色10Y7/2 断)灰白色2.5Y8/2	平安時代 (9世紀代)	猿投産 摩滅著しく僅かに釉薬が残る 胎成は土師質に近い
248	青磁椀	B区	第7層	高台1/3残存	残高3.9 高台径6.0	施釉)灰オリーブ色7.5Y5/2 断)明紫灰色5P7/1	平安時代 (12世紀中頃～後半)	貿易陶磁器(中国南宋代) 龍泉窯系 見込に圏花散
249	須恵器平瓶？	B区	第8層	底部1/2残存	残高2.6 胴径11.0 底径6.2	外内断)灰色N5/0	奈良～平安時代 (8～9世紀)	
250	土師器杯	B区	第8層	口縁部1/4残存	残高3.9 口径16.4	外)浅黄橙色7.5Y8/6 内)浅黄橙色7.5Y8/3 断)浅黄橙色7.5Y8/4	平安時代 (11世紀後半)	南河内産 手づくね成形
251	土師器杯	D区	第8層	口縁部1/18残存	残高3.0 口径16.2	外内断)灰白色10YR8/2	平安時代 (11世紀後半)	南河内産 手づくね成形
252	土師器杯	D区	第8層	口縁部1/12残存	残高2.7 口径14.9	外内断)灰白色2.5Y8/2	鎌倉時代 (13世紀前半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
253	瓶型土製品	D区	第8層	正面剥庇～掛口	残高5.8	外)灰白色10YR8/2 内断)灰白色2.5Y8/1		
254	土師器皿	D区	第8層	口縁部1/4残存	残高1.4 口径9.0	外内断)灰白色2.5Y8/2	平安時代 (12世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形
255	土師器皿	B区	第8層	口縁部1/5残存	残高1.3 口径10.0	外断)浅黄橙色10YR8/3 内)浅黄橙色10YR8/4	平安時代 (12世紀後半)	乙訓周辺産か？ 手づくね成形 切り込み円板技法か？
256	土師器皿	D区	第8層	口縁部1/6残存	残高2.0 口径10.0	外断)灰白色2.5Y8/2 内)浅黄色2.5Y8/3	平安時代 (11世紀後半～12世紀前半)	手づくね成形
257	緑釉陶器椀	B区	第8層	高台1/10残存	残高1.9	外内)緑灰色1.5GY5/1 断)赤灰色5R6/1 ～にぶい橙色2.5YR6/3	平安時代 (9世紀末～10世紀初)	京産産 見込に圏線状の凹み
258	緑釉陶器椀	D区	第8層	高台1/5残存	残高1.7 高台径6.8	施釉断)灰白色10YR8/2	平安時代 (9世紀代)	摩滅著しく一部に釉薬が残る 胎成は土師質に近い

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
259	瓦器皿	B区	第8層	口縁部1/8残存	残高2.0 口径10.8	外内)暗青灰色5B3/1 断)明青灰色5PB7/1	平安時代 (11世紀後半～12世紀初)	内外面：横方向の磨き
260	瓦器椀	B区	第8層	高台1/5残存	残高2.7 高台径6.4	外内)暗青灰色5B3/1 断)灰白色N8/0 ～青灰色5B5/1	平安時代 (12世紀後半)	椀高型 内面側面：横方向の磨き 内面底部：磨きなし
261	土師器皿	D区	第9層	口縁部1/6残存	器高1.5 口径9.6	外)黄橙色10YR8/6 内)浅黄橙色10YR8/4 断)灰白色10YR8/1	平安時代 (11世紀後半～12世紀初)	京都系 手づくね成形
262	土師器杯	B区	第10層	口縁部1/5残存	残高2.5 口径14.4	外内)灰白色10YR8/1 断)灰白色2.5Y8/2	平安時代 (11世紀代)	南河内産 手づくね成形
263	土師器杯	B区	第10層	口縁部1/10残存	残高1.4 口径14.6	外内断)灰白色10YR8/2	平安時代 (11世紀代)	南河内産 手づくね成形
264	須恵器瓶子	B区	第10層	高台1/3残存	残高4.7 高台径5.6	外)明紫灰色5R7/1 内断)灰白色N7/0	平安時代 (9世紀初)	
265	白磁椀	B区	第10層	口縁部1/8残存	残高4.0 口径15.0	施釉)灰白色2.5GY8/1 露胎)灰白色10GY8/1 断)灰白色N8/0	平安時代 (11世紀後半～12世紀前半)	貿易陶磁器(中国宋代)
266	須恵器鉢	C区	第12層	口縁部1/8残存	残高3.4 口径12.6	外内断)灰白色7.5GY8/1	平安時代 (10世紀前半)	
267	須恵器瓶子	C区	第14層	高台1/3残存	残高2.8 高台径2.2	外内断)灰白色N8/0	平安時代 (9世紀初)	ミニチュア土器
268	須恵器器台	B区	第12層	脚部小片	残高3.6	外)灰色N6/0 内)灰白色N7/0 断)赤灰色5R6/1	古墳時代中期 (5世紀中頃～後半)	透かし推定8方向
269	須恵器甕	A区	第13層	口縁部1/8残存	残高3.2 口径21.2	外)灰色N6/0 内)灰白色N5/0 断)灰白色10Y8/1	古墳時代後期 (6世紀中頃)	頸部に「×」のヘラ記号
270	土師器皿	D区	第12層	口縁部1/8残存	残高2.5 口径14.8	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/2 ～赤色10R5/6	平安時代 (11世紀代)	京都系 手づくね成形
271	土師器杯	C区	第14・A層	口縁部1/11残存	残高2.9 口径14.4	外内断)にぶい黄橙色 10YR7/2	平安時代 (9世紀末～10世紀初)	
272	須恵器杯蓋	B区	第14・A層	口縁部1/5残存	残高4.1 口径13.6	外)灰色N4/0 内)青灰色5B6/1 断)赤灰色5R5/1	古墳時代後期 (6世紀中頃)	
273	須恵器杯蓋	C区	第14・A層	宝珠つまみ～天井部残存	残高1.3	外)青灰色5B6/1 内断)暗青灰色5PB7/1	奈良～平安時代 (8～9世紀)	
274	須恵器杯蓋	B区	第14・A層	口縁部1/10残存	残高1.2 口径12.4	外内)灰色N5/0 断)灰赤色10R5/2	奈良～平安時代 (8世紀後半～9世紀初)	
275	雛型土製品	B区	第14層	庇と炊口の小片	残高5.2	外断)灰黄褐色10YR6/2 内)褐灰色10YR5/1		
276	須恵器平瓶？	D区	第14層	底部1/6残存	残高6.7 胴径18.5 底径9.2	外内)灰色7.5Y6/1 断)明紫灰色5RP7/1	飛鳥時代 (7世紀後半)	

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
277	弥生土器壺	B区	第15層	口縁部小片	残高3.5	外断)にぶい橙色7.5YR5/3 内)灰褐色7.5YR5/2	弥生時代後期 (1～2世紀代)	口縁部：櫛描き列点紋＋円形浮紋
278	弥生土器壺	B区	第15層	口縁部1/4残存	残高2.7 口径11.4	外内断)灰白色2.5Y8/2	弥生時代後期 (1～2世紀代)	
279	土師器甕	A区	第15層	頸部1/6残存	残高7.2 口径17.6	外内断)灰白色10YR7/1	古墳時代中～後期 (5世紀後半～6世紀代)	
280	土師器皿	A区	第15層	口縁部1/10残存	残高2.3 口径15.2	外内)灰白色10YR8/2 断)灰白色10YR8/1	平安時代 (11世紀後半)	混入品か？
281	須恵器杯身	A区	第15層	口縁部1/7残存	残高3.1 口径14.2 受部径16.6	外内)灰色N6/0 断)紫灰色5RP6/1	古墳時代後期 (6世紀後半)	
282	須恵器甕	B区	第15層	口縁部1/7残存	残高2.4 口径16.2	外内)灰色N5/0 ～灰色10Y7/1 断)灰白色10Y7/1	飛鳥時代 (7世紀中頃)	頸部に「キ」状のヘラ記号
283	須恵器短頸壺	B区	第15層	底部1/2残存	残高6.4 口径10.0 底径4.9	外)灰色10Y6/1 内断)灰黄色2.5Y7/2	古墳時代後期 (6世紀後半)	
284	弥生土器壺	B区	第17層	口縁部1/4残存	残高4.0 口径14.8	外内断)にぶい黄橙色 10YR7/2	弥生時代後期 (1～2世紀代)	
285	平瓦	B区	第2面 SD5 (平面図)		残長17.3 残幅10.2 厚さ2.1	凹)灰色N6/0 凸)灰色N5/0 断)灰白色N8/0	室町時代	凹面：指ナデ 凸面：ナデ、離れ砂痕
286	丸瓦	B区	第2面 SD5 (中層)		残長19.2 残幅11.3 厚さ2.2	外内)暗青灰色5B3/1 断)灰白色N8/0	室町時代	内面：コビキ痕をナデ消し
287	平瓦	B区	第8層		残長11.8 残幅5.4 厚さ2.0	凹凸)黄灰色2.5Y5/1 断)にぶい黄橙色10YR7/2	平安時代 (9世紀代)	凸面タタキ技法 凹面：布目痕 凸面：縄目タタキ痕
288	平瓦	C区	第10層		残長7.0 残幅7.6 厚さ2.0	凹)灰色7.5Y6/1 凸)灰白色7.5Y7/1 断)灰白色7.5Y8/1	平安時代 (9世紀中頃～11世紀中頃)	凸面タタキ技法か？ 凹面：布目痕、模骨痕 凸面：コビキ痕、縦方向のケズリ
289	平瓦	D区	第14・A層		残長6.2 残幅8.2 厚さ2.3	凹凸)灰白色2.5Y8/1 断)黄灰色2.5Y5/1	平安時代 (9～10世紀代)	凸面タタキ技法 凹面：布目痕 凸面：縄目タタキ痕
290	平瓦	B区	第14・A層		残長4.4 残幅4.0 厚さ2.4	凹凸)灰白色5Y7/1 断)灰白色5Y8/1 ～にぶい黄橙色10Y7/3	奈良時代 (8世紀代)	凸面タタキ技法 凹面：布目痕 凸面：格子目タタキ痕
291	平瓦	D区	第5面 SD25		残長6.3 残幅4.9 厚さ2.4	凹)灰色N6/0 凸)灰色N4/0 断)灰色N8/0	平安時代 (9～10世紀代)	凸面タタキ技法 凸面：縄目タタキ痕
292	木製品杭	B区	第1面 北壁	先端部残存	残長42.2 径6.2			
293	木製品柱根	B区	第4面 P26	下部完存	残長38.3 径11.9			断面形を八角形に加工

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
294	木製品杭	B区	第5面 SX3	先端部	残長35.6 径9.1			
295	木製品鋤	B区	第6面 P58	柄部完存	全長30.2 上部径16.5 下部径12.8			斜め方向にホゾ孔を穿つ
296	不明木製品	B区	第2面 SD5		残長9.2 全幅5.6 厚さ0.4～1.4			
297	漆器皿	A区	第5面 SK15	80%残存	残高1.0 口径9.0 高台推定径5.3	黒漆)赤黒色7.5R 2/1.7 朱漆)赤色10R 4/8	鎌倉～室町時代 (13～14世紀代)	内外面とも黒漆塗り 見込みに朱漆の複輪 底部に高台低脚
298	木製品曲物	A区	第5面 SK15	ほぼ完形	器高6.9 底径20.6		中世	釘孔2箇所残存 打込底 内面垂直方向の平行内面ケビキ線
299	木製品箸	A区	第5面 SK16	ほぼ完形	残長21.8 径0.7			両口
300	木製品曲物	A区	第5面 SE3	ほぼ完形	器高22.4 底径36.4		中世	井戸の水溜めに転用 かすい板3箇所残存 樹皮は樺織しの方法
301	不明木製品	B区	第6面直上	ほぼ完形	全長14.8 全幅10.8 器高8.4			6面すべてに加工痕あり
302	木製品下駄	B区	第6面直上	ほぼ完形	全長20.6 全幅8.8 高さ3.7		鎌倉時代？ (13世紀頃か？)	連歯下駄 左足用 親指・人差し指・踵の加重痕あり
303	滑石製温石	A区	第7層	ほぼ完形	残長7.7 全幅7.0 厚さ1.5		中世	石鍋片を再利用して3辺を二次加工
304	石製品砥石	B区	第1面 SM5		残長5.3 全幅3.5 厚さ6.5		鎌倉時代以降	真岩製(京都周辺産) 偏約1寸の短冊形
305	石製品砥石	B区	第2面 SD5		残長6.6 全幅5.6 厚さ4.7			砂岩製(西北九州産)
306	石製品砥石	A区	第5面 SK15		残長10.4 全幅3.8 厚さ2.2			砂岩製(西北九州産)
307	銭貨「寛永通寶」	D区	第2層	完形	径2.5 厚さ1.1		日本銭・江戸時代 (1636年始鋳)	
308	銭貨「政和通寶」	B区	第3層	完形	径2.5 厚さ1.3		中国・北宋代 (1111年始鋳)	
309	銭貨「開元通寶」	B区	第2面 SD5 (上層)	完形	径2.5 厚さ1.2		中国・唐代 (621年始鋳)	

番号	器種	調査区	層位・遺構	残存状況	寸法(cm)	色調	時期	備考
310	銭貨「元豊通寶」	C区	第2面 SD7	完形	径2.5 厚さ1.5		中国・宋代 (1078年鋳銭)	
311	石器石鏃	D区	第4層	一部欠損	残長3.2 全幅1.8 器厚0.35		弥生時代	凹基無茎鏃
312	サヌカイト片	B区	第2面 SD5		器長2.6 器幅2.2 器厚0.7			剥片
313	サヌカイト片	D区	第5層		器長4.4 器幅3.4 器厚0.9			石核か？
314	サヌカイト片	B区	第6層		器長3.25 器幅2.3 器厚0.6			剥片

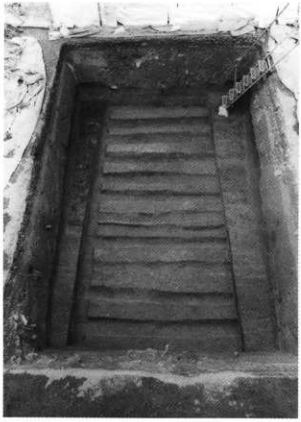
報告書抄録

ふりがな	くろうどいせきはっくつちょうさほうこくしょⅡ
書名	蔵人遺跡発掘調査報告書Ⅱ
副書名	蔵人遺跡第17次発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	堀口健二
編集機関	吹田市教育委員会
所在地	〒564-0041　大阪府吹田市泉町1丁目3番40号　TEL　06(6384)-1231
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
蔵人遺跡	吹田市江坂町2丁目588-3	27205	85	34°45′49.7″	135°29′39.9″	19961120～19970306	225.46	共同住宅の建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蔵人遺跡	集落遺跡	弥生時代	なし	弥生土器、石鏃	なし
		古墳時代	畦畔	須恵器、土師器	なし
		奈良時代	ピット、溝、流路、落ち込み、足跡	土師器	なし
		平安時代	畦畔、溝、ピット、柱穴、掘立柱建物跡、井戸、落ち込み、足跡	土師器、緑釉陶器、白磁	条里地割に合う溝
		鎌倉時代	溝、ピット、柱穴	土師器、瓦器、下駄、槌	条里地割に合う溝
		室町時代	ピット、柱穴、掘立柱建物跡、井戸、土坑、溝、流路、畝	土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、青磁、陶器、曲物、漆器、箸、砥石、温石	条里地割に合う溝
		江戸時代	なし	陶磁器、銭貨、煙管、土人形	なし

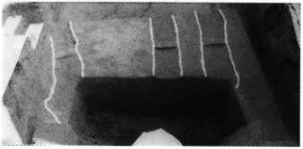
図版1　A区全景（1）



第1面（東から）

第2面（東から）

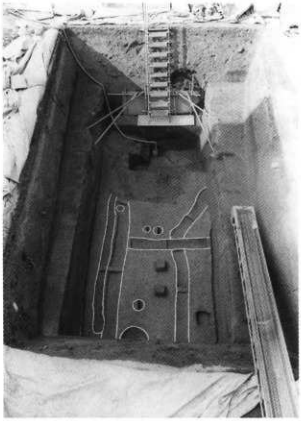
第3面（東から）



第4面（東から）　上：東半部（東から）
下：西半部（西から）

図版2　A区全景（2）

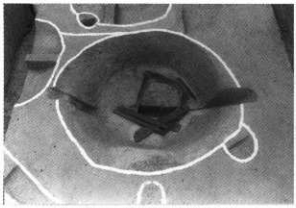
第5面（東から）



第7面（東から）

第8面（東から）

第9面（東から）



第3面　井戸ＳＥ2（東から）

同・断面（東から）

同・井桁（西から）

同・瓦器皿（84）出土状況

第5面　土坑ＳＫ15（北から）

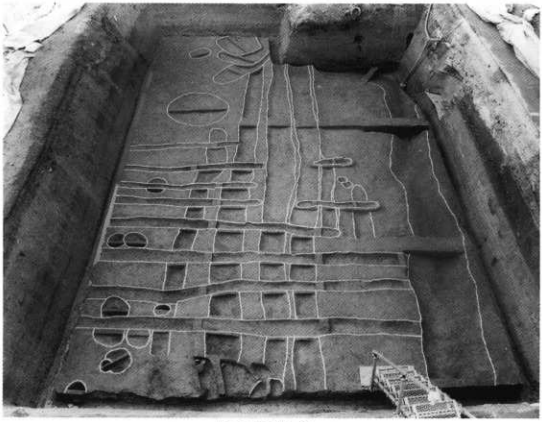
同・曲物（298）出土状況

第5面　井戸ＳＥ3断面（東から）

同・水留（230）

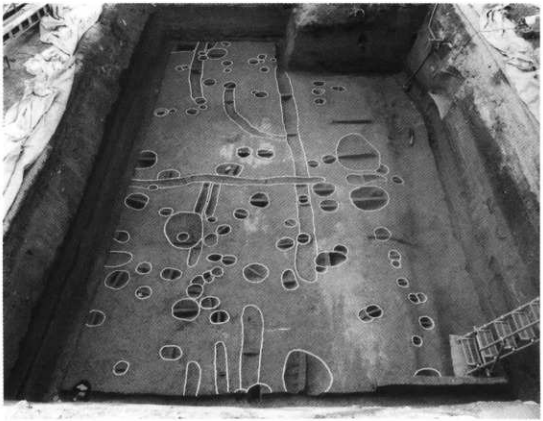
図版4　B区全景（1）

第1面（東から）

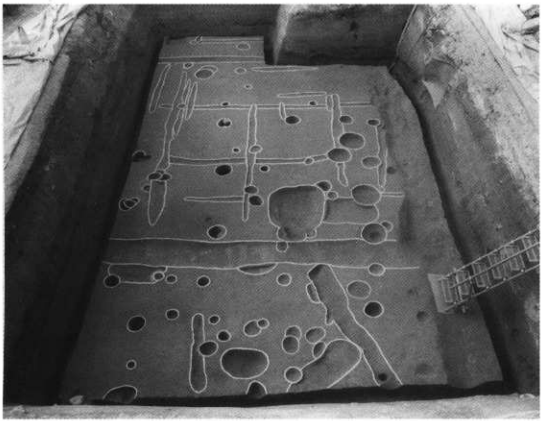


第2面（東から）

図版5　B区全景（2）

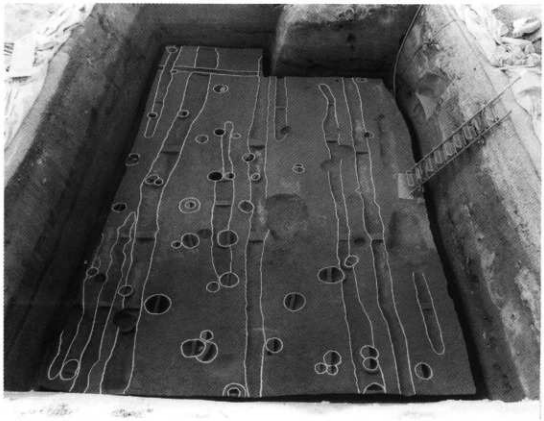


第3面（東から）

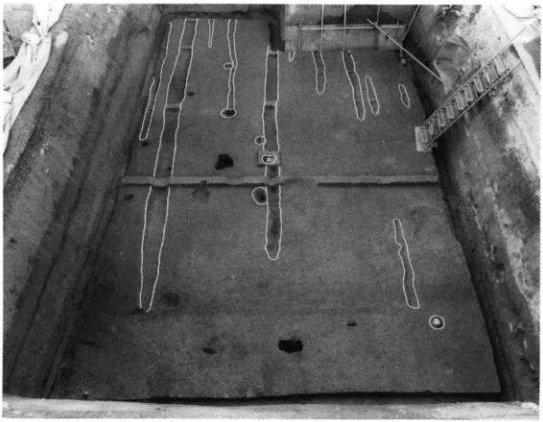


第4面（東から）

図版6　B区全景（3）

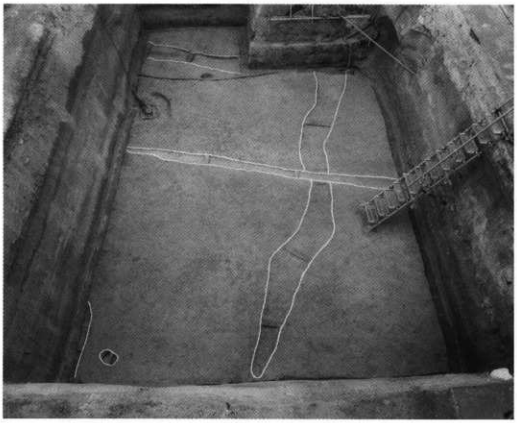


第5面（東から）



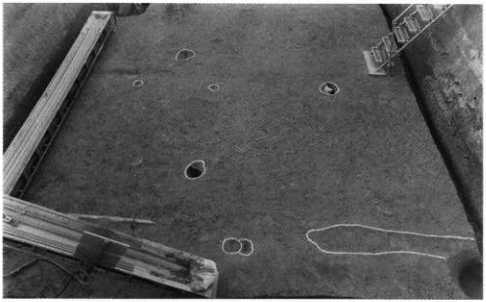
第6面（東から）

第7面（東から）



第10面（東から）

図版8　B区全景（5）



第8面
（東から）

第9面
（西から）

第11面
（西から）